吾人は前著に於て、一切の合理的思想、行爲の標準にして、理性の中に存する本原の觀念に就て考察するところありき(Philosophical Basis of Theism, pp. 180, 182)何れの場合と雖も、此等の觀念の一にして若し其思想行爲を整理するときは、個物の中に普般の現はれずといふことなし、

右の觀念の中、其第一は眞といふことにして、其反對は妄なり、此れ實に物を考へ且物を知るの標準なりとす、吾人は個存者を知ると共に其中に普般、必然なる眞理を發見す、而して此等の眞理たる、何れの時何れの處を問はず、其系附する凡ての實躰に通して敢て變することあるなし、吾人は吾人の思想行爲を照導整理する此等の眞理を意識の中に有するを以て、一個の各個的に就て十全の知識を得る毎に、必ず自己が普般的の理性と相接見することを發見せずんばあらず、故に神は我等各を去ること遠からずとは吾人の智力上の生活に對して切當の語にして、吾人が智力上彼によりて活き、又動き、又存するを得るといふことも眞實なりとす、

理性の本原的觀念の第二は善といふとなり、即ち凡ての期成行爲の標準たるものをいふ、凡て理性の要むる眞は行爲の理法なり、物形的實躰に關する學術上の知識は、其中に其實躰の知識と其行爲の理法の知識とを含有す、宇宙に存する個存的の作用者は、學術に啓示するに、普般理法が宇宙を支配することを以てす、而して意識的にして自由なる行爲に於て、其行爲者は善を行ふべき義務あることを意識し、隨て之と共に絶對普般の大法あるを意識す、且此義務の意識によりて、絶對理性は人の精神裡に告げて自己が至上權を有することを其良心に啓示するなり、一切の道義的行爲は神の律法に直接の關係を有す、吾人が一の道義上の行爲を見て、其心髓たる意義を知り得るは、唯吾人が該關係を知り、又右の如く普般が各個の中に自己を啓示するときに在りとす、聖書に注目すべき活喩的の句あり、曰く、アベルの血は地より神に號べり、曰く、汝曹が其の田を收獲せし雇人に予ざる値は叫び其收獲し者の呼聲は既に萬軍の主の耳に達れりと、蓋し此等の語の中には深き哲理を含む者と謂はざるべからず、人の道義的意識中には神の啓示あり、人と普般、永遠、及絶對との直接關係に屬する大事實も、人が普般的道義系の一要素たることも、人が宇宙の典法たる神の知慧及愛の永遠法に順ひ若くは背くに隨ひ、神に對して有する責任も、皆該道義的意識中に發現す、抑も人の良心は神の法の反照にして、又宇宙道義

的本性の對映なり、

若し夫れ全（パーフェクト）といふ合理的觀念に至りても亦右と同じ、美（ビューティー）とは即ち全の理想が具躰的の或物象に現はれたるものを云ふ、夫れ一の理想に到達せんと欲せば、唯合理的眞理を表現し、而して合理的理法に合する外道あるべからず、即ち其自然と、人工とを問はず、凡て思想上の創造物（クリエーション）及び其實現物（リアライゼーション）に對して、理性が依て以て此は全なり、此は不全なりと判斷を下すところの標準と相契合せざるべからず、故に凡て美なる物に於ても凡て高尚なる品格に於ても、凡て技術上の作に於ても、個物の眞意を解せんと欲せば、其中に普般的なるものは至要至切にして欠くべからざるものなり、是を以て以上の者の中には絶對理性の啓示せられずといふことなし、

プラトー嘗て神は幾何學的働をなすと云へり、神が宇宙を創造するに素型的眞理を表現し、又精確なる理法に隨ふ、此れ即ち神が宇宙を美に造りし所以なり、美とは常に理想的全の顯現にして、此の如き創造は合理的理法に隨ひ、又合理的眞理を表現する者なり、故に若し神にして幾何學者なりとせば、此と同意義に於て、神は技術家たらざるべからず、故に萬有は皆に學術の啓示なるのみならず、又理想及美の啓示なり、然り而して學術も美も共に個物の中に普般の啓示せられたるものに外ならず、學術は宇宙の中に神の思想を讀み、技術は人造物の中に此思想を再現す、此意義を以て、するときは、夫の一見誇大に失するの嫌あるキチーの言も其當を得たるものなりと謂ふべし、曰く「神靈は諸種の形を現じて、毎に眞の美術家の心眼に往來する活摸型なり」と、

眞の美術は必ず有限、個物及具躰的の中に普般的の眞理を表現せざるべからず、若し美術者にして唯普般的のみに注意することあらば、彼は何物をも創作するとなく徒に勞するのみ、若し單に有限及個物に留意することあらば、其創作物は毫も理想的の價値を有せず、又何の美をも含むことなし、眞の美術とは、其神的なると、人的なるとを問はず、個物及個存の中に普般の眞理を啓示することにてあるなり、シルレルは左の巧妙の句を以て眞と美の同一なるとを述たり、即ち

Was wir als Schoenheit hier empfunden, Wird Einst als wahrheit uns entgegen gehn.

Schiller, Die Künstler, stanza5.

人は自己と宇宙との間に、其覺官も以て知覺すること能はず、又形而下學の如く精

密なる法式を以て解明し能はざる一種の關係あることを發見す、夫の星學者が數理上より精密に計算せる結果によりて記載する日月星辰なるものは、吾人の靈性に啓示するに、如何なる天躰動學も解定し能はざる、左りとて又其中に隱伏せる精確なかりせば、到底啓示すべからざる偉觀を以てす、今夫れ光學者が其三稜鏡を以て分解する天空の虹霓及ひ變化極りなき浮雲の色は、稜鏡上の分解によりて發表することとも、解定することとも能はざる實躰を人心に啓示す、且宇宙は美を以て充滿するが故に、學術的に之を認知し得べきが如く、詩學的にも之を認知することを得べし、

"The world is full of poetry; the air
Is living with its spirit; and the waves
Dance to the music of its melodies
And sparkle in its brightness."

世界は詩歌を以て充滿し　大氣は其靈に依りて活動す　波濤は其瀏亮の音樂に伴れて舞ひ　其淪漣の光を以て輝く

然り而して詩學が宇宙に發見する者は、實在にして是れ即ち有限者の裡に啓示せられたる永遠理性の眞理なり、永遠理性の理想を宇宙に讀むの詩學は、其の原理及ひ理法を讀むの學術と均しく宇宙に實在を發見する者なり、其の眞理を發見するの道や相異なりと雖も、有限者の形狀を具へて表現せる普遍の眞理を發見するに至ては則ち一なり、夫の黃紅白紫の色を交へ、粲爛たる曉天の光彩を欺くばかりなる花英は、其美容佳色の裡に、永遠心意の理想を啓示す、然り而して吾人又學術の光に照らして、「嫣然として笑ふ」の花を考察するとき、即ち其有機組織と生命との中に現はれたる妙智を見、之を一切植物の代表者として認め、且其生長の間、一切の萬有力は其全力を傾け、以て其複雜細緻なる組織を經營し、之に賦するに相和合せる色を以てし、之に注ぐに馥郁の香を以てし、以て之を生出せし者として之を考ふる時は、吾人の感情は忽ち一躍して、美の情より宗教の情に進み來らざるを得す、是に於てかミルトンが彼の知識樹の前に跪拜するエバを描き出すが如く、吾人は平々凡々たる一草花の前にも跪坐して以て、

草木の中に宿り玉ふ大能の神を　謙りて敬ひまつる、

ことなからんとするも得さるなり、而して吾人は夫のウォズウォースの語の決して誇大に失するものにあらさることを認む、曰く、

我は咲き笑ふ世のつねの花を見て　淺墓なる情もて測り難き深き思想をぞ悟る

"To me the meanest flower that blows can give
Thoughts that do often lie too deep for tears."

Wordsworth.

是れ一の世界の中に一箇の世界を啓示し、一の系統の中に一個の系統を啓示するものなり、即ち物系によりて覆はるゝも之れを通じて啓示せられたる靈系にして、人の靈眼に啓示するに、物系の眞趣と眞價とを以てする者なり、嗚呼天地は神の榮光を顯はす、固より其啓示せられたる榮光は、幽影暗黑の爲に妨げらるゝに相違なし、是れ猶大陽の光が、其照す所の地球及び暗黑躰の爲に蔽はれ、妨げられ、而して其通過する所の物に由て屈折せらるゝが如し、然れども其啓示は、縱ひ完全ならざるにもせよ、常に絕躰理性の素型的思想、及び神の全智全愛を、完全に表發せんが爲に、

着々進んで止まざるなり、

若し夫れ福に關し、人の享有し、使用し得べき一切の物に關しても、理性は其一定不變の原理に由り、理性者の追求、享樂するに足るべき者、及び眞の價値を有する者を判定す、凡そ人の計畫及び享得するとは、唯理性の眞理は理法及び理想に之を照すに由りて、其眞正の福を有するや否を知り得べし、是を以て之を見れば、吾人日常普通の追作に於ても、普般は特殊の中に啓示せられ、而して一切の者皆普遍理性なる神と直接の關係を有するを見るべし、

且つ吾人の已に論ぜしが如く、人間の理性にして正則に發達するときは、必ず絕待者の存在するとを信ぜざるを得ず、蓋し絕待者の存在は、一切の學術的思想及ひ一切の合理的知識に對して缺く可らざるの公準なり、若し一箇にても實在者存在すとせば、必ず永遠、無碍にして一切を制限する所の實在者も亦存在せざる可らず、若し然らずとせんか、是れ合理的知識なる者成立せさる者なり、之を以て之を見れば、絕待にして無碍なる者、有限にして有碍なる萬物の中に啓示せらるゝ者と云はざるを得ず、

且つ夫れ絶待理性なる神の存在は、一切の實躰を合理系の中に統一し、以て之を曉得せんが爲に、至要にして缺く可らざる者なり、抑も思想の認知辨別する所の物を統一して、之を解得するは、是れ思想の職分なり、而して思想なる者は、一切己知の實躰を合理系の中に統一して、以て之を曉得せずんば休せざるものなり、然るに此事たる絶待理性を認め、之を以て其表現若くは啓示たる一切の實躰及ひ宇宙の究竟基礎と爲すに非ずんば、出來得べからざるの事なり、吾人若し此絶待理性を認識するとなくんば、學術は永く完全に達するの期なく、思想は永く四分五裂して收拾す可からざるべく、而して人の理性は其必至の問題を解釋すると能はずして、不能且信據す可らざる者と成り了らんのみ、

神の存在するとに對して、人の智力的本性中に發見せらるべき他の證據は、即ち獨り有神說のみ能く人間心意の信賴すべきと、及び人間知識の眞實なるとに對して合理的の基礎を供するの事實にありとす、

夫れ一切の學術は皆某の大自定を根據とせざる者なし、吾人が既に幾回となく論せしが如く、學術は宇宙の道理に合すると、及ひ人の之を知り得べく、又智能を以て

之を說明し得べきとを自定す、蓋し悖理なる者は眞實なると能わずして、眞實なる者は悖理なると能わさるべし、學術は又萬有が不變性及ひ不斷性を有するとを自定し、且同一の原因は常に同一の結果を生ずるとを自定ず、然り而して此意義を以てせば、萬有は眞實にして信賴すべく、吾人が觀察せる同一の事實は、能く吾人をして何れの處、何れの時を問はず、同一の推定を爲すとを得せしむ、學術は又自定すらく、理性は一切の空間及ひ時間を通して同一なりと、蓋し若し以上の自定なしとせんか、吾人は宇宙に關する一切の合理的知識を有すると能わざる可く、而して宇宙を探究して之を學術的に知らんと欲するが如きは、殆んど狂愚の所爲たらざるを得ざる可し、人若し吾人が物を知るの能力を有するとを信ずるに何の擔保を有するかを問はんか、吾人は之に答へて云んとす、曰く、知識の眞實なるとは物を知るの作用に由て知らるゝものなりと、吾人は實に斯く答ふべし、然れとも斯く云へばとて、吾人は敢て知識の眞實なるとを證明し得べしと云ふには非ざるなり、何となれば知識は唯知識に由りて確定せらる可きものにして、吾人の能く爲す所は、一個の心理的作用に由り、一個の源泉より得たる知識をば、他の源泉より若しくは他の心

理的作用によりて得たる同一物の知識を以て確定するに過きず、事理已に此の如し、吾人は勢ひ原始、直接にして撲滅す可らざる確信、即ち人の心意は合理、睿智にして信頼すべきものなると、及び人間知識の眞實なるとを信せざるを得ざるなり、萬有懐疑説に陷るべき説は、虚僞の説として之を擯斥せざるべからず、不らずんば彼のフイスク氏が言へる如く、「此れ吾人をして永く智力上紛亂の境に彷徨せしむるものなり、而して予は未だ曾て、何人も吾人をして斯る恐るべき説を採用せしむべき充分の理由を擧げたるものあるを見ず、否な遂に之を擧ぐるものあらざるべし、(The Destiny of Man, p. 116.)學術にして神を有せずんば、深遠の域に進むと能わざるなり、吾人は吾人心意の全本性が要求する所のとを眞正として受容せざるを得ず、若し一の説を否定するとき勢ひ人心の全本性を信頼すべからざるものとなれば吾人は必ず其説を受容せざるべからず、

即ち有神説は學術をして成立せしめ、知識をして眞實ならしむる所の以上一切の本原的自定に對して、合理的の基礎を吾人に與ふるものなり、有神説は宇宙を以て絶待理性に基する者となし、而して人は有心者として此の理性を共有するものなりと肯定す、此に於てか、人は其觀察する所の宇宙の各部が、自己の智能の如き理性の表發なることを知り、宇宙は何れの所何の時に於ても、合理的にして解得すべきものなることを知り、萬有の完全、理性の表發として不變不斷なるとを知り、且萬有は斯の如きものなるが故に、眞實にして信頼すべく、其事實は以て正當確實の推論に對する論據と爲すを得べく、其現象は合理的の説明を爲し得べきものなることを知る、此に於て人は人間知識の眞實なるとに對して、確乎不拔の基礎を發見するなり、是を以て見れば、若し有心的の神たる普遍理性にして存在するとなく、且人にして之と同一種の理性を稟有すると無くんば、吾人は永く智力上紛亂の境に彷徨せざるを得ざるべしとの結論は、蓋し免かるべからざるものなりとす、斯く神の存在は學術の成立に對し、人間理性の信頼すべきとに對し、及ひ合理的智能の成立に對して缺くべからざるものと謂はざるべからず、

夫れ宇宙の基礎は、實在より別離したる眞理若くは思想たる可からずして活動する所の理性、有心的の靈、有心的の神たらさる可からず、近世或る記者ありて論ずらく、「懐疑家の性癖は每に實在を以て思想の根據とするに在り、……之を救治すべ

き方は、其れ唯た思辨哲學に在るか、蓋し思辨哲學とは彼の萬有なる客觀及ひ凡の意識なる主觀の基礎を以て實在と爲さずして、之を思想と爲し、實在を以て思想の充足せる所より發射せる單獨の射出物若しくは一個の動力となし、而して此單獨の動力は、一切を籠蓋せる『合計』中の他の動力と相關係して始めて活動するに至る者と見做す所のものなり」と、然るに該著者は其同一論文に於て、此と相撞着するが如きの言を爲して曰く、「苟も吾人にして、思想は實在者の尤も純粹なる變形にして、又尤も明白なる自解たると、即ち實在は思想によりて自ら其內部を開示し、自己の中に自己を反照し、以て己れに反るとを會得せんか、苟も吾人思想なるものゝ眞面目を意識するに至らんか、吾人は決して實在固有の外發性が、此の深奥の思想に附屬するや否やを問ふを須ひざるべし、……苟も思想を以て實在が、其己に反るものとなすの人にしあらば、思考する所の主觀が思想に伴隨し、且之と相離る可らざる者なるとを疑ふ能わざる可し、蓋し思考するの主觀なくんば、思想あること能わざるなり」と、今此說をして前きに揭げたる說と相一致せしめんと欲せば、思想を以て元始の者と假定し、而して實在を以て之に因起し來れる者と假定してのみ纔に之を能くす可し、然れとも若し思想を以て實在の變形及ひ自解と爲すときは、自己を變形し及ひ解明する所の實在は、思想に先て存する者ならさる可らず、若し思想にして之を思考するの主觀なくんば存し能わさる者とせんか、然らば思想は思考者に附屬すべき者にして、思考者は思想に附屬すべき者に非ず、思想を組成する者は思考者にして、思想が思考者を生出するには非らさるなり、蓋し思想は思考者を生ばし自己に示すとを得べし、然れとも思考者を創造すると能はざる者なり、人の心意は固より彼の獨り本躰なるものを以て宇宙の根基と爲す所の說を斥けざるを得ず、然にして虛無と同一なる實在を以て宇宙の根基と爲すスピノザ說、若くは茫邈れども凡ての實在者の基礎として思想を揭げ來るが如きに至つては、是れ徒に意味なき言語を弄するものに過ぎずして、彼の實際に存する實在者及ひ其實在者の勢力及ひ活動と、論理の運用とを混同し、宇宙の基礎を以て普通總念若くは普通名稱と爲すヘーグル說にあり振れたる誤謬に陷れるものゝ一例に外ならず、故に此說たる、論理上の運用と抽象的言語の迷廊に陷りて、其途を失ひたるものなりとす、蓋し該著者の說を究むるに、其虛僞なる觀念の存するところは、即ち論理上思考者

の定義を下すとき、其中に思想といふ觀念を包含預想するが故に、思想は思考者に先だち、隨て其實在の根據とならざるを得ずと云ふに在るが如し、

果して思想にして宇宙の根基たるとを得べくんば、吾人は此に至て何等眞の實在を有する所の神を認むると能はず、却て神の代りに吾人は唯主觀的に人の智能の中に存する抽象的の思想及ひ理法のみを有するに至るべし、何んとなれば吾人は此等の思想及ひ理法を付す可き絶待理性を有せざればなり、然り而して此徒に放言高論する哲學は宇宙を變化して、一個心理上の妄想となし、而も其妄想の主觀たるべき有心者を供せざる者と成り果つべきのみ、

以上論ずる所よりして吾人は勢結論せざるを得ず、曰く、宇宙の究竟基礎は抽象的本躰若しくは不限定の實在者たる可らず、若くは抽象的思想即ち智能たる可らずして、此二者を合せる者、即ち絶待理性、永遠の靈、有心的の神たらさる可らずと、是れなり、一切の有限者は之に因て生し、而して其思想及能力を啓示す、彼の物質及ひ物質力は永遠の靈の成果、表現にして、其能力と智能、其智惠と愛を啓示す、彼の思想は凡の有限者に先て存す、然れども神たる絶待者の中に永遠に存在する者なり、一切

の眞理、一切の理法、完全の一切の理想、及び眞正の福を判定する所の、價値に關する一切の合理的觀念は皆神の中に永遠に存す、且宇宙に活動する所の能力、及び其智惠と愛とは神の中に永遠に存す、蓋し此智惠と愛とは、神が有限の宇宙にありて一切の素型的眞理、理法、理想及び福を着々進で實現し、且是によりて自己の全能力及ひ其全智全愛を進歩的に啓示せんが爲め、自ら活動する其活動を指導一定する者なりとす、故にポスエーは理性に存する數理的及ひ其他必然、普般の眞理を論ずるの後曰く、「若し予が萬有の中に見る所の一切の者にして破壞せらるゝとも、苟も予にして存せん限は、此等の原理たる、我思想の中に保存せらるべし、加之、予は若し予にして殲滅せらるゝとも、此等の眞理は常に眞正なるべきとを見る、若し予此等の永遠、不變の眞理は何處に存し、如何なる主觀の中に在るやを問はんか、予は一の實在者の存するありて、其中に眞理の永遠に存するものなるとを認めさるを得ず、一切の宇宙に存する眞理の因て來りしは即ち此實在者にして、予が此等永遠の眞理を見るは其一種予が曉得し能はさる方法を以て、此實在者の中に存するによれり、此等の眞理を見るは是れ取も直さず、萬世不變に眞理たるところの者に予の面を

對するなり、其光を受け納るゝなり」Traité de la Connaisance de Dieu et de soi même chap. iv, Oeuvres, tome v, p 82.

(二)人の自由なる道德性は、神を啓示するものなり、人の自由意志を說明して道理に合するあらんとせは、必す神の存在を認めさるを得ず、

吾人は既に人の合理性の中に、神の存在の證據を發見せり、而して此の證據は復た自由意志たる人性中に現出す、夫れ人は其の理性によりて自由性を具ふるものなり、人は之れによりて、理性の光明に照らし、合理的動機の勢力の下に於て、其の勢力を傾注すべき目的を決定し、且つ決定せる目的に對して其の勢力を發動せんことを決定す、故に人は自定的にして又た自動的なり、隨て自由なるものなりとす、然らは則ち、意志とは理性の活動するものにして、理性とは潛勢的なる意志に外ならず、今果して人間の理性及合理的の知識は神の存在を預斷するものなりとせんか、則ち唯た合理的なるの故を以て自由なるの意志も、亦神の存在を預斷するものならさるべからず、

且つ、自由にして宇宙の究竟基礎たらずんば、自由なるものゝ宇宙に現はれ來るべき筈なし、若し宇宙の究竟基礎にして必至たらば、宇宙一切の者も亦必至の下に在らさるべからず、若し宇宙にして其基礎を非有心的及び非合理的なるものゝ上に据ふるとせば、宇宙に合理的有心者の出現せるは、原因なき結果なりと爲さゞるを得ず、

且つ夫れ、自由意志の意識中には道義上の責任及義務の意識を含蓄す、是れ又吾人の地位に對して證據を供するものなり、苟くも自己の自由を以て事物を處理し得べきことを知るや、人は其處置に對して自ら責任を有することを意識す、苟くも人、物を取捨するの自由を有することを意識するや、之と仝時に彼は其行爲に對して責任を負ふべきと、及自己が道理に合して行ふべき義務の下に在ることを意識す、是れ豈に倫理上神の存在を證すべきことを、重ねて痛切に示すものにあらずや、人は神の統治の下に在る道義系の中に自己の存することを發見す、即ち人は絶對的道義法、及び絶對理性の存在、命令あることを直接に意識するなり、人は其心裡に伏する其心の聲を以て、

いとも親しく靈魂と　ともにぞやどる大神

あらゆるものゝそが中に　いとも全き神の像

"As God's most intimate presence in the soul,
And his most perfect image in the world."

と覺るなり、

加之、人は自由といふ意識を有すると共に、其周圍の世界が自己を閉鎖し、自己の作用を制限、妨害することを意識するものなり、人は自由を有して彼の必至と相関かさるを得ず、人は物質的制限の中に幽せられ、又物質力の爲めに壓迫せらる、或は困苦災禍に遭ひ、或は惡行邪業に誘導するもの荐りに至る、自ら省れば憐むべきの罪人にして、自ら怒りて自己を咎めさるを得ず、嗚呼是れ人の意識する所なり、此に於て乎、人は其自由を使用する生涯の行爲に於て、己を救ひ己を扶くるものとして、神の必要を感し、己を濟ふて萬有必至の下に膝を屈せざらしめ、己を擧けて悠々靈界に住はしめ、以て其諧和、平靜と眞正の自由とを享受せしむべき神の必要をぞ覺る、誠に人は自由といふ意識を有す、然れとも之を維持、確定せんと欲せば必ず己を制限、壓抑するの勢力に抗し、且つ自己の心裡に存する妨害物に反して、以て理性の命するところ意志の爲さんと決するところを實行せんと務めさるを得ず、而して此事實は、實に人に神祐の必要を啓示し、之をして救贖を受けんが爲めに必ず神の許に趨らしむるものなりとす、此の如く、人は自己の自由者なるとを意識すると全時に、又自己が萬有に從屬し、其勢力の爲めに壓迫、抵抗せられ、又誘はれて罪惡の邪路に入り、以て不測の厄に陷れることを意識す、然り而して此撞着せる意識を調和するものは、則ち是れ宗教にして、實に人生に欠くべからざるものなりとす、

終りに、人が其信頼、奉事の目的者として神を擇ふや、之によりて自己が神の感化力に薫染し、新なる靈生に生るゝことを覺る、即ち人は神を信するによりて、博愛の情其中に燃ゆるに至るなり、恰も人が其理性によりて神の理性の光明を分享するが如く、其新なる靈生によりて神の愛を分享するものとなり、而して自己の靈魂によりて、神に存する至上至高の德を知ることを得べし、此かる人は夫の「爾曹神の愛にをれ」との使徒の訓に隨ひて、世に勝ち、其反對抵抗する勢力を征伏し、諧和、平靜を得、且つ基督が頼て以て人を自由にするところの自由を享くるを得るなり、

(三)人が神を知り、神に事ふるを得べき、性を具ふることは、其靈性上の動機及情緒を

有し得べき感性を具ふるによりて明白なり、

一童あり、日暮紙鳶を飛ばす、絲延び、風馳せ、紙鳶忽ち蒼然たる暮氣の中に沒す、人あり、童兒に語て曰く、紙鳶失せたりと、童兒徐に對へて曰く、「否、我れ其我を牽くを覺ゆ」と、此の如く、吾人眼力の達せさる邊よりして、視るべからざる神の事物は來りて吾人を捕へ、而して吾人は其胸裡に此等事物の牽くあるを覺ふるなり、

吾人は既に前某章に於て、衝動及情緒に對する感性なるものは、吾人周圍のものが頼て以て吾人に接觸し、吾人をして其存在を覺知せしむるの受感門なることを知れり、故に日光は吾人の眼に觸れて、吾人に其光たるを啓示し、空氣の顫動は吾人の耳に接して、其音響たるを吾人に啓示す、然れとも此等のもの若し吾人身體の他の部分に觸るゝときは、毫も右の如き各個特殊の啓示を人の意識に爲すこと能はさるなり、之と均しく、人の有する其他の覺官及一切の肉體上の慾情、願望、情好は皆外物が頼て以て自己を意識に啓示するの受感門なりとす、今神及靈的實在者の系統は則ち人の靈的包圍なり、而して靈性上の衝動及情緒に對する人の感性は、是れ神及靈的實在者が人に接觸し、自己を靈的のものとして人の意識に表現し得べき靈性上の受感門に外ならず、例を異にして之を言はんか、此等の感性は窓戸の如し、永遠理性の光は之を通して照し來り、生々の元氣を與ふる天の熱と空氣とは、之を通して人の靈魂を振起せしむ、

右の理由により、吾人は感情によりて知識を得るなり、蓋し原始、陰在の意識に於ては、信念、感情、及び撰擇は區別もなく共に其中に存在す、其原始の靈的意識に至ても亦此の如し、信念と疑念、恐懼と希望、願と情好、目的と撰擇とは共に區別もなくして存在し、恰かも植物の種子を蒔ける苗地に、各種異樣の種子充滿し、其萠生するに及びて、各皆其特質を形はし來るが如きなり、ウォズオースが描き出せる者は實に此本元靈覺なりとす、曰く、

"those obstinate questionings
Of sense and outward things,
Fallings from us, vanishings;
Blank misgivings of a creature
Moving about in worlds not realized,

High instincts before which our mortal nature
Did tremble like a guilty thing surprised;
……those first affections,
Those shadowy recollections,
Which, be they what they may,
Are yet the fountain-light of all our day,
Are yet a master-light of all our seeing;
Uphold us, cherish and have power to make
Our noisy years seem moments in the being
Of the eternal Silence, truths that wake
To perish never."

扨吾人は今より、宗教上の衝動及情緒に對する感性の人の本性中に在るものは如何なる者なるやを究め、又此等の感性は吾人をして、人は神を知り、神に事ふるを得べき本性を有するものなると、及び神は之によりて自己を人の意識に表現するものなることを信せしむべき、合理的の理由あるや否やを考察せんと欲す、

今夫れ神は絶對の靈なり、而して人の有する宗教的の感情中尤も宗教的なるものは、人が神たる者に意識的に對應するよりして出する感情なりとす、故に此感情の此神に對するや、之を絶對者として感し、又有心的の靈として感せざるべからず、何となれは世界一切の宗教に於て、其神に關して形くる觀念の中に、已上二個の思想の痕跡を多少留めさるものなきは、既に吾人の論示せしが如くなればなり、

吾人は今無限及絶對なる者に對應するの感情よりして、吾人の探究を始むべし、

蓋し人が絶對若くは無限といふことを言語に表白し、又は思想の中に認知するに至りしは、人智の頗る開發せし後に在らざるべからず、然れとも其言語によりて表白せる實躰に至りては、始めよりして人心を感銘せしものたらざるべからず、夫の萬有の大勢力の中に立て、屋宇城壁なく、機械戎器なく、孑然頼みなき自己の有様を見は、人は必ず其曉得力を超へ、其勢力を逸脱するの實在者及行動者あるを意識せさるを得さるべし、ミュラー氏は無限なる念の起原を説明せんとて、大山、廣野、若くは萬里の海天に圍繞せられたる珊瑚島に住するの人を假想して之を説けり、然れ

とも此かる假想を爲すは、無要の業なり、何となれは何れの處に住するにせよ、人は自己の周圍に作用者のあるありて、自己の見る所によれば、他の抑制を受けず、制限を有せさる勢力を具ふることを發見せさるはなく、而して此等の勢力は、其生涯の間恒に存在せる背面（バック、グラウンド）として、超人、不測、無限なるものといふ觀念を其人に與へさるを得さるべければなり、

さて、此かる存在者に對するよりして、起り來るべき情の一は驚異の念なるべし、ラト嘗て、驚異の念は哲學の起原なりと謂へり、且つ彼は思考すらく、夫の諸神の樞機を知り、其使命を齎らすアイリス神を以て、サウマス（驚異の意）の女と爲せしの人は、決して未熟の系圖學者にはあらずと、蓋し是れ靈魂が絶對若くは無限なるものに對應するの感情にして、未た形成せられさる此感念の預示たるなり、吾人は彼の生命と萬有とが、今日に於ても昔日と同しく自己を小兒に表現し、而して小兒の心裡に驚異の情を起すを見て、右の事の眞なるを知る、見謠に曰く、

Twinkle, twinkle, little star,
How I wonder, what you are.

きら〳〵ひかる　ちさき星
汝はそもなにぞ　異しけれ

と、是れ小兒星天を望みて驚異の念に堪へず、以て宗教の起原たるべき感情の一を、は謠ひ出せしものなり、且つ小兒は世上普通の人間に超越せるものを知らんと熱望するの念熾にして、神話鬼談を聞くを悅ひ、天地に人間外の者存すると想ひては深く其心に樂むを見る、而して吾人如何程珍奇なる歴史、即ちロビンソン、クルーソ|、の生涯若くは其他怪絶奇絶の冒險談を之に話すも、小兒は決して此樂を以て彼樂に代ることを爲さるなり、夫のジョン、スチユアート、ミルの如きも、其人生を觀察するの乾燥にして實際的なるに關らず、今世に至り始めて、世の少年が小説的信仰の臭味を脱しつゝあることに一驚を喫したるを暗に示したるとありたり、

是を以て之を見れは、原始人は其思想の中に無限といふ觀念を形成し、若くは之を言語に表白するに先ち、既に其の感情の中に無限者の念を具へ、萬有の中には覺官によりて知覺し得べき一切の者の上に位し、又其外に超出し、且つ人間其者の上に位せる一個の實在ありとの念を有せしものたらざるを得ず、人間進歩の順序に於

て、世界の廣大なるを見て驚異するの情は三角術に先だち、詩歌は學術に先だち、心理に律法として感せる義務の念は、石面に刻せられ、若くは言辭を以て種々に組織せられたる律法に先だち、自主的の信仰は神學上の定義に先だち、而して絶對に關する默々の意識は千容萬態を具へて、此觀念の明解せられ、若くは呼稱せらるゝの前已に存在したりしなり、シルレル此意を述べて曰く、「幾千百年を經たる后に至り、始めて高齢の理性の發見せしことも、大初よりして夫の美妙及び雄大の形はるゝ表號中に存し、以て夙に愚昧不文の人心に啓示せられしものたるに過ぎず、吾人德義なるものゝ美容優質を見ては、勢ひ之を愛せざるを得ず、慈愛の情は不義の念に反して興る、是れ立法者の出で來りて、將に凋謝せんとするの花をば、徐ろに驅り進むるの律法を制定せる前已に人の有するところの本性なり、且つ夫れ永劫の空間が思考者の心意に對して、其絶大絶偉の觀念を表示するの前、苟くも仰て千星萬辰の碁布羅列せる、茫々たる彼の蒼空を望むもの、誰か既に其心裡に此觀念の端緒を有せざるものあらんや」と、

且つ夫の始終宇宙に自己を啓示するの絶對に對應して人の有する感情は、單に驚異の念に止まらず、萬有の超絶至剛の勢力を見ては、人の驚異の情は轉た進んで畏恭の念と化せざるを得ず、

無限者の存在に對應して興起し來る他の感情は、恐怖の念たらさるべからず、ハムボルト曰く、「人心の悲憂に沈める、其事物を觀るの悽愴なる、苟も不慮異常の事に際會するときは、唯恐怖の念を起し來るのみにして、毫も希望、悅樂の情を發することなし、是れ人心の眞相なり」と、(Cosmos, bol, i, p. 111, Otte's Translation.) ハムトは云へり、人間の有し得べき最も凄愴の感情は恐怖の念なり、是れ萬有の不變一定なる秩序の中絶せるが如き觀あるとき發するものなりと、彼の地震の時人の心裡に生する一種の感情の如きは其一例なりとす、蓋し地震の時に際しては、吾人が頼んで以て最も堅固確牢なりと信せし一切のものの撼搖せられ、而して人は恰かも其碇泊所より放たれ、孤々として未知、不測、不可量なる勢力の中に漂泊するの感あり、思ふに此情たる、原始の人に取りて極めて普通のものたりしに相違なし、萬有通規の一定不變なることも、一切變化の原因も、殆んど之を知らさるの原始人に對しては、各事各物奇異にして量るべからさるものたらさるを得ず、猛獸猛類に圍繞せられ、深林茂樹

の中に住し、荒野蕪原の上に在りて、大河激流、峻嶺海洋其四邊を鎖し、炎熱嚴寒の苦に遭ひ、電雷の前に立ちて震栗し、視るべからざるの暴風に吹かれ、雨降り、雹雪飛んで人を打ち、視るべからず、解すべからざる勢力ありて疾病を起し、遂には死の爲めに襲はれて一片の煙と化す、嗚呼是れ原始の人の狀態なり、此かる狀態の中に在りて、彼等安ぞ、自己の上に襲ひ至り、自己の四邊に作用する至剛至大の勢力を見て、恐怖驚駭の念を發せざるを得んや、

且つや、絶對の念は宇宙の秘義によりて常に人に表現せらるゝなり、宇宙の秘義は切に原始人の上に歴し來り、恰も霧の如くに之を包む、彼が文明に於て進歩を爲し來るや、此秘義幾分か退隱すと雖も、決して消滅し去るとなし、若し其霧にして少しく上るときは、之に伴ふて秘義の範圍も擴まるべし、一歩を進みて既知の範圍を大にするときは、之に隨ひて未知の領域も亦增加し來る、夫の野蠻の狀態より至高至上の文明の域に至るまで、人は常に無限、絶對なるものを眼前に視ずといふことなし、有限宇宙に關する人の知識の愈々增殖するに隨ひて、其秘義を視るの地平線も愈々延長し、而して其意義を認知するも愈々廣大を加ふ、故に彼のミラー氏が無限

者の知覺に關して言ひしところは、決して誇大に失するものにあらざるなり、曰く、「人間意識の始めて其翼を張りしより、此知覺は覺官の一切の知覺、一切の想像、一切の概念、及び吾人理性の一切の議論の底に伏す、此知覺たる、時に或は暫く有限知識の斷片の下に埋沒せらるゝこともあらん、然れども絶へず其中に存するものなり、而して吾人若し十分深く穿ち入りて之を探索するときは、必ず此埋沒せられたる種子が、絶へず一切の眞正なる信仰の纖緯及び營養質に生々の液を送りて、以て之を生育するを見るべし」(Origin and Growth of Religion, p. 48.) と、

以上論するが如くなるを以て、人が知識、教育の上に於て進歩を爲したりとて決して宗教の滅するか如きことある筈なし、宗教の情は無限及絶對の面前に在りて人の發し來る驚異、畏恭、恐怖の念の中に其永年根を結ふものなり、其初めや、人は只異常にして曉得すべからざるものを見て驚異の念を生ず、已にして其進歩を爲し、是れ迄知られざりしもの今や知られたるものと爲るや、其知られたる一切の者の不斷、不變なるを見、其秩序と理法とを見て驚異し、而して其既に人智を以て説明せられたる一切のものを見ては、其説明によりて開示せられたる意義の絶大絶妙なる

を認めて只管之を驚異す、然り而して此の如く人智の進歩擴張と共に其範圍を增大する所の此萬世不變の秘義なるものは、形而下學を以て排除し、若くは超越、說明すると能はざるものなり、形而下學が實驗的方式を以て有形宇宙を說明し、形而下の作用者と運用、及び此等作用者の事實的干係を以て之を曉得せんと企てしや、結局矛盾撞着に陷りて失敗し、自己の不充分なることを示して、以て物質及び物質的の勢力、作用に超越し、形而下學の事實的干係及實驗的方式を超越せる、靈的能力及靈系を認むるの必要を啓示したり、

然り而して人は自己の中に右の如き高等の能力を有するを意識するものなり、何となれば人は自己の有心者即ち靈なることを意識すればなり、靈として人は自己の超物者なるを意識し、一種奇跡を行ひ得るの能力を有するものなるを意識す、是れゲーテの言へるが如し、曰く、「獨り人のみ、能く不可能的のことを行ひ得べし」と、人が覺官及び實驗的思想に取り、及び無意識なる萬有の勢力に取りて不可能的のことに遭逢迷惑するや、彼は自ら自己を省みて其理性的靈なるを見、自己が之を超越し得べき能力を有することを知る、人は其理性によりて、覺官及び實驗的思想が可覺物に就て知り得ざることを知り、其自由力によりて、無意識なる萬有の勢力が爲し能はざることを行ふを得、故に人は萬有の上に在り、即ち超物者なるなり、人は靈なりと雖も、固より絶對者の何物たるを充分に曉得し、又は秘奥者の地平線を超越するの能力を有せず、然れども彼は能く絶對的の靈として絶對を知ることを得、物形界を支配し、物形界に貫徹する靈的勢力及び靈的眞理、理法、理想、目的を認むるを得、彼は宇宙を以て絶對理性の無盡藏なる智慧と愛との素型的思想を、着々に有限者の中に表發するものと爲すことを得、而して宇宙に關する人の知識は常に秘義に圍繞せられさるべからずとの言に對して、合理的の說明を爲すことを得るなり、

吾人は今より進んで、如何なる靈的情操が絶對の靈の臨在に對應するやを究めんと欲す、蓋し絶對は抽象にあらず、且つ抽象として啓示せらるべからず、絶對は絶對の實在者として啓示せらるゝなり、故に人が絶對及無限なるものは、有限者として知られたる一切のものゝ奥に存在する絶對の實在者及勢力なりとの念を發するは、唯宇宙の具躰的實躰を見るによれり、人は自ら一個の靈なるか故に、自己の中に神が絶對の靈として自己を啓示するを覺る、

さて、絶對の靈の臨在に對應する情操の中其第一は、理性の四個の根本觀念即ち眞、善、全、福の四者に對する衝動及情緒なりとす、

此等四個の情操中の第一種は學術的の衝動及情緒なりとす、即ち眞理を知らんとの願望、及び之を發見して喜ふ喜悅の情是れなり、但し其之を喜ふは眞理の用及利得に對して喜ふにあらずして、眞理其物に對して悅ふなり、蓋し此情たる、宇宙の秘訣を知り、其起原及創造者、其旨趣、理法、目的を發見し、而して合理系の中に統一して以て之を曉得せんとの靈性の切願なり、又默然たる萬有の勢力が其永遠緘默せるの口を開きて、此等の勢力が何處より來り、何の目的に對して孜々營々し、何の目的に向ひて千歳休息することなく、且つ如何なる命運に己を投しつゝあるかを語らんことを願ふ、人の熱望なりとす、教授チンダル云ふ、人は大初より事物の起原を知らんと願ひ、而して此探究の願望は、人智の活動及び學術的考究に對する大動機にてありたりと、ダイラー氏は曰く、「人が其目擊するところの事物に對する原因を知らんことを切望し、又自己が測量する事件の各狀態は、何故其狀態の通りにして、他の狀態を具へざるやの理由を發見せんことを熱願するは、是れ決して文明開化の成果にはあらずして、人類の最下級に於ても著しき事實なり、蒙昧不文の蠻人間に在りては、此情既に智力的肉慾となりて現はれ、戰鬪若くは遊戲若くは睡眠時間の外、幾多の時間を費やして以て之を滿足せしむ(Primitive Culture, vol. i, p. 332.)と

されば、こそ、彼の唯物說及無神說の下にありては、人は其智力の範圍、自由を制限せられ、其元氣を壓抑せらるゝことを意識し、轉た智力の窒息するを感ぜずんばあらず、夫れ無神說は人の價値を減じ、人の知識の範圍を狹むるものなり、夫の天文學が古來の圓天說の陋板を打破して、幾多の太陽雲集せる深遠の空間を啓示せるや、是れ實に人間思想の範圍を非常に擴充したるものなりしなり、然れども若し學術にして神を拒絶し、及び一切の靈的實躰を拒斥するときは、是れ其思想の範圍を擴むるに於て得失相償はざるものにして、學術は恰も一種固形的蒼穹の如く人の頭上に墮ち來り、以て吾人を密閉し了るに至るべし、試に思へ、固形的蒼穹の上には神及天界ありて、其下には萬物皆神の理法、愛、及其救贖的恩惠を啓示すと思考すると、宇宙は唯茫々として無數大陽の雲集せる大空間にして、其中には無上理性の指導することもなく、神愛の支配することもなく、人は神を知らんと慕ひもせず、神の像に

化せんと望みもせず、唯だ暫く食ひ、飲み、蕃息し、樂み、苦み、而して終に北邙の塵と化し去る活動土塊なりと思惟するとは、其思想の高下大小、智者を待て后に知らざるにあらずや、果して彼等無神論者の說の如くならんか、彼のビンダーが言ふ如く、人は「虛影を夢みる夢」と成り了るべく、而してベークが其愛子の死後に言ひたりし悲愴の語は、學術的の眞理として採用せられさるを得ざるべし、彼は言へり、「嗚呼吾人は虛影なり、嗚呼吾人は虛影を追ひ求む」と、敎授チンダル其「ベルファスト」演說に於て吾人に告げて曰く、嘗て人あり、予に來りて、「予若し事物の心髓として其中に一個の睿智者あることを信せざりしならば、現世に於ける予が生涯は、予の堪へ得るところにあらず」と謂へりとのことを以てせり、「信經直解」の著者は云へり、予が宇宙の秘訣を知らんと切望するの旺なる、覺官の制限を脫して、宇宙の外に存在するの世界に進入せし爲め、殆ど自ら戕ふて其死期を速めんとするの念に堪へず、蓋し是れ予一人の實驗にあらずして、宇宙の秘訣を知らんと熱望するの人に在りては往々にして是れ在るのことなりと(The Keys of the Creeds, pp. 4, 5.)然り而して大智偉能の士にして、其心中に神の信仰の消へ行きて、慘澹たる黑雲其頭上に下り來るを見、悲哀の情に堪へずして、最も悲痛の語を發したるもの、其例誠に尠からず、

蓋し宇宙の秘訣を知らんと欲する右の深切、强大の願望たる、人性固有のものにして、其宗敎性の根本の一たり、神は理性的靈として此願望を通して自己を人心に啓示し、宇宙は道理を以て理會、說明し得べしとの自然にして滅すべからざるの信仰を起さしめ、又宇宙の合理的基礎、理法、統一及意匠を知らんとの撲滅すべからざる願望を生せしむ、然り而して此願望は、唯宇宙が其智慧と愛とを現はすところの絕對理性なる神を知るによりて、滿足され得るものなりとす、

人の靈が絕對の靈の臨在に對應して有する感情の第二種は道義的情操なりとす、即ち義務の念、不義を惡むの念、及善を爲して其心中に覺ゆる平和の念是れなり、シェンケル曰く、「良心によりて人の靈魂は自己に就ての意識を有す、但し是れ神と相關係せるものとしての自己に就ての意識なり、是れ人の靈魂が自己の中に絕對の靈を發見するの處にして、又自己が絕對の靈の中にあることを意識するの場所なり」と、道義的の情操によりて、人は絕對の律法及び絕對の權力の犯すべからざる大法を感得す、恰も人が惟た自己の物形界と關係することを知るのみならずして、其躰

量により、其作用に、外界の抗抵するにより、其寒熱によりて物形界を感得するが如く、人は唯た自己が靈界及神と相關係することを知るのみならずして、其一切の道義的情操によりて之を感得するなり、是れ啻に義務の念によりて見るべきのみならず、一般普通なる罪科の念によりて見るを得へきものなり、汎く世界の宗教を歴觀するに、懺悔、犧牲、挽回、償罪の行爲に心を用いさるものなし、是れ豈に世上一般罪科の念を有し、未來の審判を望見して恐懼するあるが爲めにあらずや、崇拜者は皆な其崇奉するところの神を以て、直接に自己の立法者及審判者なりと感す、レ、ノーマンは又此等世界の宗教中に、罪科より吾人を贖ふものゝ必要に關し、及其希望に關する意識の存することを發見し得べしと謂へり、氏は普通の神話的思想、即ち一個の少年神が救主及仲保者として現はれ來り、人間の味方となり、苦痛と死とを經て其救濟の業を成遂せりとの觀念を擧けて其證と爲せり、氏は此等の神話が萬有の變化を指せるものなるを認むると仝時に、附言して曰く、「此等の神話が又人間墮落の後直に與へられたる神の約束の薄弱なる反射光を含蓄するものたることは、蓋し何人と雖も承認せさるを得さるところならん、基督教徒は決して此等直覺力の一をも輕忽に看過すると能はず、蓋し此等の直覺力たる模糊、不完全なるものたりと雖も、之が爲めに其攝理的の直覺力たるを失はずして、外教異宗の暗黑中にも、處々方々に輝き出てたるものにてあるなり、夫の殘忍なる、唯物的なる、因果的なる諸宗教の下に呻吟せる諸國民の靈魂中にも、終に全く消滅するに至らさりしところのものは、常に贖主に關する此期望、及ひ一層高尚なる律法と、一層公義、慈愛なる神を望むの此冀願に外ならさりしなり」(Beginnings of History, pp. 170, 171. Trans.) と、是を以て之を見れは、道義的の動機及情緒に於て、人間の宗教性の根あり、と謂はさるべからず、

人の宗教的本性は又全の觀念に屬する感情の中に其根を有す、

人若し其同類人間の有する能力及優質にして、自己の有する全の理想に近きものを見るときは、則ち之を嘆賞して措かず、彼は勇氣、忍耐、氣力、獻身、克己、及び寛仁、温順等、凡そ英雄の德を組成する一切の資性を嘆賞す、

大古に在りては、偉大の腕力を有するもの尤も人の賞讃を受け、而して强力にして疾足なる者英雄たりき、幾世幾代、人は其道德上の品性を問はずして、人の智力及ひ

功績を嘆賞し、權力を有するの人は英雄にして、而して英雄崇拜は毫も滅するとなし、弱者は自ら強者に服從し、嘆賞の情は變して敬崇の情となり、敬崇の情一轉して信依、奉事となり、強者は絶へす部下を有す、此の如くにして彼の剛猛の獵人者たる上古のニムロッドは、其部屬を頤使して以て自家の榮利を成遂せしめたり、蓋し此等臣屬は此く其首領を助けて世界を擾亂すると仝時に、又自己をも亡ぼさゝるを得さるに至れり、

然れども人の愈々發達、進歩するや、智力は漸次に腕力より上位を占め、而して道義力は益々此兩者を凌駕するに至る、是に至て智慧及び堅牢不拔の德性は、英雄を成すに欠くべからざるの要素と爲り、人は德義上の英雄を嘆賞す、固より人は絶へず幾分か此く爲せしには相違なし、然れとも今や德義は愈々益々重要の地位を占め、而して英雄に欠くべからさるの要素として要求せらるゝに至るなり、是に於て乎、人は寧ろ生命を捐て、眞理、正義を重んずるの殉教者を嘆賞し、正人君子の品性の優美にして高尚に、純潔にして芳冽に、熱心、堅忍にして人の爲めにし、誠實にして廉直なるを見ては之を嘆賞す、人の進歩に伴て、彼は其英雄として嘆賞すべき人が此等の資性を有すべきことを、愈々益々要求するに至る、而して此嘆賞の情は容易に轉して敬崇、信頼、奉事となるべし、然り而して人が人間の完全なる資性として嘆賞するものをば充分遺憾なく完成し、之を擧け來りて以て其信奉するところの神に附するは、蓋し自然の勢なりとす、人文の最下級に在りては腕力及力技最も人に嘆賞せられ、而して強力者は即ち英雄なり、此かる時に於ては、其信奉するところの神は彼の槌を手にするソル神の如きものたるべし、而して人の進歩發達するに隨ひて諸種の英雄は神祇として崇拜せらるべし、然れとも人は其進歩の極、智力上の巧妙及道義上の秀美を貴重するの域に達し、終には无上、至完の靈たる神の觀念を形成するに至るものなり、

且つや人は萬有の美及大を見て審美的嘆賞の情を發するものなり、夫の高巍の情なるものは、人の靈魂に示すに、莊大、不可思議なる無限、絶對の某の觀念を以てするものにして、人の感情は此に至て、轉た嘆賞より畏恭に入らさるを得ず、若し夫れ美の情に至ては、是れ人に啓示するに合理的靈の理想を以てするものなり、今人目を擧けて穰々たる麥田を視、以て其光景の美を感するは、其人の口腹を肥やすべき食

物たるを認むるの外、自ら一種の趣味を其中に感得するものたらずんばあらず、蓋し美の情は開發して宗教の情と爲るとなく、且つ吾人が以上に考察したる情緒の如く明白に神の意識を其中に含蓄せず、然れとも吾人夫の希臘人の宗教を見るに、重に是れ美の宗教にして、萬有及人身の中に形容、配合の美自ら存するあるを視、之によりて以て神を覺れり、且つ何れの世を問はず、美を嘆賞するの情は密切に敬畏、崇拜の念と相親和したり、且つ此情は此念に到達することを得べし、夫の

わがいつくしむそのものを　さとりもせずて山たにを
ふしてぞおがみたてまつる

Worship nature in the hill and valley, Not knowing what they love.

ところの人は、此情と此念とを混同せるものか、不らされば蓋し實に宗教上敬畏の念の模糊として表現せるものたらずんばあらず、且つ夫れ此事たる哲理上の基礎を有するものなり、夫れ美とは全の理想の啓示に外ならず、而して理想的の全なるものは、理性の中に存する眞、善の或る標準と關係するにあらずんば、何の意味をも有せさるものなり、然り而して美なるものは一個の理想を表示するものと見做さずんば、意義なきものたるが故に、一切の美とは是れ取も直さず萬有に貫盈するところの合理的心意が、萬有を通して吾人の面前に現顯するものと謂はさるを得ず、故に美の情は、人の靈魂が神の啓示に對する一個の對應たるに外ならず、而して眞に關する一切の原理、及ひ行爲の理性と仝しく、美に關する一切の理想は絶對理性の中に永遠、素型的に存するものなるか故に、夫のオーガステンが語調を轉して「おゝ美よ、汝は古より在り、左れど日に新なり、我何ぞ汝を發見するの遲きや」と神に對して叫びしは、是れ其眞正なる宗教上の熱心を表露すると共に、深遠なる哲理上の達觀を啓示するものたらずんばあらず、

理性の第四の根本觀念たる福の觀念は、人が苦樂、悲喜の情を實驗するよりして起るものなり、而して此情に伴隨する最も顯著なる特質は、不滿、不足の情なりとす、人は絶へず自己の現有する者の外に眼を放ちて某の物を求む、夫の孜々として自己の利得を是れ營むの人に在りては、如何に其望むところを得たりとて、如何に其享得の大なればとて、決して之を以て滿足、安意することなし、願望とは欠乏を感じて安んぜざるの念を謂ふ、然るに願望は其目的とするものを得んと勤むるによりて

其勢焔を加へ、其望むところを得るも、唯火に薪を加ふに過ぎず、而して其喰ふところのものによりて成長するものなり、此理由あるが爲めに、人の願望は決して之を滿足せしむること能はざるものにして、其不安の念は到底之を排除し得べからざるものなりとす、是を以て利己的願望の生涯を送るの人は、縱ひ其追求、欲望する物を得る能はずとて失望することなしとするも、既に之を得て、其得たる物を驗査するときは自ら失望落膽せざるを得ず、我享得せるもの是れ何物ぞ、悉く皆、空の又空、凡て空なるものなり、是に於て乎、夫の厭世主義は正當なる人生說と爲るに至る、古往今來哲學も、詩歌も、宗教も齊しく人間の不滿不足を陳し、現世幸福の浮空、須臾なるを歎き、人間を羈旅、雲水の客と描き出さゝるはなし、之に反して夫の禽獸に至ては、其現世の狀態に安じ、而して其口腹の慾を充たすを以て滿足せり、「野驢草を喰ふ時嘶くことを爲んや、牛芻を得て泣くことを爲んや」、

人の其現有の狀態及び享得に安せず、其肉慾を滿すものを以て足れりとせざること此の如し、吾人は之によりて、人は自己が更に高尙なる行爲の世界に對する能力を有し、又更に高尙なる福を享得すべき資能を具ふとの朦朧たる意識を有し、又晡々の裡、自己が覺官及び現生の制限を超越する某の者に關係するとを意識するなり、禽獸の發達成長に於て、吾人は動物が自ら其意味を了知せざる衝動によりて動かさるゝことを見る、然り而して是れ其動物の保存、成長、若くは其種族の存續に對して必要欠くべからざるものなりとす、彼の鳥を促して其巢を營ましむる不安の感、其后又鳥を促して孵卵せしむる不安の感、鷲を促して水に入らしめ、新生の哺乳獸をして哺乳せしむる不安の念は皆是れなり、夫の飢餓の情は、是れ人の受感官が、有機生物の消耗を補ひ、生命を支持する爲めには食物なるもの必要なりとの理法を證明するものたるに外ならず、之と齊しく、肉慾物情の滿足せるに關らず、人の靈性中に存する不安、不平の念は、是れ人を促して靈生に欠くべからざる者を享得せしむべき衝動にてあるなり、然り而して此不安、不平の念は唯た神と交通和合することによりて滿足せらるべきものなりとす、此の如く一方に於ては現世、肉慾上の幸福は不充分に他方に於ては人の靈魂は永固、靈的にして又神的なる者を望む、此衝突の中に宗教は其根を有するものなり、即ち宗教は人の不足の念に其根を有し、其有心性に固有なるものにして、自己を物界より識別し、自己が物界の上に位

するを知る有心者即ち靈たる人の存在に欠くべからざる必然の結果なりとす、此かる靈性上の本能の一例は、死后の存在に對する冀願及之を信するの信仰是れなり、吾人の覺官は、一切の有機生物は最高の人よりして最下の園苔に至るまで皆齊しく死すべきことを吾人に示す、然るに人は死後にも生活せんと慕ひ、望み、且つ之を期す、人は強いて自ら此かる存在の死后に無きことを信せんと務むることもあるべし、然れども到底之が信仰若くは少くとも之が希望或は恐怖の永存せずといふことなし、人或は自ら思考すらく、我は死后に何の存在もなく、且つ一も罪惡應報の事なきを確信せりと、彼は自ら信すらく、是れ唯た

Die Riesenschallen unsrer eignen Schrecken
Im hohlen Spiegel der Gewissensangst.　　Schiller

我が本（まこと）瓦（いら）の　　ますかゝみにぞ
うつれるわれの　　おそれの面（おもて）かげ

たるに過きずと、然りと雖も彼が未だ自ら覺らざるの前、既に彼の思想は冉々として再び未來の幽暗に進入せんと務め、彼の靈魂は既に永遠界の影に蔽はれてある

なり、

福の觀念と相關係して自重、名譽、廉恥、價値不價値の感情あり、夫の物質的幸福に對する願望すら、吾人は理性に照して之を計量し、悅樂及び其源泉は、果して理性者の追求すべき價値を有するや否を判定せざるべからず、理性の光明中に在りて、人は不當の物を追求し、之によりて以て悅樂を買ふことを自ら恥つるものなり、故に非常の快樂にても、若し之れ其源頭にして不應なるか、若くは不應の行爲によるか、若くは不價値なる狀態よりして生ずるものならば、人之を賤視し去らずんばあらず、昔曾て異教徒の間に廣く行はれたる誹謗の言あり、曰く基督教徒は其聖餐式の麵包に混ずるに幼兒の血を以てし、且其聖式に際して姦淫を行ひ、而して斯る事を行ふの報として永刼の休福を享くべきと信ぜりと、タータリヤン儼然之を藐視して曰く、若し天の永福にして斯る罪惡的行爲を以て買得べきものたらば、是れ豈に何の價値を有するものならんやと、(Apologeticus, §8.) 蓋し此高尚及び價値の念の中には、人の靈性が物界の上に位し、且神と交通すると云ふ意識を含蓄するものなりとす、

吾人詼情（コケマ）なる者を考察するに、其中には肉躰上の苦樂、悲喜に超越せる靈性を有すとの多少の意識を含蓄するを見る、理性の光明及び靈的資量及靈的能力を有すとの意識により、人は自己を自己の上に擧ぐることを得、惡行邪爲に對して自己を責罰し、破廉恥に對して自己を卑め、狂愚に對して自己を笑ふ、蓋し詼情（コケマ）とは常に人間に對して慈愛の情を有し、人性の中に喜ぶべきものあるを認むる者にして、何の場合を問はず、悲曲と共に喜曲の存するとを見るものなりとす、吾人、人の靈性、其の神との關係、其不滅の靈魂と、浮空なる肉慾の快樂及び須臾なる其現在の生命等を比較し來るときは、人の汲々として斯る果敢なきものを追求し、惴々焉として之を或は得ざらんとを是れ恐れ、之を得れば揚々として自得し、之を失へば悄然として沮喪するは未だ嘗て其物の輕重大小を知らざるの行爲たるを思はずんばあらず、且不義の行爲の中には、邪曲の行爲と痴愚の所業と相混ずるものなり、然り而して人が人生の笑ふべき點を見るとを得るは、自己が靈性を有して、肉性に超越するものを具ふとの意識を有するに由れり、今夫れ人の母たる者は、其優れる知識と慈愛とを以て、其子女の上に位し、其頑是なき快樂を見て之を笑ふとを得るのみならず、其疑惑を見、其悲哀を見、及び其惡行を見ても、其中に笑ふ可きものあるを發見すべし、斯の如く人の靈魂は其靈性上の能力、關係及び命運を意識して自ら詼諧の情を發し、高く天空に立て紛々たる塵界を下瞰して、其愚を閑笑す、然れども是れ眼底熱涙を藏するの笑なり、

且つ吾人は附言せざる可らざるものあり、以上陳べたる眞、善、全、福に關する一切の情緒によりて、人の意識の中には、獨り合理的靈の啓示あるのみならず、合理的なると共に絶對なる靈の啓示あると即是なり、是れ此等情緒の希願及び勢力の强大無邊なゝを以て知るべし、故に學術に於て人は宇宙の尤も宏遠なる境域を究め、其尤も深奥なる本性を探らんと欲し、上下四方、古往今來を通じて其思想を馳せ、其熱心なる、北氷の烈寒も、熱帶の炎威も、將た瘴毒癘氣も以て其志を挫くに足らず、知識を得んが爲に生命を賭し、時に或は之を失ふに至て悔ゆるなし、且道義の情緒中には、永劫界に跨るの恐怖と冀望と存し、人を失望落膽の中に驅り入るゝ熾烈の廉恥と悔恨と具はり、善を行ふては福を其心に感ずると、恰も天日が赫々の光を大空に張らすが如し、若し夫れ全及福に至つては、人は此等の情緒に由りて、神の像に肖んと

を希ひ、永へに神と共に在りて、其休福を享けんことを望む、フライアレル曰く「摩西教は道德の絶對原理を有す、即ち『我れ聖なるが故に汝ち聖ならざる可らず』(Moralund Religion, §19, p. 32. と云ふと之れなり、舊約道德の基礎は聖なる神を信ずるとにあり、神の聖德とは、其有限にして物質的なる物の上に位し、始もなく、變化もなく、消滅もなきとを意味す、即ち神の絶對なるとを意味す」と、カントは又主張すらく、人は實行的理性により、其心裡の道義法中に自己を啓示する神を直接に意識すと、道義的感情の中には絶對理性の大法啓示せられ、而して人は意識の中に之を感得す、之と同く、理性の他の根本觀念も又絶對理性を啓示す、故に一切の思想を支配する普般にして必至なる原理の合理的直覺力に伴隨する學術上の動機及ひ情緒に因て、人は自己の意識中に永遠理性の絶對性と不變性と普遍性の啓示せられたるを發見す、全の理想によりて、人の靈魂は美の存在を見て審美的の喜悅を激發し、高大に接しては畏恭の念を生し、地上一切の物に超越せる完全を希ひ、隨て神の完全と光榮とを意識す、然り而して、吾人か有する名譽及ひ價値の念により、吾人は快樂の多寡及び一切の物質的尺度に優れる標準を以て、物の福否を計り、而して吾人の中に萬古

不變なる理性の標準の存するとを發見し、之に由り絶對にして神なる理性の存在するとを意識するなり、

絶對の靈は啻に一切の眞、善、全、福の永遠住所たる絶對理性として感情の中に自己を啓示するのみならず、活動理性即ち宇宙を創造、維持し、其中に自己の能力を啓示するところの全能意志として自己を感情の中に啓示するものなりとす、人に依頼の念、薄弱、制限、不充分の意識自己に勝りて賢明剛勇なる者、即ち天に在ます父の必要を感ずるの情あるは、是れ此の活動理性に對應せるものなり、

ハインリヒ、ハイネ曰く「予は小兒にあらず、予は最早や天父を要せざるなり」と、然るに其戸外生活の晩年、彼は轉た他に依頼し、他の佑助を望むの情に堪へず、美の理想として自己の鍾愛せる現今佛國ルーブル故宮中に安置せらるゝミロのヴェナス像(此像は當時已に其兩腕を失して有せざりし)の足下に俯伏し、而して其像が慈眼を垂れて自己を眺めりと感し、且彼に語りて「汝は我手腕を有せずして、隨て汝を扶くる能はざるを知らざるか」(Stedman, Victorian Poets, pp. 18, 19.)と、言へるを聞きしとまで思ひたるが若し、嗚呼是れ實に一個の喜曲なり、然れとも又慘怛たる悲曲なり、是

れ即ち人の靈魂が其自負自頼の念を離れて、依頼、需要の情を發し、愛の神の啓示、明赫々として自己の四邊に輝くも尚を人の腦裡より發生せる忘想を呼んで、其扶助を求むるものに外ならず、

シコライエルマヘルは依頼の念を以て宗教の唯一根本、否寧ろ宗教其物となしたり、然ども是れ出來得べからざるの事なり、人は自己の依頼する物に對して何等の宗教的觀念を有せずとも、完全なる依頼の切情を有するを得べし、例へば難破の厄に遭へる航海者が、海上に浮べる木片を抱くが如し、宗教とは徒に依頼の念を含有するのみならずして、萬有及人間外なる某の勢力に依頼するの情を含有す、然り而して此念と雖も尚且唯勢力に依頼するの念たるに外ならざるを以て、吾人は之を以て、許多の宗教的感情の一に止まる者となさゝるを得ず、宗教とは絶對的靈の臨在に對する靈魂の對應なり、即ち絶對に存する靈性及有心性に對應する者にして、啻に勢力に對應するのみにあらざるなり、宗教とは、知惠を有する嚮導者及び愛を具ふる佑助者を要するの意識にして、單に勢力を有する者の保助を需むるの意識にあらず、蓋し宗教を以て單に勢力の保助を需むるの意識となすは、是れ宗教を以て唯不明、不敏なる宿命に對して自己の薄弱なるを感ずる人の意識となすものにして、宗教的意識に欲くべからざる要素を缺き、隨て正當に宗教と稱すべからざるものなりとす、

宗教の根元たる他の感情は、人の靈魂が未見の世界に存する靈と相接觸するとき、若くは之と相接觸するとを想像するとき、其中に生し來る一種の情にありとす、人が其心に靈界の存在者を想像するや、自ら畏怖の念其内に充滿す、「人の熟睡する頃我夜の異象によりて想ひ煩ひをりける時、身に恐懼をもよほして戰慄骨節ことごとく振ふ、時に靈ありて我面の前を過ければ我は身の毛よだちたり」（約百記四章十三、十五、十四）是れ危難を怖るゝの情に非ず、蓋し彼は能く自若として砲門の前に立つことを得べければなり、此情たる人が靈界の近通するを見て戰慄し、隨て其心に生ずる一種畏怖の念にてあるなり、千軍萬馬の間に馳驅せる猛將勇卒も、一たび亡靈を見ることを想像するときは、未だ魂消し、魄飛ぶを覺へずんばあらず、

且人は斯る亡靈の談話を聞くとき、何者と雖も生起し能はざる一種恐怖の念を生ぜざるとなし、彼の人性の鋭利なる觀察者サー、ウイリヤム、スコットは曰へり、何の

夜會を問はず、其會席に於て、亡靈談あるときは、如何に其談話の虚僞なるとを確信するにもせよ、其會衆は知らず識らず其椅子を相近け、且畏怖の容姿を表せずんばあらずと、想像力を通して人心に生起する未見世界の觀念は、其人に近迫すると共に人の靈魂をして戰慄せしむ、吾人テニソンの「ハロルド」物語を見るに、其王國が羅馬法王の禁制の下にあるや、ハロルド曰く、

恐といはゞ言へ、此の詛を我は懼る、　智といはゞ言へ、此の詛を我は藐しむ、

"Fool and wise I fear
This curse and scorn it."

吾人が亡靈の存在を見たりとの念、心中に活涌するときは、恰も此と同一の情を發するものなり、幾世の前約百記中に錄せられたるものと同一なる思想及ひ夜間の幻象の實驗は、今日決して珍しきとにはあらず、三更人定て、燈影明滅するの時、酣夢忽ち破れて、徐ろに四邊を顧みれば、夜暗く、物靜に、聞として聲を聞かず、是に於てか人は靈者の世界と、其實在と、其接近と、其自己の必ず之に接せざるべからざるとを思念し、又幽暗の中より自己を臨護するの大眞神を思ひ、亡靈の自己に近迫するとを想像す、是の時に當り誰れか、夫の未見の靈界を見るより生ずる一種强烈の畏怖を感ぜざるものあらんや、

蓋し是れ、人死人を見て恐怖の念を生し、頑冥不動の骸骨に逢ふて、活人生物を見て未た嘗て寒心せしことなき人も、畏懼措くところを知らざるある所以なり、ヒユー、ミラー幼少の時一夜滿潮の爲め一寶窟に閉籠められたり、彼は言へり、「大凡一ヶ月計の前、吾人が宿せし場所より凡そ四十「ヤード」を隔てゝ、海濱に一個の死骸現はれたり、小兒に有り勝ちなる如く、予は百方精しく之を檢査したりしが、是れぞ後日心配の種子にぞなりにけり、予は固より此憐れむべき一水夫に對して何の恨を買ひたるとなし、然れども縱ひ予をして此人を殺戮せしものたらしむるも、同夜予が感ぜし如き凄涼畏怖の念を以て此人に對するとはなかるべし、睡るも醒るも、彼は我眼前に髣髴として現れたり、幾十人の惡漢凶徒の側に在り共、到底此一死骸を想起するよりして發せし恐怖の念に比ぶべくも非ず(My Schools and Schoolmasters, p. 77)と、且つ僅々たる一語非常の勢力を有し、人の靈魂を刺擊して靈界の實躰を感得せしめ、又た激烈の情を起さしむること往々にして之れあり、ハナ、モアーの言ふ所によ

るに、嘗て一婦人ありけり、方に夜會より歸り至り、會々其粧臺の上に横れる一紙片を見るに、上に「永劫」の二字あるを認めたり、然るに此二字の意義忽然として其腦裡に湧き來り、其靈的の感性を醒覺するに至りしが、是れぞ、此婦人の熱心なる靈の生涯の端緒なりしと云ふ、

靈的實躰の思想若くは其想像よりして人の靈的感性の醒覺せらるゝこと此の如し、是れ無識者及び虚妄の教訓を受けたる者の間に、迷信の行はるゝ所以なり、然れども是れ決して神及靈界の實在を論破すべき事實にあらずして、反て切に之を證明するものなりとす、蓋し妄想を以てすら喚起し得べきものは、是れ實に人情至奥の情操たるに外ならず、試に思へ、母其子女と共に在らざるとき、其母子女が危難の中に在らざるかと危み、若くは其危難に遭ふを夢みるときは、惴々として其心安からざるにあらずや、縱し某の場合に於て、其母急ぎ歸り、自己が妄に想像し又は夢みたる危難は、實際になかりしとを發見するとも、是れ唯其子の安全を願ふ母の本能の強大にして眞正なることを示すものたるに外ならず、之と同しく迷信の容易に世に傳播し、其想像によりてすら強大なる感化を人に及ぼすあるは、縱し人が神及

靈界を細密に解釋するとき其判定を誤るにもせよ、人の靈性上の感性が神、及靈界を啓示することの強大、眞正なるを證明するものたらずんばあらず、

(四)以上の解拆によりて、吾人は人の神を信ずる自然の信仰が人性に其根を有し、此信仰は神に關して眞實、合理なる知識を與ふることを證明したり、若し然らずとせんか、是れ人間の有心性の全躰は虚僞なるものにして、吾人は知識なるものを得ることと能はざるものなり、

吾人は本論の始めに於て神明を信ずるの信仰は人類一般の通有性にして、且つ其信仰は自然的に、強大に永存的なることを確明し、而して此確明より、推度して、此信仰の人の本性に發するものなることを論斷せり

然り而して吾人は今や人間の本性を解拆し、此信仰が人の有心性及び其一切の資量、能力の中に其根を有することを發見せり、即ち此信仰は理性の中に其根を有し、而して其一切の根本觀念中に包蓋せられ、自由意志にも其根を有し、感情の中にも其纖根を布く、蓋し此信仰たる一個の塊根より生ずるものに非ず、頗る複綜して人の全有心性に普及せる處の細根より發し來る者なりとす、人が自己の有心性に就

て意識するや、何れの點に向て其意識を開發するも、毎に此隱匿せる神の信仰を明示し來らさるとなく、而して其意識を完成せんには、神の在御の必須にして欠くべからさることを啓示せざるとなし、故にユリウス、ミラーは曰く「吾人の有する自己意識の底裡には、其潛伏せる背面として、神の意識の啓示せらるゝを見る、吾人の靈魂の深奥に下り行くは、是れ即ち神の許に上り行く者なり、苟くも吾人深く自己の心裡を省みるときは、吾人を遮りて吾人の實在の至奥至深なる眞理を視へさらしむる世界意識を徹過して、彼の吾人が由て活き、由て動き、由て存在するところの者と相對して見るとなくんばあらず」(Christian Doctrine of Lin, bk i, part i, chap, ii)と、夫のタールタリアンも亦此と同一の思想を有せしもの歟、彼は言へり、「人の罪科其數誠に多し、然れとも必ずとも人の知らさる筈なき者を認めさるは、是れ實に百罪中の罪科たらずんばあらず、世人は若かく廣大、無數なる彼れの工業よりして其證據を得んと欲するか、……或は寧ろ靈魂其物の證言より之を得んと欲するか、縱ひ肉躰の壓抑の下に呻吟するも、邪教背理に迷はさるゝも、肉情物慾の爲めに元氣を消耗し、僞神を崇奉して心餒るも、一旦靈魂にして、食傷より回復せるが如く、眠より醒るが

如く、疾病より平愈せるが如く、自己の本性に復歸し、以て幾分にても其の自然の面目を具ふるに至るときは、必ず神を認めずと云ふことなく、且つ必ず神なる語を用ふ、何となれば此れ眞神の一種固有の名稱なればなり、曰く「大なる神」、曰く「善き神」、曰く「願くは神此く爲し給へ」、「是れ皆萬人の唇頭に發するの語なり、且つ人の靈魂は神を仰て其審判者と爲す、曰く「神は見給ふ」、曰く「我之を神に委す」、曰く「神報ひ給ふべし」と、是れなり、嗚呼靈魂の證據何そ其れ高尚なるや、誠に是れ生得の基督教徒たるものなり」(Apologeticus, §17.) 然り而して神及神の律法に就ての信仰の、自然に人の衷心より湧き出つるものなることは、申命記中に敎へられたるものゝ如し、曰く、「我が今日なんぢに命ずる誡命は汝が理會がたきものにあらずまた汝に遠きものにあらず是は天に在るならねば汝は誰か我等のために天にのぼりてこれを我等に持くだり我等にこれを聞かせて行はせんかと曰におよばず、また是は海の外にあるならねば汝たれか我等のために海をわたりゆきて、之をわれらに持きたり、我等にこれを聞かせて、行はせんかといふに及ばず、此言は甚た汝に近くして汝の口にあり、汝の心にあれば、汝之を行ふとを得べし」(申命記三十章十一―十四)

今夫れ吾人の覺能を以てするときは、我地球は太陽系に屬する天躰の一とは見へさるなり、然れとも吾人が其實相を知るや、吾人は地球が此等天躰の一にして、此等と共に回轉し、此等と仝しく太陽に引かれ、又其光を受けて輝くことを知る、之と均しく、吾人は覺能的生活によりて吾人が靈界に屬するものなるを知ること能はざるなり、然れとも一旦其眞面目を悟り來るや、吾人は自己か靈界に存することを認め、靈界に存する許多の存在者の一なるを知り、普遍普理の光を受けて輝き、永遠界の莊嚴及榮光の中に徘徊し、其有心性の各部各點皆神の引力に感化せらるゝことを識るなり、

故に彼のシユライエルマヘルと共に、神の自然の信仰は其起原を單に依賴の念に發すと主張する神學者の說は、吾人之を誤見と認めざるを得ず、何となれは神に關する多少の意識は、啻に此一個の念に發見せらるゝのみならずして、一切の合理的動機と情緒との中にも發見せらるべく、且つ人心の實行的側面、即ち道義的責任の下に行動する自由意志の中にも存在すればなり、加之、神の意識を以て單に人の情緒、及道義的意志の中に存するものと爲し、智力の中に之を發見せさるところの論者に至ても、亦誤謬に陷れるものなり、何となれは理性は人の有する神の信仰を撿覈して、其合理的にして道理ある信仰たるを斷定すれはなり、否な寧ろ理性其物は神の存在を證明するものなれはなり、理性は自己を省みて、其一切の作用の信賴すべき所以は絶對の實在あるによるを悟る、隨て暗々の裡其中に絶對を承認するものなり、然るに若し此信仰を以て單に人の感情、及道義的意志の中に存し、智力の中に存せさるものと爲すが如きは、是れ實に宗教を破滅するものなり、若し宗教的信仰にして智性の中に根を有せす、理性の成果にもあらず、又理性の原理に基き、其撿討を受けて證定せられたるものにもあらずとせば、是れ夫の懷疑說に對して勢力なきものにして、又餘りに力を盡して辯護せざるべからさる程のものにもあらさるへし、「我靈を全く神の意に任することは是れ宗教の骨髓なるが、此事たる、无上の合理的行爲たりてこそ、始めて彼の迷信と區別すべきものなり、若し之を合理的の行爲と認めざらんか、宗教なるものは是れ心理的疾病の一現象たるに過きざるべし、」(Professor Dinan, The Theistic Argument.) 予有名なる說教者の說教の世に公にせられたるものを讀むに、其中に曰く、「尋常普通の思想の作用は、上よりの啓示に其地位

を讓らさるべからず、……福音の辯護者にして一たび、理性が靈魂及靈魂不滅の事に關して無能の信憑力たるとを承認するときは、之が證人若くは判定者として可成的理性を擧けさるこそ、其思考の高尚にして、其判定の確實なるに恰當するものなれ、吾人既に前提に於て、理性が吾人の判定者たるに足らさるとを認めて之を擯けたり(勿論理性と共に其附屬の智力的作用をも擯く)、然らは吾人は右の事に於て吾人の案内者として何者に依賴すべきか、……予を以てすれば、超理的に賦與せられたる信仰によるの外、全く滿足にして欠くるなきの方法あるを見ず」と、扨吾人此說を見るに、理性若くは智力的作用者を擧げずして、或は「判定の確實」と謂ひ或は「信仰」と謂ふを認む、蓋し神の啓示を收接、解釋せんと欲せば、其啓示を爲すに理性を要するが如く、全しく理性を要するものなりとは、該說教者の覺らさりしところなるが如し、此の如く懷疑說の攻擊を免れんと欲して、獨り感情のみに基き、理性及智力に關係なき信仰を唱導する神學者は、是れ即ち懷疑論者が要求する一切のことを承認するものにして、有神的信仰の合理的にもあらず、將た道理を有するものにもあらずして、理性の光明中に立つこと能はざるを諾するものたらずんばあらず、

之と仝時に、此信仰たる人の感情、及道義的意志と關係なくして、單に理性より發せる思辨的の成果にもあらざるなり、理性は感情の中に神の信仰の證據を發見す、今失れ、存在者は其境遇と相和合せさる可からず、不らずんば滅亡すとは進化の原理なり、吾人の感情は此原理に基きて神の存在の證據たるものなり、試に思へ、動物に本能あれは、其四周に於ては之に符合せる實躰あるにあらすや、今吾人一般人類を通觀するに、皆宗教性を有し、而して其自然の信仰も、其冀願も、其衝動も、其諸種の情緒も悉く神明たる者に向はざるはなし、吾人豈に又其四周外圍に於て、之に符合するの實躰あることを信せざるを得んや、兎の性や怯懦にして物を恐る、是れ其薄弱と危險との實在することを示すものにあらずや、之と均しく、「惡人は懼る其懼れ彼に來るべし」鹿渴きて水を求む、是れ豈に其渴を止むへき水の實在に符合するものにあらずや、之と均しく、「あゝ神よ鹿の溪流を喘ふが如く我魂は汝を喘ふなり、我魂は神をしたふ、活ける神をぞしたふ」なり、雛兒我内に飛揚したしとの衝動を感ず、假りに雛兒を以て推理するの力を有するものとせんか、蓋し其常に安靜なる巢上に

坐したることを記憶し、而して若し自己の身を其外に投せば、地上に落つべしと論結するならん、然るに一たび其翼を張るや、空氣ありて以て其中に飛揚し得べきを發見す、之と全しく、人の靈魂は其靈性上の衝動により、祈禱によりて自己を未見世界に投す、而して神と交通するによりて自己が益々高く上けらるゝことを覺るなり、是を以て之を觀れば、吾人の理性は靈性上の本能、即ち神を自己の上に揚け、且一個の靈的繞園の臨在を啓示するものと爲すの外意味を有せさる彼の動機及情緒の中に、及び詩篇作者が言明せし靈性上の實驗及意識の中に、神の存在及臨在の證據を發見するものと謂はざるべからず、詩篇の作者は曰へり、「なんぢはわが坐るを も立をも知り又とほくより我が念をわきまへたまふ、なんぢはわが歩むをもわが臥をもさぐり出し、わがもろ〳〵の途をことごとく知たまふ」（詩篇百三十九の三、五、）

且つ宗教的の感情は理性の見解及思想の思辨的結論を證定するものなり、恰も宗教的感情と共に生し、宗教的感情の中に發見せらるゝ神の自然の信仰が、又理性の原理の中に包蓋せられ、思想の驗驗によりて確明せらるゝ如く、理性の見解及思想の結論も、亦宗教的感情によりて其意義を有するに至り、且つ證定せらるゝなり、夫の自然に感情の中に發生する神の信仰も、吾人の一切の思考を支配する理性の原理中に潜居するところの信仰も、又た推理の結果たる思想の結論中に包藏せられたる信仰も、皆是れ互に相維持、證定する此等種々の運用よりして生し來れる一個同一の信仰に外ならず、吾人は人の有心性に存する一切の能力及感性が一齊に神の存在の信仰を承認し、而して此く其證據を合一して以て此信仰を確定するを見る、何如なる心理の作用及狀態を問はず、人の有心性は自己を意識の中に啓示し、有心的の神と相關係し、又之に依頼せるものとして自己を啓示せずんばあらず、人の感情及其道義的意志は、思辨的理性の中に存する神の觀念に給するに其在中物を以てするものなりとす、カントは神の觀念が純粹理性の必然觀念なることを論示したり、此觀念なくんば人心は宇宙の萬物を統一して之を曉得すると能はず、若くは自己の必然の問題を解釋すると能はず、若くは事物を考察するとき、之を論結して知識を得ると能はず、之れなくんば心意は如何に思考するも、其思考たる何等眞實の知識を織り出すとなかるべし、固より理性が必然の眞理と認むる者は、其何たるを問はず、之を眞理として信ずれは正當の事なり、故にカーニス氏が「理性は

自己が心理に於て必然と認むるものを眞實として信ぜざるとき、自己を詰責するものなり」と言ひしは、誠に道理あることなりと謂はざるべからず、然るにカントは難じて言ふ、神の觀念は思辨的理性に對して必然なるも、其觀念にして吾人の意識中の包藏物を有せざるときは、吾人は其の客觀的に實躰を有することを知る能はずと、而して彼は包藏をば唯だ道義法の意識中にのみ存在するものと爲したり、然れども以上吾人が論述したるところによれば、吾人が神の觀念に對する意識の包藏をば、一切の理性的衝動、情緒、及び一切の靈性上の本能、衝動、及び吾人の有心的感性、能力の一切の作用の中に發見し得べきは、明白の理なりとす、是を以て見れば、吾人は反省的思想によりても、理性的直覺力及び宗教的實驗によりても、神を知ることを得るものなりと謂はざるべからず、蓋し是れ夫の古諺に符合するものなり、曰く、「哲學は眞理を尋究し、神學は之を發見し、宗教は之を自己の有とす」と、

此の如く論じ來れば、神を信ずるの信仰は吾人が賴て以て他一切の事物を知るところの直覺力及反省力と關係なき、薄弱なる一種特別の器能に基くものにあらざるを見るべし、神の信仰は人の全性に基き、全性と相交錯す、神の知識は他の一切の知識と同じく實驗に初まりて、思想の中に組織せらるゝなり、若し然らずとせんか、如何なる議論を以てするも、以て其存在を證明するに足らず、果して吾人の言の如しとせば、神の信仰は吾人の全有心性に根底せる眞實の知識たらさるを得ず、若し然らずとせんか、是れ人の合理性及有心性は虛僞にして信賴すべからざるものとなるべく、而して一切の知識は不可能的のものとならんとす、

(五)神を信する自然の信仰を包含せる宗教なる者は、學術的思想、及び實驗的哲學的、神學的思想に先たち且つ之と相關せずして存在するものなり、是れ吾人が已上に考察せしところの人の宗教性より來るべき必至の推測なりとす、

夫れ外界は吾人の感官に印象を銘し、之れによりて自己を啓示し、吾人は之を通して之れを收接し、而して其の存在することを信ず、而して此信仰たる學術的の思想より發生するものにもあらず、之に依賴して立つものにもあらず、又之によりて證破せらるべきものにもあらず、之に反して一切の形而下學は證明せられさる信仰の實知識なることを自定し、之に依賴して以て其實知識たるの德を維持す、ロッツエ曰く、「吾人が此に物形的刺衝の勢力の下に實驗するが如きとを、靈魂の中に直接に

活動する神力の下に實驗す、故に宗教的信仰とは、斯く心内の作用によりて吾人に啓示せられたる超覺力の直覺に外ならず」(Mikrokosmos, vol, iii, bk ix, chap. iv, §1.)と、而して吾人が看得せるが如く、人の靈魂の中には幾多靈性上の實驗ありて、神を信ずるの信仰は是に依りて自然に發生するものなり、然り而して神を信ずるの此信仰たる、外界の信仰の如く、學術的思想より發するものにもあらず、之によりて立つものにもあらず、將た之によりて證破さるる可きものにもあらずとす、一切の哲學及び神學は、神の信仰の實知識たることを自定し、而して實知識として之に依頼すると、尚ほ形而下學が外界の信仰の實知識たることを自定し、而して實知識として之に依頼するが如し、

今夫れ伶人の靈魂は、樂器の音響に感應するの感性を有し、而して音樂を知覺、感受す、此の如く人は靈躰の接觸に感應する靈性上の感性を有するものなり、小兒介殼を執り、之に其耳を接し、而して其介殼を取り來りし大海の澎湃する音を其中に聞くと思惟す、其愚誠に憐む可し、然れども其靈魂に至つては、自己の屬する廣大深幽なる永遠境の耳語を聞かずんばあらず、

試に寫物鏡上に形成せられたる寫像を見よ、之を見るときは、其日光に接觸されたる、或實物の畫たることを知るべし、宗教的意識とは、覺官の範圍外より輝き來り、萬人を照して神を啓示する所の光により、靈魂の中に形成せられたる未見の靈躰の畫に外ならず、

ヤコビは人が覺官によりて外物を知覺するの能力と同一なる能力を有し、之によりて神及び靈躰を知るを認め、之を以て、至高至上の意味に於て理性と稱し得べきことを主張す、彼は曰く、此れ「靈物に對する靈眼なり、而して吾人は之を理性と稱す、世の哲學者と稱せらるゝ者にして、或は此器能を却んと欲するものあり、其意に謂へらく、我等は獨眼を以て却て一層明に我等の獨一の眞理を見るを得と、此に於て彼等は超覺者に對するの眼を抉り出し、之れを以て唯だ一物南觀の僞眼となす、さて此に注目すべきは、斯る手術を施したる後、此の獨眼は額の中央に位し、而して他眼の跡は全く失せ去ることにありとす、斯るポリフィーモス(ホーマーのヲディセー中にある獨眼の大巨人の名)は頗る廣く世に行はれたり、……ソクラテス及び後世プラトーは此片眼的知恵に反對し、而して若し人にして眞理に到達すべき者な

りとせば、必らず兩眼を有し、兩ながら之を張開せざる可らざるとを百方證明せり」(Jacobi, Werke, vol. ii, p. 74, 75; David Hume über den Glauben) と、且つ吾人はヤコビと正反對の見解を有せる教授レ、コンテも之と同一の結論に達せるとを發見す、曰く、「知識の材料たる事物は客觀的の實躰たらざる可からざるが如く、根本、普通なる宗教的信仰は、之に符合する客觀的實躰を有せざるべからず、吾人若し學術と宗教とを兩ながら破壞する彼の不可知説を信ずるに非ずんば、決して此結論を避くると能はざるなり」(Princeton Review, April, 1881, p. 172) と、ボーロ曰く、「夫れ人を見ることを得ざる神のことは創世より以來さとり得て明に見るべし」と、此れ豈に人が視る可らざる者を視るの眼を有するとを切言する者にあらずや、且つ彼の希伯來書の記者がモーゼに就て語るとき、「彼は見るべからざる者を見て耐忍べり」と、云ひしは、右と同一の事實を認容せる者たらずんばあらず、

斯の如く論し來れば、斯くも人の心性裡に組織されたる神の自然の信仰は、よし人未だ學術的思想の中に之を解定せざるにもせよ、宗教的奉事及ひ生活の合理的基礎と爲さゞるを得ず、今夫れ人は太陽の存在するとを證明し、又は天文學を研究せずとも、其存在するとを信じ、此信仰によりて以て動作するは、道理に合するとなり、又伶人にしてよし空氣の顫動の何物たるを知らず、且つ學術が依て以て音樂を説明する所の聲律の數理を夢想だもせずとも、音樂の實在を信じ、此信仰を保持するは道理に合するとなりとす、之と同く人にして未だ嘗て學術的に自己の信仰を辨護若しくは組織せんと欲せしとなくとも、神を信じ、而して宗教的に之に奉事するは、是れ道理に合するの事たらずんばあらず、此の理や移して以て、聖書中に説述されたる基督を信ずるの信仰、及び基督教の信仰を説明すべし、夫れ基督及び其生涯、及び靈力は切に基督教を證明するものなり、彼の基督によりて啓示せられたる神が人の靈的感性及び能力に接觸し、之を振起して活動せしめ、人の靈性上の希願、需要を滿足せしめ、且つ人其宗教上の意識によりて、神が其靈魂を化育、更新、榮養、洗滌するとを發見するや、人は未だ神を信ずるとなくんばあらず、然り而して此の信仰たるや、有心者たる人の至性より發し、其靈の眞腔に存生する者なるが故に、道理に合し、信任を置くに足るものなりとす、

若し斯の如くならずとせんか、人間の大多數は決して神に就て合理の信仰を有す

ると能はざるべく、而して確實なる宗教の基礎を具へざる者たるに至るべし、試に見よ、諸の天は神の榮光を現し、萬物は神の存在の證據を以て充滿す、學術は日々新に其妙智を啓示し、而して人性と歴史とは其道義法を告白し、其完全の愛を表發するに非ずや、然るに今日疑惑の念萬物に對して行はる、彼の神の榮光を表發する各事各物に附するに疑問標を以てし、或は烟雲濛々たる凡神説の峻岳より、或は一切の空間及び時間を通じて明光赫々たる形而下學の道途より、疑問と疑惑とを提げ來りて喃々吾人に説く、蓋し吾人基督教の證據を研究するときは、歴史の迷廊を探索し、舊都故邑を開鑿し、象形文字を解し、楔狀文字を釋し、而して千種萬樣の異文殊語を了解せざる可らず、然れども是れ多數人間の爲し能はざる所なり、然らば如何せん、是等多數の人間は遂に神を知ると能はざるか、或は彼等は智者學士の説を信任すべきか、此二者未だし、彼等は其心胸に觸れ、其生活の中に自己を啓示する所の神を發見せざる可らず、彼等は歌ふて左の如く謂ふを得べし、

"Away, haunt thou not me,
Thou vain philosophy.

Little hast thou bestead
Save to perplex the head
And leave the spirit dead.
Unto thy broken cisterns wherefore go,
While from the secret treasure, depths below,
Fed by the skyey shower
And clouds that sink and rest on hill-tops high,
Wisdom at once and power
Are welling, bubbling forth, unseen, incessantly.……

"Why labor at the dull mechanic oar,
When the fresh breeze is blowing
And the strong current flowing
Right onward to the eternal shore?"

故に知る可し、無識文盲の基督教徒が有する信仰は、是れ道理に合せるの信仰なることを、昔は嘗て迫害の時に當り、一少婦あり、其迫害者議論を以て之を攻擊し、以て其信仰を棄てしめんとせり、少婦忍て之を聞き、徐に答へて曰く、我は是れ無學の一少婦、能く基督の爲に論ずる能はず、されど我能く彼の爲に死せんと、

然り而して疑惑困難の思想起り、且つ其探究の際、端なく難問疑念の生し來るとありとするも、吾人靈性の至奥より發生し來る此の自然の信仰を固く抱持するは、此れ道理に合するの事なりとす、此希望をこそ、吾人は安全堅固にして、幔幕の中に入る所の、靈魂の錨として之を有す」、且つ蒼然たる死の影の襲ひ至る時に及び、人が一切の神學説に勝りて此活ける信仰を確持するも亦道理に合するものたらずんばあらず、ヤン、ポーロ、リヒテル曰く、「人の將に死なんとするや、靈疲れ、魂勞し、一切の器能凋衰し去り、其想像力も、其思想も、其氣力も、其愉樂も、盡く沒して復た起たず、是に於てか信仰の晩翠夕紅他に後れて獨り笑ひ、蒼然たる暮色の中馥郁たる異香を發つ」と、

神の信仰が人性の眞腔より自然に發生すると斯の如し、故に此信仰たる人間歴史の中に永存せざる可らず、而して思辨的懐疑によりて之を歴抑するも、是れ唯だ一時一部に限らるゝものなりとす、何んとなれば此の信仰たる形而下學に先つて存し、哲學的講究若くは神學的思想の前既に發生し、而してよし此等の者によりて確定され、且つ其道理に合せる信仰たることを表明せらるゝと云へども、然れども此等の者に依賴せずして自然に存在する者なればなり、實に是れ吾人人性の中に自然に湧起し、而して智力の中に生存すると共に、感情及び意志の中に存在する所の信仰なりとす、是れ人間が此等の信仰を保護せんとして非常の熱心を惹起し、其身命を抛て顧さるが如きとある所以なり、蓋し單に議論の結果若くは證據の力によりて懐抱する所の意見なる者は、決して安全なる者に非ず、新來の事實、新來の議論に逢ひ、又は勢力を有する人之に對して疑念を挿むが如きとあるときは、或は動搖し、或は破壞せらるゝとあるべし、若し宗教的信仰をして吾人の生活を支配する者たらしめんと欲せば、若し此信仰をして吾人を衝動するの動機たらしめ、吾人の行爲を判定すべき標準たらしめんと欲せば、若し之れをして吾人に犧牲献身の行爲を要求し、之が爲に殉難の誠を致さしめんと欲せば、其信仰や必ず議論、證據の勢力に

基ける一個の思想に勝る者ならざる可らず、有心者たる吾人の本性より發生する者ならざる可らず、神との眞實の交通として存せざる可らず、神の在御及び神愛の眞實の經驗たらざる可らざるなり、果して此の如く人の有心性に基き、靈性の中に生存する時は、其信仰や、學術及び哲學思想に遭逢するも、能く永存するとを得べく、若し一時壓抑せらるゝが如きとあるも、再び勃然として興起せずんばあらず、吾人若し人に神の知識を敎示せんと欲せば、以上の原理に從て之を爲さゞる可らず、若し神の信仰にして已に有心性の中に其萠芽を有するとなく、若し靈魂の中に神の感化力を實驗するとなく、靈魂よりして湧出つる自然の信仰なしとせば、敎育によりて開發す可き者もなく、將た培養して繁茂生長せしむ可きものもなかるべし、

蓋し人に神を知るとを敎へんと欲して誤謬に陷れる者少からざるは、其源一として此に存せずんばあらず、吾人は神の信仰を人の心中に注入せんと欲す、然れども吾人は之に反して寧ろ之を開發せざる可らず、吾人は人の智力に訴へ、議論に依て神の存在するとを人に敎へんとすれども、寧ろ既に其靈魂の中に存在して沈睡せる感性を醒覺鼓動して以て之を敎へざる可らず、吾人は宗敎を敎授的に敎ゆ、然れども吾人は我等の主の爲せし如く、先つ靈魂に示すに靈性上の實躰を以てし、以て其靈魂が靈性的に之に對應するを待たざる可らず、彼のポエシアスが謂へる如く、若し既に靈魂の中に火絨あるに非ずんば、神界の眞理の火は燃ゆるとなかる可し、ゼームス、マーチノー氏が謂へる如く、我等の主は常に「始より靈魂の蒼空に存し、然も說明者なきが爲に大陽と認められずして、微光と誤認せられたる神聖的原始的眞理を意識の中に喚起し玉へり」、

第四、神は之を信ずる信仰なる實行上の能力の中に啓示せらる、――神の知識は、一個人にせよ又は社會にせよ、人間が其至高の能事を大成すべき進步に對して缺く可らざる者なりとす、人は唯だ神のみ之を滿足せしめ得べき實際上の必要を有す、而して此必要は即ち神を啓示する者なり、

(一)第一神の知識は宗敎に缺く可らざる者なりとす、蓋し神の信仰は人の本性に發す、人の靈魂は其本性の眞奧より、及び其一切の能力資材より聲を放て神を呼ぶ、若し神なしとせんか、是れ人は宇宙の中之を使用す可き世界なきの能力を賦與せら

れ、且つ宇宙の中之を滿足せしむ可き目的物を、有せざる感性を稟有する者と謂はさる可らず、果して然らば有心者たる人の本性は自家撞着し、且つ宇宙の本性と相矛盾せる者ならさる可らず、人は靈的包圍を有せずして靈的本性を有する者たらさるを得ず、隨て彼は決して完全なる發達の境に達するを能はざる可し、人は唯だ其存在の一面を以て生活し、他の一面は麻痺萎靡し、然かも常に其冬痛を覺ゆるとによりて其存在するとを示すのみなるに至るべし、

果して右の如くなる時は、特に宗教よりして發生し來る高尚强大なる一切の品性は此に消滅すべし、神に對して犯せる罪を謙りて痛切に懺悔するとも、人が自ら薄弱微賤なるとを認め、頼みて以て自己を自己の上に擧げ、頼みて以て神の中に强くなり、而して純潔眞理、信仰、及ひ愛の旗下に立ち、毅然として萬惡に當り、死に至て悔ひさるに至る所の神の信仰も、百罪の基本たる自負自頼の精神に其歩を讓らざる可らず、神に對して抱く所の敬虔の念も、神前にありて生ずる謙遜の情も共に消え行べし、吾人は人が神の律法に服從し、神の愛護を受く可き者として、神の像に肖たる者なりとの高尚なる思想を失ひ、神と交通し、地上に神の王國を擴張せんが爲め、

神と共に働くとの聳動力を失ひ、人の價値、品位の思想、其權利の神聖なるの念、及び萬人の父なる神の前にありて、人間の均等にして同胞たるの概念を失ふに至る可し、吾人は宇宙を以て神が其智惠と愛の理想を着々實現して以て表現するものと思惟するとなく、且つ人は彼の神が漸次に正義と恩惠の統制を其中に擴張し、而して未來は過去に比して常に完備せりとの希望を存して、以て人間社會を神の王國と化成する所の靈系に存在するとの思想を失ふに至る可し、然り而して人靈不滅の大希望と大衝動とは、消滅し去らざるを得ず、

豈に唯だ之のみならんや、人は自己を顧みて自ら剛猛不敵なる萬有の勢力に服屬するを悟り、隨て神を有せざるときは、自己が無明の宿命に附屬するとを發見す、抑も人己を顧みて、其無明の勢力若しくは專横なる能力に屬從するとを意識するは、是れ卑陋墮落の情を有する者にして、卽ち隷屬の意識に外ならず、然り而して此れ實に人をして絶へず不安不滿の境に沈淪せしむるの源泉なりとす、人既に此等不敵の勢力に服從し、隨て之が爲めに抑制せられ、失望に逢ひ、災厄を蒙り、死に臨入す、此に於てか人は遂に疑問を發して曰く、人性果して生存するの價値あるかと、因て

歴世主義に陷り、或は遂に自殺するに至る、果して斯の如くならずとするも、彼は自殺を以て人世の災厄より離脱すべき唯一の手段となし、以て之を是認するに至る、若し此の如く宇宙の勢力に屬從するを意識して其壓制に苦しめる人を救ひ、以て之を自由の境に生活せしめんと欲せば、唯だ其人をして神に依頼するとを意識せしめ、且つ宇宙は其一切の勢力を具へて神に屬從し、神の完全なる智恵と愛とによりて統御せらるゝとを知らしむるに在るのみ、此に至て人始めて和平を得べし、故にブラウニング夫人は詠ふて曰く、

Oh, the little birds sang east and the little birds sang west;
And I said in underbreath, All our life is mixed with death,
And who knoweth which is best.

Oh, the little birds sang east and the little birds sang west;
And I smiled to think God's greatness flows around our incompleteness;
Round our restlessness his rest.

もゝ鳥はわが西にも東にもさへづりき
われは坐につぶやきぬ　あゝわが生は死と混れり

いづれが優り劣れるや　世の人たれかわきもふべきと
もゝ鳥はわが西にも東にもさへづりき
われはそぞろに微笑ぬ　神の大德わがよわきを護り
その平穩はわが憂をかこむ

夫の「有神説の公平なる探究」と題する書を著はせしフィヂカスと自稱せる人は、予が茲に陳述せしことの眞正なるを證言して、以て其卷を結べり、曰く、「有神説の問題を以て、此の如きことあり得べしといふ相對的知識のものと爲すも、將た之を以て全く正式の考察と爲すも、何れにして予が自ら最も高尚なる種類の信仰と思惟する一切の信仰を壓殺し去り、此問題に關して、予の智力をば最も純粹なる懐疑主義の摸型に陶成すべきは、明白なる予の責任なりとす、然れども予は彼の「新信仰」の曙光を以て「舊信仰」の夕陽に代用すべき價値あるものと爲すの論者に同意する能はざるものなるが故に、予は斯く思辨上より神を否定するにより、轉た宇宙が其明媚の精神を喪ふたるを自ら感すと白狀するを恥ちざるなり、且つ夫の「世ノ間ニ働ケ」といふ訓誡は爾今「何人も働くと能はざるの夜來るべし」てふ語の痛切なる意味に

よりて語意を強めらるゝと疑ひなしと雖も、然れども予は動もすれば予か舊來抱持せし信條の神聖なる榮光を以て、予が現時の凄涼慘澹たる存在の光景に比し來らさるを得す、然り而して此時に際して予は未た嘗て衷心より痛絶悶絶せすんばあらず、何となれは現時の要求に應する丈け十分に進歩せさる予の智力に因るか、又は少なくも予が生涯中最も珍貴なるものたりし夫の神聖なる聯想の記憶に因るかは知らされども、予は予及び予と同一の思想を有する人々に對して、夫のハミルトンの語中に恐るべき眞理の存するとを感せざるを得ざればなり、曰く、哲學は啻に死と云ふとは熟考するのみならずして、滅絶と云ふとをも沈思するに至るが故に、『汝を知る』てふ教訓は自ら夫のイデバスに授けられたる託宣と化し去れり、託宣に曰く、『汝は到底汝の何者なるやの理を知るを得ず』と、『又英國の故教授クリフォードは言へり、『有神的信仰の之を抱持する人に對して慰藉となり、之を失ふの悲慘なる損失たるは疑ふべくもあらず、是れ少くとも現に之を懷抱し、若くは其幼時に之を信受し、爾來稚兒の其慈母を離るゝとき感するが如き憂悶の情を以て之を抛棄したりし人の皆固く信ずるところなりとす、吾人は精靈なき地球を照さんとて空虛なる天より輝き出つる陽春の大陽を見るの心地し、吾人は大朋友の死したるを感して凄涼孤獨の情に堪へず』と、傳へ云ふ、夫のレナン氏も亦『吾人は虛瓶の薫香を嗅ひで生く』と言ひしことありと、蓋し此かる告白は吾人の勝て數へ得べきところにあらず、以上掲けたるものゝ如きは、豈に神なきの學術の不完全を示し、其人を助けて以て、夫の神なしとなすとき必ず人の靈性上の冀願と其動物性との間に存し人の有心性と、其包圍との間に存すべき撞着を經過せしむるの力なく、又人を濟ふて其不安、不滿を免れしむるに足らさることを證する無上の證言にあらずや、實に是れ夫のマシュー、アーノルド氏の要求に痛く反對するものなりとす、氏は曰く、

"For the world cries, Your faith is now
But a dead times exploded dream;
My melancholy, sciolists say,
Is a passed mode, an outworn theme."

"Ah if it be passed, take away
At least the restlessness, the pain;

Be men henceforth no more a prey
To these outdated stings again.
The nobleness of grief is gone;
Ah, leave us not the fret alone."

そは世界は叫ひて云ふ　汝の信仰は今や唯た
過きし昔に醒めたりし　むなしき夢に外ならず
淺き學の者すら云ふ
わが愁はふるくすたれしならひなりと
すぎにしものにてあらんには　ぬぎすてよかし少くも
胸のさわぎといたみとを　ふたゝび此かるいにしへの
心さす刺にかゝらざれ　悔をたふとぶはすぎし習ひ
わがたましひのその中に　憂をのみぞ宿すなよ

(二)神を信する信仰の勢力は人間活力、發達の一切の範圍内に貫盈し、以て實際上之を感化影響するによりて現はる、

フレデリック、ハリソン、ロイス及其他の諸氏は宗教にして存在すべきものたらは、云々のものたらさるべからずとて之に就て雄の偉陳述を爲せり、其言に曰く、宗教は吾人の最大なる智識及吾人の至深なる確信と符合し、又之を維持せさるべからず、宗教は人が頼て信じ、頼て感じ、頼て行ひ、要言せは頼て生死すべき人生の哲理を與へざるべからず、吾人を皷舞して其最も克己的に最も高尚なる行爲を務めしめざるべからず、社會の潔素、進歩の元氣たらざるべからずと、

有神論者は此陳述を是認し、又從容として論者の挑戰を諾するものなり、有神論者は永遠の靈、キリストによりて自己を最も高尚に啓示したる愛の神たる神を信ずる信仰の、以上の高尚なる目的を達するに必要なることを説き、又着々此等の目的を達する神に於けるの信仰の勢力によりて、神は常に自己を人に啓示することを論ず、夫れ神に於ける信仰よりして無神主義に變するは、是れ宜に宗教固有の要素を棄つるものたるのみならず、人間活力、發達の一切の範圍に對して悲慘なる影響を及ぼさゝるを得ず、若し宗教固有の一切の元素をして排除すべきものたらしめ、若し人の有心性に存して宗教の根となり、神によりて以て其發達、滿足を得るとと

ろの一切の能力及感性をして正當の發育にあらず、隨て之を使用すべき目的物もなく、其存在に對する理由もなきものたらしめ、若し一切の靈性上の關係及命運の意識、及び靈魂不死の一切の希望をして妄想たらしめば、是れ實に吾人が宇宙、人間、及其歴史と命運とに關して有する概念の至深至根の大變化と謂はざるべからず、若し人の知るべき神なるものありとせんか、此れ必ず人間の行爲及利害に關する一切のものが其美容を得、其方向を決し來る一大根本事實たらざるを得ず、若し此知識にして滅亡せんか、其變化たる人性の全躰に急激、巨大の影響を及さゞるを得ず、サー、フィッツゼームス、スチーヴン近時一論を草し、其中切に宗教の超物的基礎を有せざるべからざること、及ひ神學即ち神に關する教義の宗教に至要欠くべからざることを論し、若し神たる者を信するの信仰にして跡を絶ちなば宗教の滅亡すべきことを說示したり、然れとも若し人生をして夫の無神的學術の說くが如きものならしめば、是れ世に宗教に對する目的物及資材なきものと謂はざるべからす、加之無神論者は大膽にも吾人の此かる目的物を要せざることを主張するに至る、其言に曰く、「吾人は此れなくも能く生活し得べし、何となれば縱し學術が吾人に啓示するところの人生觀によれば、吾人に供するに毫も崇拜すべき目的物をもつてせず、と雖とも、吾人をして愉樂を享けしむべき無數の事物を與ふればなり、……吾人は舊來抱持せしと相異なれる原理に隨て生活せざるべからず、然れとも予は思考す、自己の眞地位を了解し、而して相當の好運を有するものは、尙人生の頗る愉快なるものたるを發見すべし」と、果して論者の言の如しとせば、彼の宗教的能力を有せざる猫犬も亦た無數の以て樂みなぐさむべき物を宇宙に發見すと謂はざるを得ず、人が宗教を有せずとも幾多の愉快を享け得べきは固より疑ひもなし、然れとも疑問は此に在らずして他に存す、即ち人は其本性上享得し得べき一切のものを享得し得べきや否や、人は其存在の最上の能事を實現し、其本性か人間の理想と指示することを成遂し得べきや否やに在りとす、故に彼のスチーヴン氏が吾人は相異なれる原理に隨ひて生活せざるべからずと言ふは、非常に恐るべきの旨を其中に含蓄するものと謂はざるべからず、而して氏は之を覺らざるものゝ如し、若し神に於ける信仰にして、吾人の已に看得せしが如く、人の本性に自然に發生するものとせば、神なきの生活を以て甘んずるの人は、是れ其人の已に人間たらざることを示

するものにして、有心的及人間的生活に劣れる生命界に墮落せしものと謂はざるを得ず、何となれば神は靈系の中心たればなり、

吾人は今より進んで、神を拒絶するとき、神に於ける信仰の勢力の間接なる作用の範圍内に、實際上及ぼし來る影響に就て二三の例を擧けんと欲す、

先つ此拒絶たる眞理の考究を妨害するに至るべし、

スチーヴン氏は神を拒絶すとも、尙ほ學術的研究の樂ありて以て人を滿足せしむべきことを謂へり、然れども吾人は記憶せざるべからず、假令ひ人神を拒絶すれば

とて、之によりて有心者たる其本性を變化するとなく、而して宗教の範圍外に於て尙ほ其有心的及靈性的能力及ひ感性を使用し、且之によりて愉樂を享け得べきことを、故に神を拒絶するの人にして、學術研究を以て快事と爲すこともあるべし、然れども吾人が已に知れる如く、神の否絶は學術思想の範圍を狹隘にして、其結果の雄偉を損し、學術的探究に對する强大の動機を滅殺す、宇宙の究竟基礎を以て理性と爲さゝるが爲め、其萬物を合理系に統一して以て之を曉得する事も、又は之に對して合理的旨趣及意匠を發見する事も叶はざらしめ、且つ宇宙が普遍理性により

て貫徹統制せらるゝことを拒み、人の理性が之と同一種のものとして其光明を分享することを否定するが爲め、遂に一切學術上の結論をして信頼すべからざるものたるに至らしめ、隨て一切の學術的知識をして成立すること能はざるに至らしむ、

若し神なしとせは、又倫理及道義に根本的の變化を生せざるを得ず、人の本性は依然として同一なるが故に、此に於ても自然人の心中に義務、本分、及道義法の念を喚起せざるを得ざるなり、然れども此本性たる今や一の合理的辯疏若くは說明を有するとなかるべく、而して道義法も最早や絶對の權威を保つことあらざるべし、人は各々自治者たるべければ、此律法も決して普般、無上の者と見做さるゝことなかるべくして、只個々の心中に存するまでの者と爲るに至るべし、人が賴て以て自己を自己の上に擧くべき人間以上の者なかるべく、世に道義上の自由及責任なる者存せざるべし、普般にして到る處に活動する理性なる神を拒絶するよりして、宇宙の道義系及道義的秩序に對する基礎なかるべく、隨て衆德の樞星たる愛の法に對する基本失せ去らざるべからず、義務は愛に代りて立つべく、而して善良なる品性

は融化して個々別々に自家の義務を盡すことゝ成り果つべし、加之已に絶對理法を欠き、隨て永遠なる絶對律法なき以上は、何者が善なるやの問題は、唯實驗上福(ゲッド)の觀念よりして決定せられざるべからず、而して善とは唯だ最も多く幸福(ヘッピネス)を催進することゝなるに至るべく、隨て善といふ觀念は便益といふ觀念と同一に歸すべし、是に於てか吾人は上古の鄙敎に於て人生を觀察せしが如き卑陋の思想に退歩せざるを得ず、蓋し鄙敎に在ては、自然に隨ふを以て至上法と爲し、其衝動を滿足するを以て至高の理想と爲し、「人生の火を以て其雙手を温め、然かも愼みて其指を燒かさる樣にする」ことゝ、若くはシセロが言つる如く、餘義なき出發の時間來るときは、其享けたる饗應に甘んじて直に其場を去る賓客の如く此世を棄つる樣、人生に處するを以て至德と思惟せり、フォリエーは云ふ、神が吾人に情慾を附與したるは之を抑壓、制御せしめん爲めなりとは、如何に奇異なる思想ぞや、是れ豈に其小兒をして其罪惡を征伏するの榮を得せしめんとして、其心中に罪惡を助長せしむる父の如き話にあらずやと、然り而して吾人若し絶對理性なる神の中に永遠に存する道義法を認め、又人が神の律法の下に合理、道義の系統を成して以て相連結することを諾するにあらずんば、予は到底以上の結論を避くるの道なく、又貴重なるものとして道義的本分と律法とを維持するの方法なきを見るなり、曰く、本分の念、曰く、犯すべからざる權理を賦與せられたる有心者として人を承認すると、曰く、人は唯だ他物の奉事を受くべきものにして、他の爲めに所有若くは使用せらるゝものにあらざると、此かる思想なるものは唯だ神なる觀念より發し、又人間か神の律法の下にありて互に相關係して以て生活するところの靈系なる觀念より生するものたらずんばあらず、天下到る處苟くも人類の生活するところに生存成長する本分の念なるものは、夫の「目的の領土」、夫の神的及靈的の境内に深く其高尚なる根を有し、此根によりて以て其生命と榮養とを吸取し來るものなりとす、

有神說を拒否する一切の理由は悉く移して以て道德を拒否すべき理由と爲すことを得べし、神なくして倫理學を組成せんとするか如く、到底徒勞たるに過きず、今夫れ衆星が一個の中心に文學を組成せんとするか如く、是れ大陽なくして大陽系の天共通の關係を有し、一系統を成して以て存在するを得るは、大陽の存在するあれば

なり、此と全じく、一切の人間が神に共通の關係を有し、道義系を成して以て存在す

ることを得るは、神の存在するに由らずんばあらず、

故に吾人、人の德性の高尚なるときは、神に於ける信仰の人の心意に驩迎せらるゝことを發見す、神と宗教とが人の意に背反するあるは、唯其利己の情及肉慾邪念の横恣なるときに過きず、故にレナン論ずらく、「若し宗教をして單に彼の占星學、魔術、及ひ其他の幻想の如く、人の誤信よりして信受せられたるものたらしめば、學術は業に已に之を掃蕩し了りたるなるべし、若し宗教をして、唯た人か地上に在りて德義を積み、之に對する報酬を死後に受けんと希望するが如き淺間數算定の結果たらしめば、人は其私慾利己の情尤も炎々たるとき、尤も宗教に熱心なるべき筈なり、今夫れ人の最も宗教的なるときは、其心情の尤も潔美なるときなり、人が永遠の秩序に符合せる德義を有たんと願ふときは、其尤も善良なるの時なり、人が死を以て暴戻非道のものと爲すときは、是れ其尤も公平無私の心を以て事物を考察するの時なり、誰か謂ふ、此かる時に人の視力は最も明瞭ならずと、利己、放蕩の輩と、善良謹直の人と、孰れか善、孰れか惡、智者を待て知らさるなり、……故に吾人は切言痛述せさるべからず、曰く、宗教は正則なる人間の產生物なり、曰く、人の最も宗教的にして、最も其無限の運命を確信するの時は、是れ其尤も自己の自己たる時なり」と、

懷疑的學術家等は思へらく、學術は神を要せすと、然れとも若し神を舍つるときは、學術は又倫理をも舍てさるべからず、彼のハリソン氏の言は千古不易の名論なりとす、曰く、「彼の進化法何者ぞ、安ぞ能く人性全躰に對して基礎を與へんや、何ぞ能く其道義性を動かし、其感情、其崇敬、其熱心、其愛情に訴ふるを得んや、人の情は彼の元形質を愛するを得さるなり、又彼の適種生存の觀念に對して熱愛の情を發せさるなり、吾人の道義性は物質の中に伏在する動力的潛勢力を考察して、以て潔成、改化せられざるなり、吾人は未た永久進化の法によりて一層純潔に、一層剛毅に、一層慈愛に進みたるの人あるを聞かず、道義の基根たる宗教を己が心裡に具ふる眞摯の君士が、この自定に對して發せし嘲笑、輕侮の語は、强ち不義、誇張に失するものにあらす、聖書及び信經、誡律の舊墟、及び嘗てポスエー、ペーナード、アクィナス、若くは失樂園、天路歷程及び英國祈禱書の已に占有せし場所に建築するに、勢力の不定的永存法及び物質の潛勢的可變性に於ける信仰を以てせんと欲するが如き、其の妄想の甚しき、以て世人の譏笑を招くに足るなり、進化法なるものは人の存在する限り、決

して人よりして情性を剝奪するものにあらず、將た崇拜の念、熱愛の情献身の精神は永く人間社會の至深至奥の勢力として存すべし」と、シヂュウィック氏が其著「倫理方式」の末篇に述へたる結論は此と旨趣を同ふするものなり、氏曰く「人は謂ふべし、此前提(神の存在及道義法に對する神の制裁)若し如何にかして成立せば、是れ實行理性に取りて生死の決するところなりと、……將た予は夫のカントの説の如く、吾人は思辯的に無上實在者の「實在者として」存在することを信するを得ずと雖も、一切吾人の本分を以て神の誡律の如く見做すべき道義的必至の下に在りと自ら信することを得ず、……然かも尙ほ人か其信せし如く實行理性を使用して生活せるの度と、善良、合理のことゝして善良、合理の事を行はんとの願望を實際上の勢力として感ずるの度とに隨ひて、此前提に對する要求の痛切、勁烈なるは誠に明白なるものゝ如し、故に此願望の切なる人に取りて千古の儀表たる大賢ソクラテスが、其自信するところを告白し、「若し宇宙の主宰者にして義人を揚けて不義者を抑ふることなしとせば、吾人は生くるよりも寧ろ死するに若かず」と叫破せしは、決して驚くべきことにはあらざるなり、……若し吾人にして實驗によりて確定すると

能はざる、然かも各個理性と普般理性とを調和すべき一個の臆説を有せず、又吾人が實際此世界に於て不完全に實現せられたるを見るところの道義的秩序は、實際上完全なるものなりとの多少の信仰を有せずんば、品行なるものゝ性質には合理不合理の存するありとの吾人の信仰は全く破壞せざるを得ず、若し吾人にして此信仰を棄却するも、吾人或は非道義的宇宙の中に思辨理性に對する適當の目的物ありて、或る意味に於ては竟に了解せらるべきものあるを發見するともあるべし、然れども此に至らば本分の條理世界は變して渾沌世界とならざるを得ず、然り而して合理的品行の完全なる理想を形成せんと務むる人間の大事業も、前途濛々只彷徨くべからざる失敗の海霧を以て塞かるゝを見るのみ」と、

且神てふ知識は人性の最上能事を大成する爲め人の進歩するに對して必要欠くべからざるものなり、完全に進まんが爲めの教養、成長に對して必要なる者なり、吾人若し社會の中に棲息するの人を見るときは、其思想の中及其品性、行爲の中に一種の標準ありて、萬人均しく之に訴へ得べきものあることの、社會の存在、殊に其福祉に對して至要欠くべからざるを知る、人々互に知識、思想を交換するとき、彼此

其了解するを得んが爲めにも、何等の主題を論究するにも、議論を發表するにも、共通の結論に達せんか爲めにも、必す普般の理性及ひ其共通の眞理なかるべからず、之と均しく又道義的判定に對する某の共通標準なかるべからず、夫の人間社會を響導、改良するに十全なりと自稱する唯物説及其他の非有神論的理論は、信仰の疑問を決するとき萬人の訴へ得べき某の共通、普般なる眞理を表示し、又品性、行爲の某の普般法を呈出せさるべからず、萬人か賴て以て感動、皷舞せられ、以て至高至上の生活を爲すべき共通の情操を供せさるべからず、此等の原理、律法、及情操を萬人に揭表するに、萬人を照す絶大絶明の光明、即ち「凡ての人をてらす眞の光」の中に於てして、以て之に權威を附せさるべからず」と、故にランゲは言へり、「若し孜々として己の利をのみ是れ營むに代へて、利己主義を掃去し、新に人間互に相親交して以て其完全に達することを目的と爲すの大觀念出て來り、其旗下に在て戰ふにあらずんば、此新時期も到底克捷の望あらず」と、

今夫れ此かる大觀念、此かる高情操は愛の理法中に發見せらるゝものなり、然れども若し此愛の理法にして、夫の宇宙が其不變の眞理、理法を表發、啓示するところの普般理性の理法たるにあらずんば、若し此理法其物にして社會及び宇宙の本性たるに非ずんば、若し此理法にして宇宙は其一切の運行に於て、達せさる所なき智惠と愛の勢力に因て維持、指導さるとの信仰を人に吹き入るゝに非ずんば、決して社會を結合し、且つ其進歩を奬勵、指導するの勢力を有すると勿るべし、彼の一切の非有神論的理論に向て社會の結合に對し、社會の幸福なる存在及び其健全なる進歩に對して十全なる原理及び構造力を供給せんとを要むるときは、決して其要求に應ずると能はさるなり、有神説は即ち然らず、有神説は絶躰にして普般なる理性を擧げ、萬人皆其光明を共に俱にする者となし、以て思想の統一に對する十全の原理を表示し、愛の理法を揭げて、以て道義的情操に對する十全の原理を表示し、且つ神の愛なると、及び萬人皆神を信し、愛の生活を送らざる可らざるとを啓示し、以て人を鼓舞して高尚の生活を爲さしむ、

此れ又神に於ける信仰を實際上より檢討確定するものと云はざる可らず、夫れ神が自己を人に啓示するや、又人に啓示するに其人自己を以てす、神の人の靈に接觸するや、此を醒覺して肉の生活より靈の生活に移らしめ、之をして其靈性上の能力

及び關係を覺らしめ、而して之を鼓舞して靈の生活を送らしむ、此れぞ即ち彼ランゲが所謂「新時期」に對して要求するところに應すべきの勢力にして、人をして大觀念の旗下に隨ひ、利己主義を掃蕩し、人々互に相親睦して、以て人間至上の完全を成遂すことに盡力粹勵せしむべきものなりとす、ランゲ附言して曰く、「若し彼の大智異能の士人間に、人間の發達及び歴史的作用の性質を洞察するの風今一層廣く行はれたらんは、必ず此焦眉の急に迫れる衝突を減ずるなるべし」と、蓋し此洞察によりて發見せられ、而して人間の平和なる進歩をなすに必要なるべき大觀念及び大動機は、神の自己を人に啓示するに由りて、人が自己の眞相を覺るより生ずる所の者たらざる可らず、又神の靈の人の靈に接通するとき發動し、之を醒覺して自己の靈性上の能力及び關係を意識せしめ、之を鼓舞して自己及び人類に對する最上の靈性上の目的を成遂せしむる感念及び動機たらさる可らず、而して基督に於ける神の啓示は神の啓示の最も完全なる者なるが故に、他の一切の啓示に比して一層多く人の眞實の價値を啓示し、其至高の目的に向て其至高の能力を使用せしめたり、基督の未だ世に出でざるのときに當り、及び異教の文明に於ては、一個人は全人類の中に埋沒せられ、國家の中に沈沒し、之に對して毫も權利を有するとなく、唯だ義務をのみ負へり、而して家族の一人にして罪を犯すときは之を族滅すべき者なりとの思想の廣く盛に行はれたるものなりとす、然るに一たび神が基督にありて、唯に一個の統一躰として人類に其愛を啓示せしのみならず一個人に對し、及び罪より人を贖て以て罪人にすら其愛を啓示し、又基督にありて人が教職若くは教皇の仲保を要せずして、罪を離れ神に歸する其一個人の信仰により神に義とせらるゝことを宣言し、及び其萬人に命じて自ら其密室に入り、而して父の子に對するが如く、獨り神と交ることを爲さしめしや、乃ち人は一個人たる人の貴ぶべきと、人の神の像に肖たることと、人の量る可らざる價値を有すると、及び其權利の神聖なることを悟了せり、蓋し人、神と面を對して相見てこそ始て自己の偉大にして品位を有することを知り、其義務と權利の神聖なることを悟り、其實在の旨趣及び可能性を解することを得、神を信ずるの人は自己の靈にして單に肉にあらざることを信じ、自己の靈たることを信ずるの人は又神を信ず、此れ人は信仰によりて義とせらるとの聖書の教義に對して哲學的の根據を與ふるものなりとす、蓋し人が自己の存在の眞趣を發見する

は、獨り神を知るの時に存し、人が其存在の眞實にして且つ最も根本なる關係を發見し、而して其生活と行爲とをして己を圍む所の實躰、換言せば、其眞實の包圍に契合せしむるに至るは、唯だ其有限の生類として自己が神に頼て立つことを知り、而して一切の實在及び一切の生活の源泉、支柱として神に信頼するときにあり、且つ人の靈的潜勢力の鼓動せられ、其存在の至高の能事を成遂する樣指導せらるゝに至るは、唯だ其智慧と愛とに於て完全なる絶躰理性若くは靈として神を會得し且つ之に信頼する時にありとす、此事實たる聖書も、哲學も、歴史も皆均く確定する處なりとす、

From God is all that soothes the life of man,
His high endeavor and his glad success,
His strength to suffer and his will to serve.

人生を慰籍する所の一切の者も、其芳烈も、偉蹟も、
百難を冒すの氣力も、萬人の爲に盡すの高志も、
皆神より出づ、

神に於けるの信仰は、人間歴史の全路を通して絶えず其實際上の檢討に當り、自ら進んで其探究確定を受けんことを願ふ者なりとす、

若し吾人にして神を拒まんか、此に至て完全なる人間と云ふ理想は根本より變化せざるを得ざる可し、コントは云ふ、實驗主義に從ふときは、人は己を以て天使の最下等なる者となすを止め、獸類の最上等なる者となして以て自ら滿足せざる可らずと、然れども若し人己を以て永遠の靈なる神に共通の關係を有し、以て互に相結合せる有心的にして靈性的なる實在者の一系統中に存在するの有心者となさず、若し靈系の一切の利害及び希望、一切の活力、可能力及び計畫にして雲散霧消し、而して人は唯だ獸界に閉鎖せらるゝとせば、何んぞ其作用及び希願、其實在の可能力、其の完成及び其の進歩の目標に對する人間の觀念に急激の變化を起さゝるを得んや、

論者或は難して云はん、假令ひ人、神を拒むとも、實際此れに因て純然たる獸界に墮落する者に非ず、人は尙ほ學術及び技藝の樂を有し、道德の感念を有し、本分に從て動作する者なりと、是れ或は然らん、然れども其の此の如くなる所以の者は、よし人、

神を拒否するも、之れによりて有心者たる其本性を變化するとなく、以て尙ほ動物世界より一層高尙の目的に對する希願を有し、而して一層高尙の境に其能力を發揮するによる、此の如くにして有心者たる人の本性は其不信、拒否と相反對する者なりとす、人は普般理性の光明を共有する者の如くに其理性を使用し、絶對普般の理法たる如くに道義法に服從し、自己が尙ほ最下等の天使たる如くに完成を願ひ、自己が神の像を有し、靈性上の完全に達し得べき者たる如くに眞と善とを熱愛し、理性の理想を慕ひ、且つ肉情にとりて全く意義なき靈魂上の情操を有す、人は其肉情に超越するの價値を有する者の如くに情操を貴重せざるが如きともあるべし、然れども其信ぜずして之を棄却したる一切の原理は、必ず彼に告ぐるに其棄却の愚なるとを以てせざるを得ず、然り而して此に所謂る「の如くに」若しくは「たる如くに」と云ふ所の作用は、是れ靈的實躰を啓示する者たらずんばあらず、

若し神なしとせば、人生の理想及び目標は果して如何なるべきや、是れ蓋し吾人の殊更描き出すを要せざる所なるべし、何んとなれば吾人は既にハックスレー氏が大手腕を揮て、其著「生命の形而下基礎」中に描き出せる一個の圖畫を有すればなり、

氏はゴエテの「ヴェニス絶句」中の一を折し、而して此一句の中に「ゴエテは人間一切の能力の測定を包括せり」と云へり、其句に曰く、「何が故に人は若かく營々として又營々たるや、力の及ぶ丈け飲食を得、兒女を產して之を養育せんとてなり、……如何ほど勵精するも、人は到底此上に出る能はず」と、氏は此に於て、複雜なる人間一切の活力は此三種の中に包括せらるゝとを說明し、而して附言して曰く、「彼の吾人が高等なる器能と稱して不可なきところの智力、感情、意思の表現も此彙類の外に出るとなし、何んとなれば此かる表現を有する主觀者を除くの外は、何人も之を以て人躰の各所に於ける一時の變化と爲さゝるを得ざればなり」と、若し此の如く看來れば、吾人は之を以て人間の最上能事となし、人生完全の標準となし、人間一切の進歩の目標となさゝるを得ず、「ブルーガム公其の人智の進歩を豫期するの情を述べて、英國中の人々皆ベーコンを讀み得るの時至らんことを望むと云へり、蓋し稍々誇大に失するの言なるが如し、コベット氏滑稽的語を以て之に換へ、英國中の人々にして皆ベーコン(鹽藏の豚肉)を食ひ得るの時來りなば、我は能く滿足するを得べしと云ひたり、若し此語にして單に、世上より貧窮を除くとは智力開發の普及より

一層焦眉の急務なりとせば、是れ滑稽なると均しく又適當の說なり、然れども教授ハックスレー氏に取りては、氏が究竟、至高の希望を表白して遺憾なき者と謂ふべし、彼の「ユダヤ」の預言者は將來「神を知るの智識地に滿つる」の樂境に達する時あるべきことを豫言せり、然り而して此に擧たる新しき福音に至ては、是れ將來「全地の人皆豚肉に飽くの時あるべき」ことを豫言するものと謂はざるべからず」、ハックスレー氏が其讀者に注意して、「衆人の意見によれば諸子にして以上の結論を承認するは、ヤコブが夢みし梯子の反對にして、地獄に達する梯子の第一階に其足を投ずる者なり」と云ひしは、眞に當れるの語と謂ふべし、

此に於てか吾人は往昔イエスか對照せし二種の文明の相反して優劣を爭ふを見る、一は唯だパンによりて生くる者、他は神の語によりて生くる者、一は唯だ產物の增殖を見て利益を覺り、人を擠して製造的器械に墮落せしめ、之をして唯だ「富積み、人朽つる」所に辛勞肥滿して終らしむる者、他は物質上の享得、愉快を蔑如することなくして、之を智力的、審美的、社會的、及び靈性的開發に附屬せしむる者、一は人の至高の能事を以て萬有の學生たるに過ぎずとなす者、他は彼のクプラーと共に人を以て萬有の學生及び說明者となすと均しく、又神意の學生及び說明者となし、人を「神に隨て其思想を讀む」者と認むる者、一は唯だ物質力の結果として人間及び其一切の進步を說明する者、他は神の愛より發生し、神の恩惠の行爲を表發し、義と平和の王國を地上に建設し、人により又人の爲に地上を更新し、而して人に與ふるに萬有に超越するの權力を以てし、之をして其世に造られたる所以を全ふせしむる所の靈的能力の結果として、人間及び其一切の進步を說明する者、即是れなり、然り而して神を信ぜざるより生起する者、即ち氷山の如く社會の面を匍匐して、以て一切の靈的生命及び美質を凍殺、埋沒する所の實躰的にして唯物的なる文明は實に此二種の中甲者に在て存するなり、

斯る文明にして漸次に其正當なる結果に達するときは、技術は其理想を失ひて實物を摸寫するのみに止り、美術家の業たるよりも寧ろ畵工の業たるに至るべく、詩學は茲に其感動力を失ひ、而して偉人烈婦が身命を拋て以て擁護せし彼の高尙なる情操も、唯だ熱狂として嘲笑せらるゝに至るべく、人間の大目的は技手となるにあるべく、而して彼のダイオゼニスは紛々たる幾多專門家の群中に一個の人を發

見せんとて、再び白日に燈を掲げざるを得ざるに至るべく、技手は其作よりも劣等のものとなるべく、而して若し必要に際せば其作を増植せんがため作者反て己の身を犧牲に供せられざる可らざるに至らん、彼のコムトが實驗主義の支配の結果として記載せし所の文明にして果して實現せらる可き者とせば、斯る感化力の下に於て始て行はる可きのみ、人は國家に關しては毫も權利を有するとなく、唯だ義務を負ひて其機械となり、一種の儒官あつて擅に各人の業務を決定し、時々刻々勞働、飲食、及び休息に關する一切の條例を制定して、而して古代の宗教裁判の如く、人の思想及び良心に立入りて、命令、糺察し、而して政治上若くは教會上に類例なき專制を行ひて、日常の私事に干渉するに至る可し、愛も國家に因て整理せらるべく、慾情の熾も、衝動の自由も抑壓せらる可く、高尚なる品性も、剛毅なる行爲も到底成立せざるに至る可し、萬人均しく條例の下にあつて利益を生産するのみなるが故に、世は單調子となりて個人は其中に沒し去る可く、事々物々其長短を失ひて平板なる中庸の水平に墮つべく、計畫に對する一切の刺激物も、天才及び特能の發達も、此に消滅す可く、而して社會は沈淪して一種の機械と爲り果つ可し、是れぞ即ち實驗

理學の福音に從ふとき、將に來らんとする樂境の光景なりとす、然り而して急激粗暴に神を拒否する共産論又び社會論は皆之と同一形の文明を實現せんと欲する者に非ざるはなし、

斯る唯物的傾向の端緒は吾人之を見ることを得ざるに非ず、チャールス、サムナーの死後未だ幾ならずして發行せられたる彼に對する記事中に吾人は左の語あるを發見す曰く、「彼れの事業の大成せられ、而して其力を用ゆべき業の殆んと絶へたりしことは是れ萬人の同意する所なりとす、彼れは吾人が稱して感情主義（センティメンタリズム）と稱し得べき者の盛に行はれし過去の政事的時期に屬せり」と、爾來世の風潮を察するに、彼の單に徒黨にのみ眼を止むることなく、所謂「實際的政事」を一層高等なる水平に擧げ、而して强大なる道義的原理によりて政事上の行爲を潔成振起せんと欲し、投機の精神の正業の版圖を蠶食するを防遏せんと欲し、而して基督教の愛の法を勞働者と資本主との關係に適用し、且つ全然利己主義の上に建設せられざる經濟學を構成す可き眞正の方法を發見し、以て共産黨、及び社會黨の急激なる革命を杜絶せんと欲する所の人を稱して感情家及び唯理家と謂ひ、以て之を貶斥するの傾

向益增加する者の如し、

博士ドーソン近頃スコットランドの一大學に於て、相當の學術的智識を有せる人が、

"What though in solemn silence all
Roll round this dark terrestrial ball;"
ふかくつゝしみ、この暗き
土のたまをば萬星
まづかにめぐりすゝむとも

と云へる讃美歌よりして、教職の學術に暗きことを例證せし演說を擧げ、而して云へり、若しアヂソンにして之に代用するに「輝きてれる日のたま」(Splendid solar ball.)なる句を以てするも、「人此讃美歌を歌ふて疑ふことなく、之を不當の句と爲さずして却て正當なる者と認む可く、而して吾人が有する眞理の確信を動かし、且つ眞實有識の士が宗教上の教育に對して有す可き敬意を破壞するが如きことなかる可し」(Dawson, Nature and the Bible, pp. 16, 17.)と、さて此に最も著く表明せられたることは、自ら稱して學術的と爲せども其唯物主義は其學術よりも一層明白なる人に於てはグラッド、グラインズの詩意を全く領會せざることにあり、然れども最も笑ふべきは、若し此嚴肅なる批評家の意見にして採用され、而して「眞實有識の士」をして教職の學術に暗きことに驚かしむることなからん樣改竄すとせば、吾人は敬神的の詩と爲さず、精密なる學術的に訂正せられたる詩として、一切の恒星は二十四時間毎に一たび太陽を回轉すとの驚く可き斷言を歌はざる可らざることにありとす、カーニスの謂ふ所によれば、前世紀中ゼルマンの自稱有識者にして地理學上の精密を保たんと欲し、實に「世界は凡て眠りたり」との讃美歌を改めて「世界は半ば眠りたり」と爲せし者ありと云ふ、予はランゲの語を借り來て以て此點を論ずることを終るべし、ランゲ曰く、「此かる言をなすは此れ全く他の教系(有神說を指す)が、蓋し其深遠なるより、其技術、宗教及び詩學との關係、及び鬼術、刺動するの快能を有するよりして、如何なる好機を所有するを得るやを看過する者たらずんばあらず」(History of Materialism, vol.ii, p. 157, Thomas's Translation.)

吾人は今や人が其福を得るに對して、神の知識の實際上に必要なることを考察すべ

きのみなるに至れり、

神の知識は人の福否を決定せざる可らず、若し人神を知るときは、之と交通し、之に肖、而して博愛の情を以て神と共に働き、地上に義と平和の神國を擴張し、之に因て福を享るとを得べし、然れども若し神なしとせんか、人が神及び靈系に關係を有するよりして享得すべき一切の至福は此に消滅せざるを得ざるべし、此の如くんば人の至上、唯一の福は其短縮なる現生に存し、行爲及び快樂の狹隘なる物質的範圍の中に發見せられざる可らす、

彼の禽獸を見るに、斯る制限の中に閉鎖せられ、而して自ら以て足れりとす、其本性の中毫も禽獸として有する所の其制限を意識せしむ可き者なく、若くは其性質の境を踰へて何等の高尚なる世界に眼界を馳するの力なく、若くは高大なる願望を起さしむ可き者もなし、若し夫れ人に至ては即ち然らず、人は飽食煖衣して福の念を感ずると能はず、有心者たる其本性は一層高尚なる其願望を醒覺して、一層高大なる希望を之に抱かしむ、此を以て其願望は其現世の狀態を超越し、其食ふ所の者によりて益す發達し、而して如何ほど現世の幸福を享くるの豐かなるにもせよ、人は依然として不滿不安の情を抱き、常に之れに勝れる者を得んとの願望炎々として其中に燃え、此に於てか人は妄念幻想の上に其希望を寄せしとを發見し、遂に人生果して生活するの價値あるか、と疑ふに至り、厭世主義に陷り、自殺せんと欲するに至る、今や自殺を行ふ者愈其數を增し、而して之を是認せんと欲するの風の復興せしは、是れ信仰朽腐の慘怛たる兆候と謂はざる可らず、

世の道德學者にして、人をして安心を得せしめ、之を濟ふて右の失望不平より脫出せしめんが爲め、人生の空闊妄想を排除するに反對して、人爲を以て一片の空闊を畵いて此艱世に行樂するものに干涉する勿れと、然れども此の事たる其救濟せんと欲する人間の不安心よりも一層慘怛たる者なりと謂はざる可らず、人は自ら經歷する世路の事實に對して目を閉て、復之を視ることなく、徒らに虛影を追ひ、其空なるを覺れば、又愈熱して之を追ひ、浮世の空利の須臾なるを覺らず、之を得ては、白頭を搖かして、空しく見戲を爲し、豆の如く小なる人生の馳場を狂奔して、遂には千丈の谷底に墜落し、忽然として皆無に歸し去る、擾々として暫く奔馳し、兀々として徒らに求むるも竟に萬事休するに至る、嗚呼何ぞ、其悲しきや、

然り而して此不信仰は、人類に對して希望の源泉を涸らし、人間の進歩に對して献身の業を行はしむ可き大動機を殺し、人間の平等及び同胞たることに關する一切の原理を滅し、人間權利の神聖を沒し、而して之を以て空想となす、彼の嘲弄者の笑に恰當する者と謂はざる可らず、吾人嘗て自己の實驗より之に對する情を詠し出せしものを讀む、實に吾人は此く言はさるを得ず、曰く、

吾人の生涯を積雪萬丈の險しき路に逐ひ遣りき、もろびとは疑ひて精神しばみ、何事をするも歎息なり、

"Which to the wilderness drove out
Our life, to Alpine snow
And palsied all our world with doubt,
And all our work with woe."

此の如く考察し來るときは、神の知識は啻に實際上宗教に對し、及び人間の改進、幸福に對する宗教の感化に對して必要なるのみならず、宗教の特性を有せざる有心的の行爲に於て眞善、全、及び福の範圍に存する人間の至上の能事を成遂するに於ても、亦必要にして缺く可らざるとは明白にして疑ふ可らずとす、故に彼ダニエル、ウエブスターが宗教の實際的必要に就て論ぜし所の言は、決して誇大に失する者に非ず、其言に曰く、「宗教は人間の大品性に對して必要缺く可らざる要素なり、宗教なくんば人は生活すると能はず、宗教は人と其創造者とを結び、而して人を其王坐に連ぬる所の紐なり、若し此紐にして全く離れ、全く斷たんか、人は價値なき元子として宇宙の間に漂ひ去り、其固有の引力は全く失せ、其命運は妨げられ、而して其一切の未來は唯だ暗黑と、荒涼と、死とあらんのみ、宗教的本分の念なき人は、是れ聖書中に精確にして而かも恐る可きの語を以て、世の中にありて神なきの人と記せる所の人に外ならず、斯る人は其本性に背き其一切の本分の境を脫し、其一切幸福の範圍を踰へ、而して其世に造られたるの目的より遙に離れ去りたる者なりとす」と、吾人は斯く人間至上の希望の破壞せられ、此く人生の荒涼なるを見て、世に斷腸消魂するの人あるを見て毫も之を怪まざるなり、教授ヘルムホルツ「通俗講談視力の理」中、自己の學術的思辨よりして勢ひ免る可らざるが如き牽强附會なる懷疑主義の愴涼、悲哀を表白せんとして左のゴエテの句を引用せり、

あゝ禍なるかな、あゝ禍なるかな、汝は強き拳をもて、この麗なる世をば壞したり、しばらく舊址として弄ばれ、妖怪は無情も又これを打ちて千々にくだきぬ、われらは散り亂れたる斷片を、さみしき場所に採りあつむれど、復歸すべなき彼の美を見ては、腸もちぎるゝ思なり、

"Woe, woe,
Thou hast destroyed
The beautiful world
With powerful fist;
In ruin't is hurled,
By the blow of a demigod shattered,
The scattered
Fragments into the void we carry,
Deploring
The beauty perished beyond all restoring."

(三)難ずる者曰く、吾人は神を有せずとも、他の宗教的崇拜奉事の目的物によりて、宗教及び其の一切の實際的便益を有することを得べしと、ヂョン、スチユアート、ミル曰く、吾人固より其人數の少なきことを知ると雖も、吾人は敢て考ふ。宗教は神に於ける信仰なくとも能く存在することを得べく、而して神なきの宗教は、基督教徒と雖も、之を熟考沈思して利益を享くべき者なりと、……若し人一個の理想物を有し、之を愛慕するの念及び之に對する義務の情にして、其一切の情操及び偏向を統御、規定するの力を有し、其生活の規律を制定することを得るときは、其人たる一個の宗教を有する者と謂はざるを得ず、……若し此愛慕の情及び此義務の念の目的物にして吾人の同胞人類を結合せる一團體ならしむるも、吾人は正當に此宗教を稱して本性上不正なる宗教と爲すことを得ず」と

予は本書の第一章に於て、宗教的崇拜及び奉事の目的物は神たらざる可らざることと、及びミル氏が神に代へて提出せし目的物、及び近世論述せられたる他の種々の目的物は、眞の意味に於ける宗教の目的物として全く不適當の物たることを論じたり、ミル氏の宗教の定義は實に其例證なりとす、試に思へ、如何なる欲情も、如何なる

願望若しくは肉慾も、能く人の全心を燃し、能く之を掩蔽し又能く他の偏向を統御し、其生活の規律を制定することを得べきにあらずや隨て吾人は之を宗教と稱し、得べきにあらずや、但しミル氏は曰へり、人心を統轄するの欲情は、理想の目的物を有せざる可らずと、然れどもよし然るにもせよ、吾人はシヤーロット、コーデーを稱して宗教的の人たりしと謂はざるを得ざるべく、而して現今に於ては彼のルイ、ミセール及び凡の熱心にして献身的に而かも急躁なる無神的共産黨員、虚無黨員、及び無政府黨員は、皆宗教的なりと謂はざるを得ざる可し、何となれば「彼等の愛慕及び義務の目的物」は一個「理想上」の者なればなり、蓋し斯る代用物を提出するは、是れ宗教の至要、固有の意味を滅殺する者なりとす、

吾人が既に宗教の特性、及び其人に對する實際上の必要、及び其成遂する大目的に付て論ぜし所によりて之を考ふる時は、斯る反對説の全く勢力なき者たると明白にして疑ふ可くもあらず、論者が提出せる所の神に對する代用物は、一として眞正の意味に於て宗教を組成すること能はず、又は人の宗教上の需用に應ずること能はず、將た亦人間の進歩幸福を實現すると云ふ宗教の大目的を果すことを得る者なし、

蓋し神に對する此等種々の代用物を提出せるの人々は、均しく皆之によりて以て宗教の人の本性に發すること、及び其眞正の發達に對して欠く可らざる者なることを保證する者なり、加之彼等は互に相論駁するの點に於て相一致す、故にスペンサー氏はハリソン氏を論駁し、人類崇拜は宗教にあらずして、人の宗教上の需用を滿足せしむること能はず、又は社會に對して有益なる宗教の感化を施す能はざることを確示せり、而してハリソン氏は又スペンサー氏の唱導せる不可知者の宗教に關して、其不完全なる宗教たることを確證せり、(Nineteenth Century, Jan., March, July, Sept. Nov., 1884.) 蓋し兩氏は孰れも神に對する自己の代用物を提出するに當り、他の一切の代用物の不完全なることを宣言し、而して之を論證して頗る正確を極めたり、其狀恰も一種の多神教時代を描き出し、轉た吾人をして希臘の諸神がッロイの諸神と相闘ぎ、丘陵の諸神が谿谷の諸神と相戰ひし往事を追想せしむ、

スペンサー氏は宗教の目的物として不可知者の絶對的實在者なることを認めて曰く、「彼の『人類教』を以て將來の宗教たる可き者と思考する人々の想像するが如

く、目的物を以て彼此相代用するを得べき者となすは、是れ歸納及び演繹の共に許容せざる信仰なりとす、假令如何に人類に對して發揮する道義の念の人心中に盛んなるに至ることあるにもせよ、之が爲め決して、彼の人類及び其他一切の事物の裏面に存在する者によりて醒覺せられ、獨り正當に宗教的と稱せらるべき情操は除去せらる可きものに非ず(The Study of Sociology, p. 311.)と、是れ氏は絶對的實在者を承認する者なり、惜いかな、氏は之を以て知る可らざる者と爲せしが故に、宗教を變じて單純なる不思議の念となし了れり、固より此念は消滅することを能はざる者なり、然れども此念の唯だ宗教意識の一個の表現に過ぎずして、獨り之れに因て宗教を組成し能はざるは、極めて確實なることなりとす、且つ斯る宗教は不道德の宗教なりと謂はざるを得ず、何となれば吾人よし不可知者に就て此極めて僅少なる知識を有するにもせよ、此の不可知者なる者或は吾人に取りて一切の眞、善、全、福なる及び吾人に取りて智慧及び愛たる凡のものに反對せる者たらんも知る可らざるが故に、漫に之に信頼奉事するは正當の所業と云ふを得ざる可ければなり、若し不可知論者にして人間の理性は信頼すかざる者に非ず、不可知者は理性と相反對する者に非ずと謂はんか、然らば是れ最早不可知者にあらずして絶對理性なり、而して是れ即ち神なりとす、スペンサー氏は絶對的實在者を承認す、是れ神の觀念に至要なる者なり、然れども之を稱して不可知者と謂ふは、取も直さず宇宙の究竟基礎の不道理にして道理に非ざることあり得べきことを承認する者なり、然れども神の觀念及び宗教の成立に對して必要なる者は、獨り斯かる觀念に止まらず、絶對實在者は必ず宇宙に活動する所の絶對理性、及び宇宙の究竟基礎として承認せられざる可らざるなり、

之に反してゴルトの人類崇拜教の大祖述家、大辨護者なるハリソン氏は神の合理性を認れども、其絶對的實在者なることを拒みたり、蓋氏の説を察するに、神は全く實在者にあらずして、唯だ智慧と愛、及び人間の一切の不完全及び弱點、其無智、不正を除き去れる、人間の美質と高德とに關する抽象的觀念たるに過ぎず、然れども吾人は吾人の心意を以て構成せる抽象的の觀念を崇拜すること能はざるものなり、吾人は自己の之に屬從することを意識すること能はず、之と交通すること能はず、將た之に信頼し、之に奉事すること能はざるなり、之れが崇拜者は彼のブラウニン

ゲが曰へる如く、竹馬に乘るの小兒が、自己の乘る所の馬を携ふるに異らず、在昔羅馬の人民は道德を以て有心者となし、且つ之れを神となしたり、彼等は誠實、廉直及び其他の道德を女神として崇拜せり、基督敎は此の崇拜を一掃し、而して吾人に啓示するに絕對、普般の理性にして、宇宙の根本の本性たる神の中に素型的に、具躰的に、且つ永遠的に存する一切の智惠及び愛、一切の美及び全、一切の直及び善、又福の一切の理想を以てせり、然るに今や懷疑說は智慧と愛との神を拒み、神性者より分離せるの德義再び崇拜せらる、然れども此れ唯抽象的觀念の元素として崇拜せらるゝに過きず、されど敎授クリフオードは此抽象的觀念を一種の實躰主義に化成し得たるが如し、彼の基督敎徒の「天に在ます我儕の父」に轉用するに「我等の父なる人」を以てしたり、「超人的なる神の幽暗なる外形は徐々に消滅して吾人の視力の外に逸し、而して此神の存在の濃霧四散するに隨て益々明に、一切の神を造り又之を滅すことを得る所の存在者の一層偉大にして一層高尙なる形を見る、歷史の始て其端を發せし時より、及び一切の靈魂の堂奧より、我等の父なる人の顏は永遠青春の活火を其眼中より放つて吾人を臨視し、而して『エホバの在らざりし先より我あるなり』とぞ云ふなり」（"Lectures and Essays, vol, II, p. 243"）London Ed. 1879 果して我等の父なる人として概括せられたる人類にして崇拜せらる可き者とせば、吾人は正當に問はざるを得ず、曰く何の原理によりて崇拜者は某々の資性を撰定、結合して崇拜の目的物となし、而して實際人間の歷史に於て一層普通の特質たりし他の幾多の資性を顧みざるやと、

フオイエルバツハは神を以て單に客觀的の物として考察されたる人間彼れ自身なりと爲せり、彼れの說の結果は左の如き神の定義となりたり、「神は人心に存する希願の萬古不變なる稱讚す可き『なり』に變化したる者なり、感情の全能力なり、自己自身に聞く所の祈禱なり、自己自身に視る所の靈魂なり、吾人自己の痛苦の叫び の反響なり、……精神の自由なる空氣なり、靈魂の鬱屈せる悲哀なり、神は人生悲慘の狀を見て至深至奧なる人の心裡に流れたる愛の涙なり、」斯る神の宗敎的信頼奉事の目的物たること能はず、將た宗敎の實際的需用に應ずること能はざるは固より言ふ迄もなし、

ルゲは人類敎に關する他の思想を表白して曰く、「宗敎を以て人類崇拜となせば、正

義の念即ち吾人に命じて至高至聖の理法に隨ひて生活、動作せしむる所の眞理の確信を云ふ、宗教とは義と善、及び地上に之を實現することに對する熱心と聳動にして、隨て自由と權利とに對する高尚の欲情なりとす、何となれば自覺力を有するの人は自覺力あるが爲に既に自由なり、彼は自己の上に君主あるを認めず、隨て一切外部の勢力より制せらる可からず、即ち啻に絶對の宗教及び教會の權力に制せらる可からざるのみならず、若し國家にして主僕の關係、治者と被治者との關係に基ける時は、現在存立せる國家の權威にも制せらる可らざればなり、(Das Wesen und die innere Wahrheit des Christenthums, von Dr. Wilhelm Meyer, pp. 124, 125, 108, 169.) 此說たる宗教の至要觀念を除き去れる者にして、宗教と道德とを混同し、宗教を變して、彼の革命主義及び無政府主義と成果つ可き人間の自由に對する急躁の熱情と爲し了りし者なりとす、

之と均しく若し宗教と道德とを混同し、若くは之を學術に對する熱心と混同し、又若し宇宙を以て宗教的崇敬の目的物と爲すときは、其崇拜する宗教に飽く可らざる者を欠き、毫も宗教に對する人の需用を滿足し、且つ其目的を達する能はざるなり、彼等は實に皆人間及ひ絶對者の間に移渡す可らざる溝渠の存することを自定する者なり、よし彼等にしてスツラウスと共に乾燥無味なる唯物說に陷らずとするも、神に對する彼等の代用物は不可知者に非ずんば虛妄なり、故に彼等はフォイエルバッハと共に「吾人は大なる否定を崇拜す」と告白せざるを得ざるなり、

固より神に對する斯る薄弱なる代用物を信受し若くは斯る人爲的の宗教に安んずる者の多からざる可きは、吾人の豫期する所なり、此等の者たる、一歩を讓て言ふも、世人の無神に陷るを防ぐ可き一時の機械たるに過きず、故に其結果は必ず有神說に復歸するか否らざれば全く宗教を放棄し、而して之に代ふるに人智修練を以てするに至る可し、然れども斯る修練も到底不足にして皮想たるを免れず、

吾人は已に義務に代ふるに美を以てする希臘風の修練を唱導し、實際上の利害得失に關係なき眞理の愛を以て人に對するの愛に代へ、智力上の活動を以て宗教上の信仰に代へんと主張し、又勵精、努力、克己、獻身、及び不義と相戰ふの生涯に代ふるに、優々たる安樂の生涯、及び自然の衝動に隨て悅ぶの生涯を以てせんとするの風世に行はるゝことを見る、シルレル其作「希臘の群神」に於て舊事の神話去つて復た

世に無きを悲み、歌ふて曰く、

"Cold from the North has gone
Over the flowers the blast that killed the May;
And to enrich the worship of the One,
A universe of gods must pass away."

無情の寒氣は、北の空より吹き降りて、咲きにほひたる花を撲ち、和暖き陽春を殺しけり、ひとりを深くおがまんため、千萬の神々は、消へて跡なくならんとは、かへす〳〵も憾なれ、

然りと雖も有神説は人智修練に反對する者に非ずして、却て之を深ふし、之を富ます者なりとす、假令山川、草木、及び海洋、星辰にして其諸神を失ふとも、然れども天地は毫も其寂寞たるを加へず、何となれば神は宇宙に充滿ればなり、人は宇宙に對して中心たり、宇宙は上下四方より人の耳目及び其他の覺官を通して人の上に活動す、彼の日月、星辰及び漫々たる蒼天の奥に懸れる星雲は、其光を人の上に注射し、彼の電氣、引力、及び一切萬有の勢力は彼れの上に活動し、人は宇宙の中心となり、而して宇宙一切の勢力は彼れに集合し來る、人は又之に依りて自己の理性に存する所の者と全一なる原理によりて宇宙を貫徹支配する普般理性の自己を圍繞し、自己の上に集合し來るを見る、此を以て人は神は宇宙に充滿し神の愛と智惠とを以て貫徹せらるゝことを發見す、何れの所にありて、人は其密室に入り、其戸を閉づるとも、自己の神と共にありて、神と相交通することを發見す、希臘の群神は再び歸り來らざるべく、而して當時諸神によりて發達せし修練は復た中興することなかるべし、然れとも宇宙は吾人に對して、古代希臘人の夢想だもせざりし高大と榮光とを啓示す、而して獨一の神を知るによりて人智の修練の其深遠豐富を致すことは決して多神教の及ぶ所にあらず、之に反して、更に宗教を有せずして發達し、及び無神説の毒氣の下に成長せし修練は、啻に宗教に代用すべき資格を有せざるのみならず、之を修練として見るも、尚且つ乾燥無味ならざるを得ず、

第五、人間歴史の進路に於て啓示せられたる神――苟も歴史の中に神が自己を啓示せるの證據を充分に論述せんと欲せば、人間の全歴史を研究せざる可らず、予は唯た此證據を論明す可き二三の方法を指示せんと欲す

(一)神の存在は人の宗教的歴史中に啓示せらる、而して吾人は宗教の起原、其普及なること、其自然なること、其勢力及び永存、及び其進歩的發達を解釋せざる可らず、吾人が已に論示せし如く、神を信ずる信仰普及にして自然に、強大にして永存なるは、是れ此の信仰及び之に伴ふ宗教心の人性に基けることを證明する者にして、又若し神にして存在せず、而して宗教にして妄想なりとせば、是れ人の本性に虚偽の存在する者にして、人の心意力は信頼するに足らず、隨て一切の智識成立することと能はざるを證明する者なりとす、昔は嘗て難じて論ずる者あり、宗教は僧侶が人民を制御せんとして發明せし者なりと、此論たる今日尚ほ無智妄信の不信者の唱ふる所なり、吾人は之に問はざるを得ず、先づ如何にして僧侶なる者世に存するに至りしや、如何にして人は神を信ずるに至りしや、又如何にして宗教及び道徳に對する能力を有し、而して宗教道徳によりて統御せらるゝことを得るに至りたるやと、よし之を言はずとするも、宗教及び道徳の如き人間に於る普般、不斷にして強大なる勢力の發明工夫に出でし者ならざるとは明白にして火を睹るが如し、此等のものたる人の心性に根ざし、其理性の根本原理の自然に發生し、其理性に存せる至高の情操、至深の需用の正則に成長せし者なりとす、此等の者たる、神の存在し、而して自己を人に啓示することを想定して、こそ始て解釋せられ得べきものなり、

然りと雖も此の證據たる神を信ずる信仰の起原、普及及び不斷に基けるのみならずして、宇宙に關する人の知識の進歩と相馳驅して、神の知識の漸次に發達進歩することも其基礎たらずんばあらざるなり、

論者動もすれば難じて曰ふ、大古蠻人は事々物々を以て自己の如き靈の行爲と爲せしが、一たび萬有の原因及び秩序を發見するや、復た驚異の念を發することなく、其の中に靈を認めざるに至れり、故に人が神を見るは唯だ非常驚く可きの出來事に會する時に過ぎずと、然れども是れ事實に合せざるの論なり、異教の諸神には日の神、暦の神等、一定の進路を守る萬有力の神にして、萬有の非常激烈なる勢力のみによりて知られたる神にあらず、彼のスペンサー氏の言説に異なり、氏曰く、「奇異非常の事物説明せられ、之によりて惹起せられたる驚異の念の消滅するや、萬有の一定不變なることを見て驚異するの念之に襲で起り、而して如何にして斯く一定不變なるに至りしやとの疑問を發するに至る、學術の愈〻益〻不規則なる事物を説

明して規則ある事物となすや、一たび此等の事物の迷信的説明に附着せし秘義は、轉して其學術的説明に附着するの秘義となり、幾多の特別なる秘義は一個の普通なる秘義の中に輻湊し了れり、(Study of Sociology, chap. xii, p. 310.)と、然り而して吾人が已に知れる所を見て驚異するの情は適かに其未だ知らざる所を見て驚異するの情の大なるに及ばざるなり、

若し知識、文明及び心意的發達に於て進歩をなすときは、人類の幼稚時代の遺片として神の觀念を遂に遺棄するが如きとありとせば、論者の言或は幾分の勢力を有す可し、然れども人間なる者は如何に進歩すればとて決して此觀念を棄却することなく、却て之を維持發達す、人は此觀念の其增加する知識と相和合し、其知識の眞實、統一の基礎となることを發見し、神が其中に自己を啓示する所の宇宙より發見せる一切の知識は皆此觀念を中心とせることを覺る、人智の進歩して一個の條理ある宇宙の觀念に達するや、此に至つて一切の秩序、理法、及び完美を備へたる宇宙其物をば、宇宙の中に自己の思想を表發するところの一個の完全にして事物を生起する心意に歸するの必要を生ず、而して多神説は此に面縛して唯神教の軍門に

降らざるを得ず、

近世一著者ありて論ずらく、「若し一切の宗教にして社會に於ても人類の需要及び本性より發生する者とせば、此等の宗教は一として客觀的の眞理を有する者に非ず」と、彼れ尚附言して曰く、「而して何等の撿討を以て、此等宗教の中何れが眞正なる者なるやを決定せんとするも、是れ到底徒勞に屬す、何となれば一切の宗教は皆其信徒の需要に應ずる者なるが故に、其悉く眞正なるは明白にして疑ふ可からざればなり」と、要言すれば、何れの宗教の神も客觀的に實在する者に非ずと謂ふなり、吾人は之に對して左の如く答辯せば充分なる可し、曰く此論理たる一切の知識の客觀的に眞實なることを拒むに至らざるを得ず、何となれば、是れ人の合理的本性の信憑力を疑ふ者なればなり、且や吾人は附言せざる可らざる者あり、此の推論たる、各種の宗教上の信仰は本精上互に相反對衝突して、毫も共通の要素を有せずとの自定に基ける者なれども、實際の事實に據るときは、一切の宗教は共通の要素を有し、而して如何に人間の進歩するにもせよ、此要素は保存せられ、愈明白充分に發達すればなり、最も高尚なる有神説は野卑なる宗教及び不完全なる神の概念中に存

せし眞理の一切の要素を採用する者なりとす、

該記者は基督教を以て唯だ鄙教の「上塗り」(A. R. Grote, The New Infidelity, pp. 45, 46, 25.)せし者となし、他の記者は之を以て唯だ日輪崇拜の遺物となし、而して他の記者は又「東方の博士等」は佛教僧侶の漫遊家にして、佛教の原素を基督教に注入せりと論ず、是れ論者等は基督教が他の不完全なる宗教の一切の眞理を保有するの事實を擧げ、之を以て其眞正の宗教にあらざることを證明し、其神の客觀的に實在する者に非ることを確定す可しとなす者なり、然れども吾人は之と正反對の推測を爲さゝる可らず、即ち人は大初よりして多少神に關する眞正の觀念を有し、其一切の進歩を通して之を保存し、其觀念を一層完全に發達せしめたる者なりと思考せざるを得ず、若し論者の言の如くんば、人心の進歩に隨て、錬金術及び占星學を棄却して化學及び天文學を採用するに至りたるが故に、又今日已に彼の水を以て萬物の起原となす、ステールスの説若しくは「プロジストン」を信ずる者なきが故に、形而下學は廢絶せりと論ぜざるを得ざる可し、若し吾人にして此く論ずるを得るとせば、此に至つて始めて、吾人は今日已に拜物教及び多神教の神話を信ぜざるが故に、有神説は廢滅したりと謂ふを得可し、蒙昧無智の人間が超物者に就て形つくる概念は不當なることあるべし、彼等は實際存在せざる怪物を信じ、又虚妄なる神話を信ずることあるべし、彼等は神の表現及び無形世界の啓示を誤解することもあるべし、然れども此れ決して超物者及ひ神を信ずるの信仰を證破する者に非ず、試に思へ、人の覺官上の印象は人をして月は餅よりも大なる者にあらずと信ぜしめ、星辰は單に煌々たる燈火なりと信ぜしめしに非ずや、人の靈性上の感性に於ける印象が、之をして怪物を信ぜしめし所以の者其理毫も之と異なることなし、斯る覺官の誤謬が形而下學の信憑力を破壞せざる如く、靈性上の印象を解釋するに當りて陷れるの誤謬は、決して有神説の信憑力を損す可き者にあらず、

斯の如く論じ來るときは吾人は勢ひ左の結論に到達せざるを得ず、即ち神の實際の存在を承認するに非んば、宗教及び神を信ずる信仰の起原、普及、自然、永存及び勢力を解釋し、且つ人の知識教化の進歩と相馳逐して神の觀念の進歩發達するを説明すると能はずと、即ち是なり、蓋し神は自己を人に啓示せし者たらざる可らず、然らずんば神に於ける信仰の發生し、永存し、自然にして普般に、且つ強大なる能はざ

ることと、尙ほ大陽にして自己を人に啓示せずんば、世に大陽を信ずるの信仰普般なることと能はざる可きが如し、

宗教及び神の觀念の進歩的發達に關する以上の意見に反對して、コムトの思想進歩の法なる說あり、蓋し此法たる、人の知識を以て三種の理論的狀態に於て存在せざるべからずとなすものなり、所謂三種の狀態とは、神學的若くは小說的なる者、形而上的なる者、及び實驗的なる者にして、此第三者は最終にして至高なる知識なりとす、其說を考ふるに大約次の如し、一個人たると全人類たるとを問はず、人の知識は其成熟せる實驗知識に達せんが爲め、神學的及び形而上的段階を通過せざる可らず、神學的段階に於て、人の思想は又三小段階を經過せざる可らず、人は先つ拜物主義に其端を發し、一切の物形的現象を以て自己の有するが如き心意若くは靈の表現と思考し、隨て何物と雖も神の居所若くは殿堂たるを得べしと思惟す、第二段階を多神主義と爲す、超物者は此に至て其數を減し、而して重要なる萬有勢力のみ一個の神によりて支配せらる、其次を一神主義と爲す、形而上的狀態にありては人、現象を以て實體、本體、及ひ原因の致す所と思惟す、若し夫れ形而上主義の最終の段

階に至つては、人は始め提出せられたる無數の實體に代ふるに萬有なる一大實體を以てするなり、蓋し神學的は人智の幼稚なる狀態にして、其必然なる起點なり、實驗的は其確定せる終極の狀態にして、形而上的は移渡の狀態なりとす、コムトは實驗說の代表者として、超物的實在者、本躰、原因、勢力、元子、分子及び精氣を承認するを以て非學術的となして、之を却けたり、彼はニュートンが「引力なる不運の語」を使用せしことを悲めり、彼は實驗說を以て人間の思想及び信仰を全く統御す可き者となし、而して其形而上學及び神學と深く相衝突する者たるを考へ、此二者を破壞して始めて其充分に實行せらる可きことを信ぜり、

吾人歴史を熟察するに、到る所之に反對するの事實を發見す、是れ實に右に揭けたる進歩の法を論破して遺憾なき者なりとす、彼のコムト自身すら、已に之が一個の大困難たることを承認せり、(Cours de Philosophie Positive, tome ii, p. 234; tome iv p. 709 and leçons 51; tome v leçons 52-55.)

今日吾人の有する人類學上の知識を以てするときは、決して原始人の宗教が拜物教たりしことを信ず可き充分の理由あらざるなり、之に反して「拜物教が宗教の發

達に於て第二段階たるの形狀を有し、之に先つて一個の舊段階の存在し、此段階にありて凡の物神(フィチシュ)が共有する神性の如き名稱及び概念の形つくられたるものなるとは、是れ歴史上の證據によりて證明せられたる事實なり、「何れの所を問はず、久しく且つ親密に交際して其宗教上の情操を確知するを得べき機會のありたる所には、最も下等の蠻族と雖も一として單に所謂物神を崇拜するの外、自から其の者を崇拜せざるものなきことを發見せり」、「拜物教者と稱せらるゝ所の種族にして或は諸の神を信じ、或は世界の創造主なる一個の無上なる善神を信じ、且つ其方言の中此一個の神に對する特別の名稱を有することは、其證據實に多しとなす」、「亞非利加に於ては、物神を信ずる種族にして、此と同時に神に關する頗る純潔にして高尚に、且つ甚だ眞正なる情操を抱く者少なからず、……拜物教の現證として擧示せられたる種族も、吾人が彼のホーマー及びヘシチッドの書中にすら發見すると能はざるが如き質樸にして、且つ時に高大なる宗教上の觀念を有せり(Max Müller, The Savage, Nineteenth Cent., Jan. 1885, p. 125; Origin and Growth of Religion, pp. 101, 106, 102, 116)

ヴァイツ曰く、「近世數多の有名なる學者のなせしところの深遠の探究に因るときは、多少開化せる他の國民の感化を受けたる形跡なき數個の黑人種族にして、其宗教的觀念の組成に對しては、殆んど一切の他の未開種族に比して遙かに進歩せりとの驚く可き結果を見るに至る、若し吾人此等の種族を稱して一神教者と稱するを欲せずとするも、彼等は一神教の境界に頗る密切に接近せり、但し其宗教たる、甚だ多く、卑陋の迷信を其中に混入す(Authropolegie, vol. ii. pp. 167-171)」、「チーレ亞非和加土人の宗教に就て述て曰く、「其顯著なる特質は其無邊の拜物主義なりとす、……吾人は其有神的の傾向を有することを拒む能はず、殆んど一切の種屬は皆或る無上の神を信ず、但し何れも之を崇拜することなし(Ency, Brit., Religions, vol, xx. p. 362)」、「ラェ氏はシュルツが「拜物教を以て宗教の摸表と爲す」説を代表する殆ど唯一の人」(Recent Speculations on Primitive Religions, Contemporary Review, Oct. 1880)なることを云へり、

且つコムトの理法の中に承認されたる三個の大段階は、其理法の要求するが如く相繼承して顯はるゝことなく、却て同時に共存す、而して其然る所以を見るに、啻に彼のシャテーが云ふ如く、各種の個人及び人民が各種の速力を以て此三段階を通

過するによるのみならずして、同一の個人及ひ人民に於ても其然るを見る、(Theory of Morals, p. 475, Nans) 彼の倍根公は此三種を著しく具へたるの人なり、又彼のケプラー、ニウトン及び其他の人々の心中には、神學思想は深遠なる宗教上の精神及び偉大なる物質學の觀念相隣比して存在せり、彼の燦然たる希臘の形而上學は多神教の最も盛なるの時に昌へ、亞刺比亞國の文華時代は最も活潑なる一神主義と共存し、技術の中興は神學思想の大振起を來し、近世の學術はコムトの豫言せし如く實驗說と成り果てずして、却て之を放棄し、而して學術は非常に形而上的となり、重に勢力に分子、精氣、及び他の形而上の觀念を講究することを務となすに至れり、蓋し是れコムトが非學術的として力を極めて反對せし所の者なり、加之形而下學の大功偉績を奏せしと共に、哲學思想も又廣く活潑の勢を呈し、而して宗教上の主題に關して今日ほど多く考察せられ、今日ほど熱心に講究せられたるとなきに至れり、」コムトは又自己の理法の亞細亞の人民に對して眞正ならざることを承認し、而して魯西亞及び亞米利加に至つては全く之を看過せり、且つ此法たる、人類の歴史によりて確定せられざると均しく、小兒の發達によりても證明せられざるものなり、

幼年少時に於て全く神の思想を有せさりし者にして、壯齢に及び、切深なる宗教心を有するに至ることあるは、其例枚擧に遑あらずと爲す、

コムトの想像する所によれば、ヅールゴーは彼れの理法と本質上同一なる思想進歩の理論を說述せる者なり、(Flint's Phil. of History in France and Germany, p. 113) 是即ち歴史に於ける大時期の意義を一括して表示せんとする幾多の計畫の一に過ぎず、日耳曼の唯心論者等は歴史の理論は先つ人の心中に形つくられ、而して單に歴史の事實を擧げて之を例證す可き者なりとの原理に基て、其探究を爲せり、「フイフテの說に從へば、歴史は唯だ本能、權威、反省、學術及ひ哲學の五大時期を通して、道理の幼齡より壯時に移る絶對的本我の傳紀に外ならず、シエリングの說に從へば、歴史は宿命、萬有法及び掘理の三時期を通して人間の中に啓示せられたる絶對心意の自己進化なりとす、彼の歴史と萬有とを變化して單純なる論理となし了りしヘーゲルの說に隨ふときは、歴史は絶對理性が人間の中に發達する者、諸國民の論理、及び夫の支那に始り、印度、埃及、希臘を通して繼續し、而して日耳曼に於て技術、宗教、哲學の完全なる勝利として其果を結べる、歴代文明の大議論なりとす、クーザンは一切

の歴史中に文明の形像として無限、有限及び此兩者間の關係なる三個の觀念及び時期を發見し、此三者を支配する所の氣候として亞細亞的、地中海的、及び歐羅巴的の三者を擧げたり、(Prof. Shields, The Final Philosophy, p. 213) 吾人若し斯る理論を確定するの目的を以て歴史を研究するときは、其結果たる決して信頼するに足らず、何んとなれば是れ歴史をして理論に契合せしめ、理論をして歴史に契合せしめさるものなればなり、斯る理論は奇警の思辨として一時世人の喝采を博すること或は之あらん、然れとも直に廢滅して復た人の之を問ふなきに至るべし、彼のコムトの理論の如き、數年の間世人の議論を喚起せること少なからざりしが、今や已に其同臭味の陳説と共に湮滅して復た聞ゆるなきに至らんとす、

吾人は已に前著に於て、如何なる主題に於ける知識も、實驗的合理的及び神學的思想なる三段階を通過して始めて完全の域に達するものなることを見たり、(Phil. Basis of Theism, pp. 293-344) 蓋し思想の眞正の進路は、コムトの法によりて表示せられたる進路の反對なりとす、何んとなれば思想は神學的知識に究極し、實驗的知識に起程すればなり、且つ思想の眞正なる進路とコムトの法と異なる所は、人心なるものは順次に三段階を通過して久しく一段階に滯留するものに非ずして、其の如何なるものを探究するにもせよ、常に其事物に關する知識を完成せんが爲に思想の三段階を通過することにありとす、此を以て吾人は此三種の思想を、彼は一時の思想、此は永遠の思想と區別することを爲さず、蓋し人の知識は絶えず此三者を相連結統一して永へに之を使用すればなり、且つ人が常に同時に萬有、人間及び神なる三種の知識界に關係せることは、是れ事實なりとす、然り而して世々代々知識進歩の各段階にありて實驗的、合理的、及び神學的なる三知識の同時に發達し、而して各種の知識の中に萬有、人間及び神の三者が同時に發見せらるゝは、是れ歴史上の事實なり、コムトは迷信と神學とを混同し、神學に嫁するに、唯だ上古一般の無智文盲より出づる所の誤謬を以てせり、彼は神學と無識とを同一視し、一時代の一切の無識を其神學に移して之を貶す、彼は無識より知識に進歩するとを以て、神學より學術に進歩することとなせり、然れども是れ不通の論なり、蓋し人古代に在ては何事にも無識なりしなり、若し其神學にして小見らしきとせば、之と均しく其哲學、其實驗學も小見らしくありしなり、神に關する思想は頗る無識と不完全とを

表發せり、然れども其人間及び萬有に關する思想も、均しく又此の如くなりしなり、其凡の物に於て無識より知識に進歩せるは彼此同一なりしなり、故に學術の進歩は神に於けるの信仰を除去することなく、將た神を以て一切の現象を究竟的に說明するの必要を排斥することもなし、學術の進歩、神の觀念及び神の宇宙に對する關係の觀念をして一層合理ならしむるも、決して其眞正なることと其必要なることとを滅殺するものにあらざるなり、

(二)苟くも無神說の行はれたる所には、社會の利益之が爲に痛く妨害せられたり、是れ歴史の吾人に示す所なりとす、

何れの國民若くは社會を問はず、公然明言せられたる無神說の一般に行はるゝが如きことは、稀有のことにして且つ永く繼續せざることなりとす、例へば佛國第一革命の時に當り、無神說の支配は暫時にして、恐くは極めて少部分の人民の信仰を制せし者なるが如し、

且つ無神說の行はれし所には、甚しき災害を其社會に遺せり、佛國に於て無神說の支配は歴史上恐怖の支配として知らるゝ所なり、羅馬帝國に於て古代宗敎の朽腐し、之と共に漸く懷疑無神の風人心に侵入するに至るや、一般人民の德義は茲に敗壞し、而して其社會は衰弱瓦解するに至れり、

之が反面として、無政府黨員の理論及び其革命的計畫は、神に於ける一切の信仰を棄却することを要求す、今日政府を破壞し、社會を打破して無政府境となさんと欲する虛無黨員及び諸種の革命者は、萬口一談、神に於ける一切の信仰を顚覆することを以て焦眉の急となさゞる者なし、

己上の場合に於て無神說が人心腐敗、及び急激暴戾なる無政府主義の原因たるも將た結果たるも、右の議論は同一の効力を有する者なりとす、若し原因たらば、以上の弊害に對して責任を負はざる可らず、若し結果なりとせんか、有神說は腐敗、暴戾及び無政府主義に對する塀牆なりと云べく、而して此等の者にして若し世に行れんと欲せば、必ず先づ之を破壞せざる可らず、

(三)歴史より提出すべき第三の議論は、宗敎上の信仰が文明の進歩に及ぼす影響を指摘するにありとす、蓋し此證據を論明せんと欲せば人類の全歴史を講究せざる可からざるが故に、其範圍餘りに廣大にして今此に之を論するを得ず、然れども余

が此點に關して講究せし所によれば、余は宗教上の信仰が人間及び文明の進歩に對して至要の要素たりしこと、此進歩の決して無神説によりて成遂せられざること、宗教的信仰の管に進歩に必要なるのみならずして、法律の至上權に對し、社會の安固、秩序、智慧、及び德義に對して至要なること、隨て此信仰の、已に到達せる結果を保存し、腐敗、擾亂及び暴戾に沈淪することを防ぎ、且つ殘忍刻虐に退歩するを制するに至要なる者なることを確信せさるを得ず、蓋し殘忍刻虐の精神と專横とを以て文明の利器を使用するときは、其世道人心を害するの悲慘なる殆んど言ふに忍びざる者あらんとす、

今世文明の顯著なる一特性は工藝上の大運動なりとす、蓋し此運動は工藝的業務の位地を高めて公共事業となし、國民の福祉を左右し、而して古來政事及び戰爭に使用せられたる才能及び大望を伸張するの餘地を供給するものなり、然り而して基督教が此變化を致すに於て最も强大なる作因の一たりしことは之を示すことは頗る容易のことなりとす、

過去四百年の間政事上に於ける大紛爭は、專制主義を顚覆して人民を自治の境に

達せしめんと欲することにてありき、然り而して此運動の基礎たる大原理を問へば、曰く人間の價値を有することなり、曰く人間として其心性中に固有せる權利の眞正なることなり、曰く人は法律の前には平等なり、曰く政府は被治者の利益の爲に存在す、等のことなりとす、而るに此等の原理をして文明的勢力となししめし者は、實に基督其人なりとす、キリストは人の世界よりも一層貴とぶ可き者なることを教へたり、彼は神が己によりて人を罪惡より免れ、而して之を神に歸順せしめんとして爲す所の一切のことによりて、以て神の人を貴重することを啓示せり、彼は萬人神の前にありて平等なることを宣言し、何人と雖も自己の信仰によりて義とせられ、教職の媒介若くは人間の仲保を要せず、して、自由に神と交ることを得べきことを説きたり、而して神の父たることを教へて、彼れは人類の同胞たることに對する眞實不拔の基礎を與へたり、蓋し萬人を支配する斯る神の外は、其の何物たるを問はず、決して政治上の平等及人間の自由に對して基礎たること能はざるなり、

夫のベーコンによりて學術の中興せるに先たちて、ルーテルによれる宗教の復興

は已に起りたり、而して此宗教中興の何如なるものなるかは、思想上の權制の羈絆を脱して、人々自家獨創の探究を爲すことにてありき、教會の權制を脱すると均しく、アリストートルの論理學の權制より脱出することにてありき、一個人の判斷の權利を唱述することとなりき、抽象及言語に拘泥するを止めて、具体の講究に從事することとなりき、而して思辨的の探究を後にして人の實際上の必要利便を先にすることにてありき、蓋し是れ實にベーコン公の運動の原理たるが、公が之を學術に適用せるの前業に已にルーテルは之を神學に適用したるなり、然り而して宗教改革に於て人心を醒起し、思考を活潑にしたるものは宗教と神學にして、是れぞ即ち後世形而下學に於て彼が如き大勳偉功を奏したるものにてあるなり、

此の如く凡の人間の進歩に於て、靈的元素は常に物形的元素に先たち、以て其發明、發見の進歩を催したりき、(Phil. Basis of Theism, 330—333)

且つ吾人が今日進歩と云ふことを公理の如く確信し、時に或は失望落膽すへき事に逢ふにも關らず斷乎として此信仰を動かさゞる所以のものは、其功を宗教に歸せさるを得ず、何となれは吾人の思想中に未來は過去に優るべしとの期望を賦植せしものは、是れ幾世幾代吾人に與へられたるユダヤ教及基督教の預言、約束によるものなれはなり、加之神に關する觀念の愈々高尚にして愈眞正なるほど、人間の進歩は愈々急速にして愈々純眞なりき、此を以て進歩的の國民の基督教國民に限れることは、是れ幾世紀の間已に歴史の證明するところなりとす、然り而して今日東洋國民の間に進歩の端を開きつゝあるものを見るに、一として基督教國により て刺撃、嚮導せられたるによらざるはなし、

(四)吾人若し神を認めず、且つ道義的及靈性的系統の中に在りて人が神と相關係して存在することを認めずんば、滿足なる人間歴史の哲學を組織すると能はず、

吾人、人間の歴史を探究するに、人の愈々高尚、幸福の境に進歩することを發見し、益々明瞭に義と、平和と、博愛との着々世に實行せらるゝあるを知る且歴史を貫徹する一個の意匠の存するありて、人が其包圍の勢力の下にありて動作する作用により、漸次に實現せらるゝあるを見る、然れども此意匠たる、決して人の案出せしものにあらず、將た多人數相協議して構成せしものにもあらざるの明白なること、猶ほ夫の珊瑚が相商議して一の意匠を案出し、之によりて珊瑚島を造りしにあらざるが

如し、世の歴史哲學を論ずるもの、人間未達の最上進歩を世に來さんが爲め、互に協心戮力して歴史上に行動を爲せる種々の作因を擧げて、以て其の原因と爲したり、或は希臘の文明及教化の効用を説き、羅馬を説き、又ユダヤを喋々す、或は大戰亘役、學術上の發見、工藝上の發明を擧げ、シヤーレマン及ナポーレオンの功績を述べ、基督教の現出に對する準備、及び羅馬の戰捷と希臘の哲學とが基督教の弘布に對して與へたる設備とを論じ、之を以て文明及進歩を進捗するに至大至剛の勢力を有せるものと爲したりき、然りと雖も此等の作因が互に相商議し、又は實際人間が爲し來り、而して此等の作因が其要素を成すところの彼の進歩に對して、一個預定の意匠を有し、之を成遂せんとの期望を以て彼が如き作用を爲し來りしものにあらざることほど、世に明白なることはあらじ、故に吾人は必ず推度せざるを得ず、人間の歴史中には、人間に歸し得べからずして、人間の進歩を管理指導するところの或る優等、萬統の智慧に歸せざるべからざる理想的意匠の漸次進んで實現せらるゝものありと、

且つ夫れ人間歴史の哲學といふ思想は、是れ取も直さず其中に幾世幾代作用を爲せる一個の意匠の統一と意義とを含蓄するものなり、人間歴史の進路が此く一個の哲學として曉得せられ得るといふ事實は、是れ豈に歴史は哲學的なりとの意を含むものにして、歴史の中には一個の哲學ありとの意を表し、隨て人の發達に於て着々一大理想を實現するところの或る管理指導の心意の其上に位するありとの意を暗示するものにあらずして何ぞや、

之に反して若し神なくして歴史哲學を構成せんと欲するも、到底徒勞に屬せざるを得ざるべく、歴史上の事實を一括して哲學系を組成すると能はざるべし、加之人類の全歴史は茲に全く貴重すべきの意味若くは目的を喪失し去らざるを得ず、

聖書を讀むに、神は地上に神の國若くは統治を建設しつゝあることを教ふるを見る、此神の國とは即ち義と、平和と、愛の國なりとす、吾人此の如く神を思想し、此の如く人は道義的及靈性的系統の中に神の律法の下に存すと思考し、人の罪、及び人の革新、發達、幸福に對して神が人の中に及び人と共に其救贖的の作用を行ふことを信じ、且つ人間社會の漸次に變じて神の王國と爲ることを思念してこそ、初めて能く歴史の貴重すべき所以及意匠を具ふることを發見すべきのみ、

思ふに萬人悉く遂に獨一無二の活ける眞神を崇拜すると、人類共同の父なる神の子女の如くなるの時至り、互に義と、平和と、愛とを以て相親昵して生活するの期に及ばゝ、人間の歴史は必ず神の存在及統治を證明するなるべし、且つ既に今日迄の人の進歩及其發達の進路も、神を認め、且つ道義系の中に在りて人と神と相關係することを是認するにあらずんば、決して滿足に之を說明することを得さるなり、然れども此證據たる、今之を論明せんには深遠廣大に過ぐるものなり、予は唯だ證據の一方法として之を論ぜしまでのことなり、人若し之を探究せば、其得るところ蓋し其勞に酬ひて餘りあらん、

第六、人化說――論者曰く、神の觀念は畢竟人化的なるに過ぎず、是れ唯だ人が自己の心意の屬性よりして創作する小說なるのみと、例へはフォイヘルバッハは曰く、「宗敎の奧儀を云へば其本性を自己の外に放射して客觀者と爲し、而る後此く自己を投外して生じたる自己の影像を變じて一個の主觀者と爲し、之に對て自己を客觀の地位に置く、此に於て人は神に對して一個の客觀者となるなり、故に人の善惡は神に對して關係なしとは謂ひ難し」(Wesen des Christenthums, chap. i §2)と、是れ人識らず知らず自己の外に自己の屬性を延展して、自己の神を創造し、而して之を自己外の實在者なりと妄信して、以て之を崇拜すと謂ふものなり、隨て人の信ずる神は彼の「唯だ自己の影を大にしたるまでのものに過ぎず」、ハーバート、スペンサーは又難して曰く、試に時計の響及其他の運動が一種の意識を構成し、而して此かる意識を有せる時計が、時計師の作用は自己の作用の如く、發條及搖車によりて左右せらるゝものなりと思惟せりと假定せよ、豈に愚蒙極まる話にあらずや、然れども是れ實に世の宗敎者流が熱心に主張する說を切證して遺憾なきものにてあるなり、且つ試に時計が啻に自己の存在の原因を此かる機械的命辭にて思考するのみならずして、苟くも時計たるものは敬崇の念を懷きて必ず原因に就てかく思考せざるべからずと主張し、果ては遂に此く思考することを危む時計を指して無神時計なりと稱し、以て之を叱責するありと假定せよ、是れ實に神學者輩が其議論を一歩進めたるときの預斷を例示して痛切なるものたらずんばあらざるなり、(First Principles, pp. 111)と、此と同一の反對說は種々の形狀にて現はれ出てたり、ハックスレー氏は時計的の響聲を發する鳴蟲と謂ひ、又自己の音樂を聽くの「ピヤノ」なりとも謂へり、ヒ

ユームは造物主を以て一大無限の蜘蛛と思ひ、其臓腑よりして世界を、紡き出せりと考ふるの蜘蛛的世界を説きたり、夫の往古希臘哲學に在りても、ゼノファチースは此と同一意の人化説を唱導せり、彼は各種の人民が各々自己の如き神を描出することを述べ、スレース人は秀美赤髪の者として神を描き、エチオピヤ人は之を黒色、低鼻の者と爲したりと謂へり、且つ彼は云ふ、故に若し獅子、牛馬にして繪畫の術を有すとせば、必らず各々自家に類する神を描き出すべしと、因て難して曰く、人は「死すべき人の言語を以て死すべからざる群神を説きて自ら欺くのみ」と、或は又難して言ふものあり、曰く、是れ唯た「浮雲の中に自己の容貌を發見し、月界に自己の顔を認め、無生物の中にすら吾人の欲情、情操を發見せんと欲する吾人の傾向」の一例に外ならずと、

吾人は今之に對して答辯せんと欲するに方り、先つ論者が完全なる有心性の固有特別なる屬性及品性と、有心性に取りて非要素的なる元素とを混同するを尤めざるを得ず、抑も神學者は彼の神に附するに手腕、耳目、憤怒、悔改を以てし、又は人間の機關及び欲情を以てする修辭學的若くは詩學的の言語と、彼の完全なる有心性に取りて要素的なる智慧及愛を以て自由に活動する絶對理性として神を認識する哲學的の思想とを、常に區別するものなり、論者の説たる、全く此區別を看過せるものたらずんばあらず、論者の説を究むるに、假令ひ時計にして理性を賦與せらるゝも、尚ほ依然として舊の如く無情なる一個の機械に過きざるべしと誤想し、隨て此時計は自己の中に機械性の外何物をも發見せず、而して其製造者に機械性の外何物をも附すること能はざるべしとの妄説に基けるものなりとす、然れとも一旦時計にして理性を贈與せらるゝときは、是れ既に無情なる機械にはあらずして、一個の合理的有心者なり、故に自ら顧みて自己の機械を熟察するに方り、恰も合理的有心者が之を熟察するとき爲す如く、其智能は自己の如く而かも必しも自己の如き機械を有せざる自己の製造者ありしことを推測せざるべからず、然り而して若し萬一にも此睿智なる時計にして、自己が一個の睿智者によりて製造せられしことを信ずる一切の睿智なる時計を嘲弄するが如きことありとせば、是れスペンサー氏が、自己の創造者を睿智者なりと信ずる睿智なる人を嘲弄すると毫も異なるところなし、而して予は之を以てスペンサー氏が「其議論を一歩進めたるときの預斷

を例示して痛切なるものたらずんばあらず」とぞ思ふ、

且つ以上の誤たる、啻に幾多無法不經の反對論よりして明白なるのみならずして、其一層學術的なる論説を見るも亦明瞭なりとす、ジョン、フィスク氏曰く「睿智の定義は『特殊なる心理の關係と特殊なる外界の關係とを絶へず調理すること』なるが故に、神を以て睿智者と爲すは是れ取も直さず之に一個の外象を附するものにして、隨て其無限性及自存性を破壞せざるを得ず」(Cosmic Philosophy, vol. ii. pp. 394, 395)と、スペンサー氏は曰く「之と均しく無限の空間を通じて無數の世界中に存在し、且つ幾百萬年の間毫も地球に住居せるものゝ稱讃を要せざりしところの彼の勢力が他の讃美を切望するの情を生じ且つ人類を創造して、若し絶へず己の偉大なることを説かずんば、則ち之れに對して憤怒の情を發するとの信仰は消滅せざるべからず、……吾人縱し彼の普通の困難、即ち自己の一旦行ひしことを悔うるの神は其能力に欠くるところあるにあらずんば、其先知に乏しきところありしものならざるべからずとか、又は神の怒るといふことの中には、其希望に反對せる事件の起りたるの意を含むが故に、隨て其方法に於て欠けたるところありしものたらざるべからずとか云ふ如き難問は、之を措て言はずとするも、吾人は茲に一層深遠なる困難に會するものと謂はざるべからず、何となれば此かる情緒なるものは、其他一切の情緒と均しく、獨り有限なる意識の中に存するを得べきものなればなり」と、是れぞ即ち彼のハリソン氏が「神學上の問題に於ける哲學的斷案の約論として、予は正直に之を以て答辯し難き確説と認めざるを得ず、是れ實に不可知説が神學に對する長々しき議論の末、發したる最後の語なり」と謂ひしものにぞある、蓋しフィスク氏は理性及有心性に對して固有的なるものと之れに對して單に特殊偶生なるものとの區別を爲さず、而して人は包圍の中に存在せざるが故に神も亦た然らざるを得ざるに至ると推論したるものなり、スペンサーも亦其祖述者と同一の誤謬に陷り、修辭學的及詩學的の人化説をば哲學的命題の如く見做して論評せり、加之氏は自家獨創なる一種奇怪の有神説を舉げ來り、其上に自己の推論をば設立したるものなりとす、然るに夫のハリソン氏は此くも法外なる誤解よりして推測し來れる議論をば「哲學的斷案の答解し難き約論」(Nineteenth Century, Jan. 1884, pp. 6, 7; and March, 1884, p. 494)などゝ事々しくも言はれたりけり、

難者皆唱導す、神學者流は人間の制限及不完全を移して神に歸すと、試に思へ、理性、自由、公義慈悲、智慧、愛、眞、善、全及福の如きは決して制限にもあらず、又不完全にもあらずして、永遠にして、普般なるものにあらずや、人は之を共有するものなり、而して之を以て神に歸するに何の不可あらん、然れども人間の有限性及不完全性を以て神に歸し、又完全の合理的有心性に對して固有的ならざる人間の特質を移して神の性質と爲すか如き神學者は、世に一人も之れあらざるなり、世若し神は眼を有し、若くは耳を有し、若くは人間の如き欲情を具ふといふことを哲理上の眞理として抱持するか如き人あらば、茲に於て論者は之を嘲弄、論駁するを得べしと雖も、吾人が神に歸するに理性と自由、公義と慈悲智慧と愛及び靈智と能力とを以てしたればとて、論者の說は決して之に對して効力を有せざるなり、若し有神論者が絕對に附するに理性を以てするを人化的なりとせば、夫のスペンサー氏が其の不可知的絕對に勢力と實在との二屬性を附するも亦人化的なりと謂はざるを得ず、何となれば人若し自己の意識に依るにあらずんば、勢力及實在の知識を得ること能はざればなり、之と同じく氏が「意識の中に自己を表顯するの勢力は、唯だ意識外に自己を表現する勢力の狀態を異にして形はれたるまでのものなり」と言ひしは、是れ有神論者と同一に人化說を抱くものと見做さゞるも亦己を得ざるのことにあらずや、

吾人が論者に答辨するの第二の說は、若し有神說を以て人化說なりと謂はゝ、之れと同じく萬有に關する一切の學術上の知識も亦然りと謂はさるべからさることに在りとす、理性を以て普般のものとなし、人を以て其の光を共稟するものと認む、是れ豈に一切學術の基礎たるものにあらずや、若し之れを以て神學の人化的なるを證するものとせば、吾人は又凡の學術思想を以て人化的なりと思惟せざるを得ず、

形而下學は吾人が外界の事物を觀察するに、吾人の覺官上に銘せられたる印象を以てすと雖も、之を客觀的實體の知識として認容す、夫の形而下學が材料とするところの實在物及勢力の知識なる者は、吾人の意識によりて與へらるゝものたらずんばあらず、吾人が實在者の知識を有するは、其始め吾人が自己に就ての知識を有するとと吾人の感官に印せらるゝところの物體の知識を有するとによる、又吾人が

勢力の知識を有するは、吾人が勢力を使用し又は之に抵抗するの意識を有するよりして生ず、ヂュボイ、レーモン曰く「吾人の腦髓は物を陳述するに明瞭を欠くとき、比喩の辭を使用するの修辭的妙智を有す、此の如く勢力とは唯た吾人が自然に有する至剛の傾向、即ち物を心意的に觀察するの傾向より出生せる秘密の產兒に外ならず、吾人勢力及物質なる觀念を察するに、其中に存する二元主義は、彼の神と世界、及ひ靈魂と肉體なる二種の觀念中に存する二元主義と恰も其揆を同ふす、是れ嘗て人を驅りて自己の想像より作り出せるものを以て森林、河泉、岩石、海洋及空氣の中に存在、活動せしむるに至りし彼の必然性の、一層優美なる形容を具へたるまでのものなり」(Quoted by Ulrici, Gott und die Natur, p. 25)と、夫の元子及分子の臆說は、吾人心意の必然性に出づるものにして凡の資性を實在者に歸し、作用を作用者、終には一個の限定的にして不可分的なる實在者に之を歸する吾人心意のものなりとす、且つ活動勢力と區別せる潛勢力なるものを學術上に承認するは、是れ吾人の自由意志に存するところの未發勢力に關する吾人の意識に其源を發するものなり、之と同しく夫の唯物論者が心意を以て物質の性質と爲し、「潛勢的に」原始の純一、

混沌なる物質の中に存在せりと主張するは、又右の理に基かずんばあらず、形而下學に於ける引力及び反撥力は、吾人の物を推し、物を引くことを外界の事物に移したるまでのものにして、宇宙を機械的に說明するの理論は、是れ人間の作りたる機械の概念より生するものたるに過きず、ダーウイン氏は昆蟲の媒働によりて植物花粉の受胎作用を說くとき、絕へず是れ某々の結果を生出「せんが爲め」になされたる配置なりと言へり、彼が此く意匠を表示する人化的の言語を使用する所以のものは、之にあらずんば其の觀察せし事實を精密に言明し得さるを以てなり、吾人にして萬有を探究するときは、其の本精上人化的なるを見さるはあらず、學術家にして時に抽象、普通なる命辭を使用して以て之を避けんと欲する者あり、然れども其此く爲すの度に準して、其語辭愈々色を失ひ、愈々其特殊の意味を剝奪せらるゝを見る、例せばスペンサー氏の如きは生命に定義を下して「內部の關係と外部の關係との不斷の調理なり」と謂へり、然るに關係なるものは際限もなきものなるが故に、此定義は均しく無數の調理に適用すべきものと謂はさるべからず、且つや此文句中にて特別の意味を有する唯一の語なる「調理」といふ語は、心意の作用と爲すの外

何の意味をも有せざるものなりとす、

加之學術が頼て以て物質なる物を認知し、辨別し曉得するところの觀念及び理法は、人心に存する觀念に外ならず、カント曰く、「萬有の成果の成立せんが爲めには、其基礎として觀念の存するなかるべからず」(Kritik der Urtheilskraft, sect. 65) と、カントの前プラトーは既に吾人に敎ふるに、凡そ覺官を以て事物を觀察するとき、理性は全く自家特色の元素を其中より摘み出すことを以てし、而して此元素は此く理性が之を摘出するまで、複雜せる結果の中に混合、隱匿せることを說けり、彼は視るべき世界に於て覺官に表現せられたる一切の事物を探索して、一層深遠にして視るべからざる世界に於ける其根本まで究め到らんと望み、而して此一層深遠なる實躰を究めずんば、完全なる學術と云ふも妄想に過ぎずと主張せり、然り而して近世の學術は實際近古の哲學の此等の說と相符合するものなりとす、蓋し觀察せられたる事實と合理的の觀念とは、共に學術に欠くへからざるものなり、事實は覺官を通じて觀察せられ得べし、然れども學術の成立するは、唯だ觀察せられたる事實が睿智に對して意義を有し、理法の下に秩序、和合を具へ、合理的の理想及目的を漸次に進現し隨て合理系の中に相統一して存在するを知れるときにありとす、此れ物質界及其運動變化が幾世幾代人の覺官に表現せるにも關らず、之に關する學術的の知識は漸次に勤勞を費して到達せられたる所以なり、然るに學術上事實の意義、秩序、進歩、及び統一の發見せらるゝは、唯だ其人間の理性及睿智に存する觀念、原理、理法、理想及目的と相合するによれり、形而下學の眞相は、人間睿智の智力的反映を以て外界の實躰を認知し領會するに在り、故に有神說を人化的なりと謂へば、形而下學も亦然りと謂はざるを得ず、然れども此事實は決して形而下學の眞正ならざることを證明する者にあらずして、却て其眞正の學術なることを示すものたりとす、形而下學は萬有の至要的本性の人化的なることを認め、其合理性を有することを認め、人間理性の觀念、原理を表發し、其眞理と理法とに隨ひ、而して漸進して理性の理想及目的を實現することを認む、

且つ學術は人間の思想、作用を支配する理性の原理が、宇宙各處に存する思想、作用を支配するものと同一なることを自定し、宇宙に觀察せられたる事實に關して此等の原理より推測せる結論は、宇宙を通して何れの處にも確實なる結論たること

を自定す故に、天文學は此等の、原理と結論とを茫々たる大空に懸れる天躰及び系統に適用し、顯微鏡學は肉眼を以て視ることを得さる程細小なる物躰及動に之を適用し、化學は物質の至奥の化合に於ける分子の作用及反應に之を適用し、地質學及古生物學は我地球が遥焉たる古代よりして生物の住居するを得べき世界と成り、且つ其上に生類の發生するに至る迄の事に之を適用し、而して進化説は現宇宙を越へて、宇宙が頼て進化し來りたる原始の混沌たる物質に之を適用せり、其然る所以のものは皆以下の自定に基くものたらずんばあらず、曰く、人間の思想及行爲を支配するの原理は、又宇宙を通して何れの思想、何れの作用をも支配するものなり、曰く、人間の理性に對して妄なるものは、何れの處にも妄にして、何れの處にも實現せらるゝことを能はず、曰く、故に宇宙は其本性、根本の原理に於て人間の理性と同一なる一個、同一の普般理性によりて貫徹、指導せらるゝものなり、曰く、一切の合理的審智は何れの時、何れの處を問はず、其本質に於ては同一種のものなりと、是れなり、此を以てフイスク氏は曰く、「古往今來吾人の思辨上の成効及失敗は皆齊しく吾人に教ふるに、今日世に行はれ、及ひ吾人の地球に於て信用せらるゝ尤も普般的なる原理が、常に吾人の知り得る丈けの宇宙を通して行はるゝことを以てせり、且つ此等の成効、失敗は吾人に教ふるに、過去の事蹟を解明し、未來の出來事を預言せんが爲め、現在事物の實狀に基かさる臆説を構成することを得さることを以てせり、」(John Fise, Unseen World, p. 4) と、

有神説は容易に之を承諾し、而して此く宇宙を貫徹、指導する普般理性は神にして、理性者なる人は神の像に肖たるものなりと論するものなり、

反對論に對する第三の答解は、其一切の人間知識の相對的なるを自定し、隨て其信頼すべからざることを自定し、而して若し其説にして確實ならは、人間は一切何物をも知ると能はさるに至るへしと云ふの點に在りとす、蓋し論者の説は夫の全體不可知説なる普通の教系をば、只た辭を飾り文を巧にして再説せしまでのものなり、何となれば論者の説たる、若し人他人の心意の自己の心意と同一なることを自定し、自己に對して眞正なる數理上の公理及證明の自己の主觀的意識外の何れの處にも又眞正なることを自定し、若くは自己か頼て以て推理するの原理、及び自己が到達せる結論の、自己の主觀的意識の外にも眞正なることを自定するときは、其自定た

る人化的にして小說的に又虛僞なりと云ふものなればなり、

最後に予は神に於けるの信仰が其根基を理性の中に有することに、論者の注意を催かさざるを得ず、吾人は既に此信仰が原始的信仰として自然に實驗によりて發生すること、神の萬有及び人間の兩界に啓示せらるゝこと、神の存在の信仰が人間の理性的有心性の各部に基礎を有すること、此信仰の實際上に必要にして、人類の全歷史によりて證定せらるゝこと、及び此信仰が理性の必然觀念にして、之れなくんば理性が其の必至の問題を解釋する能はざることを見たり、夫れ此くも深遠なる根據を有する、の信仰なるものは、決して單に是れ人化的なりと言ふが如き議論によりて顚覆せらるべきものにあらず、況んや若し此議論にして眞理なりとせは一切の知識を破壞せざるべからざるをや、如何なる信仰と雖も、如何なる敎系と雖も、唯た是れ人化的なりとの難題によりて破壞せらるべきものにあらず、再言せば人の知識といふことの中には普般の眞理、理法、理想及び價値ある目的なるものゝ存在することを含蓄し、隨て宇宙を貫徹支配する理性の原理、理法、理想及價値ある目的の存在することを含蓄すとの難論によりて無効とせらるべきものにあらざるなり、人生素より不朽なれば其何れの處に存し、其如何なる狀態にて在るも、理性に存する此等の原理と理法、及此等の理想と目的とは、必ず人を照さゞるべからず、蓋し此等のものたる、萬人を照す眞の光にてあるなり、

On a far shore my land swam from my sight;
But I could see familiar native stars;
My home was shut from me by ocean bars,
Yet home hung there above me in the night,
Unchanged fell down on me Orion's light;
As always Venus rose and fiery Mars;
My own the Pleiads yet: and without jars
In wonted tones sang all the heavenly height.
So when in death from underneath my feet
Rolls the round world, I then shall see the sky
Of God's truths burning yet familiarly;

My native constellations I shall greet,
I lose the outer, not the inner eye;
The landscape, not the soul's stars, when I die.

第四篇

人の贖罪者として基督によりて啓示せられたる神

予一たびキリストの生涯、事業、教訓を察し、その宏大なれども質樸に、優美なれども、剛毅なる絶倫の德を考へ、其一點の瑕疵なき不思議の完璧たるを見、……古往今來人唯た一たひ之を目擊し、而して全然世界の局面を一變したる此大奇觀を熟察するや、予は決して基督の神たりしやを自ら問ふことを爲さず、予は寧ろ彼れ果して人たりしやと問はさるを得さるの心地す——ラメネス(Lamennais)

嗚呼眞に是れ千古の偉聖なり、神靈の彼に德を成す、何そ一に此に至る、請ふ見よ、其醜實、慰安の辭を、又見よ、其訓誨、約束、希望の語を、其語辭豈に大ならずや、人靈の之か爲めに醒起すること、猶ほ朝露の死に瀕する夏日の草木を蘇活せしむるが如し、其箴言、論說を見るに、何そ其教意の深遠なるや、其紛々たる猶太的俗話を聞くに、何そ其語中に卓見、深識の寓すること多きぞや、且つ其祈禱も、其行爲も、其同情も、其怡順

も、一として至高の神德を表せさるはなし、……此靈魂や、嘗て一たひ肉躰の中に寓せしと雖も、一躍便ち己に百世の師表となり、綿々たる幾千百の歳月を閲して、人類を審判し、吾人の未た夢想だもせざる問題を吾人の爲めに決定し、而して天愛の仙氣を呑吐呼吸す、其神德の盛なる、吾人の稀に見るところなり、否殆んど吾人の他に類例を知らさるところなり、——

セオドア、パーカー宗教論(Theodore parker)

福音書の中に表示せられたる基督を以て歴史上の人物にあらずと爲すが如きは、是れ到底徒勞に屬す、其門弟子及信徒の中、誰れか能く基督に附せられたる訓言を發明し、將た福音書中に啓示せられたる生涯及品性を想像し得ん、——ミル氏宗教論(J. S. Mill)

基督の人物に關して消極的の批評を加ふるの激切なるに從ひ、愈益其教訓と其事業の結果は解明せられさらんとす、

エデルシャイム耶蘇傳、(Edersheim)

多樣の姿狀を具へたる基督教が、世界に於て最大勢力の一たりしのみならず、今尙最大勢力たること、若くは其主要の教義が、通常吾人の德義として認むる凡の者と密切に相關係せること少からさることを拒むは、是れ猶ほ物質界に於ける太陽の作用を拒むが如し、——ヲヤスチス、スチーヴン氏(Justice Stephen)

神の語は幾多の椎擊を耐へ拔きたる鐵磐なり、——ベザ(Beza)

基督教は人間が到達し得べく、且つ到達せざるべからざる究竟點なり、……人間一たび此點に到達するときは、復た還歸すること能はず、且つ吾人は言はさるべからず、基督教既に世に出でたる限りは、再び消滅すること能はず、蓋し該教は神の形躰を有ちしが故に、到底融解し去ることなかるべければなりと、——ゲーテ(Goethe, Wilhelm Meister)

Then souls of men were shaken with emotions new and strange,
And creeds and thoughts were tossing in an agony of change:
The world that had grown weary of its pleasures and its gains,
Felt a tide of youth and rapture rush through its wasted veins;
And life it never knew before was stirring to its core

The proud and puissant empire that was "Pagan Rome" no more.
The seed that was so small had grown a tree that flourished grand,
The leaven in the woman's cake had leavened all the land
Where silver Jordan runneth from the Lake of Galilee.
A narrow kingdom lies between the mountains and the sea;
From its hill-sides red with vineyards, the gentle Syrian wind
Bore the only voice that answered to the sobbing of mankind.
To the cottage of the fisher, to the poor man's mean abode,
The "Desire of Nations" came, the Incarnate Son of God,
The sign that was a sign of shame to pagan and to Jew,
Had become an image glorious, that all men flocked unto;
The martyr at the stake for this esteemed the world but loss,
The emperor victorious won his battles in the Cross.

左ればもろ人の靈魂に新なる情操もく出てけり、信經も思想も變化のくるしみに

悶絶にき、浮世の快樂と利得に倦みたる世の人も、今は新生りし心地して、疲れし精神は手の舞ふばかり勇み立ちぬ、いまゝで聞かぬ生命振ひ起きて、威勢かゝやく「鄙敎の羅馬」は失せ去りけり、最と小き種子は鬱々たる喬木とかはり、婦人の麵包の中の酵は、よろづの國を膨張らしぬ、ガリラヤの湖よりヨルダンの清流馳せ出る處、湖山に介まる小國あり、山腹葡萄園を以て紅なる邊より、習々たるシリヤの軟風につれて、もろ人の慟哭に應ふる聲ぞ聞えにき、藁しほたく蜑の住居にも、薪樵る賤が伏屋にも、「もろびとの願望」なる神の聖子は降り玉ひけり、かの異敎人と猶太の民との恥辱の表徴は、榮光輝く、像とかわり、よろづのたみは其四邊に群ひ來る、名もかぐはしき證者は、磔柱の上にありて、これが爲めには世界をも輕んじ、威名かくれなき皇帝も、十字架によりて戰勝しぬ、——

セシル、フランシス、アレキザンダー夫人
(Mrs. Cecil Frances Alexander)

第十四章

基督によりて贖罪の業を爲し、以て自己を啓示する、神の啓示の至要の特質、

予は本書に於て「基督教證據論」を論述せんと欲するものにあらず、予は唯た基督に於ける神の啓示に在りて、其至要に且特色なる點を論し、救贖の業に於ける奇跡の固有的性質及其可能性を考へ、基督に於て其頂點に達せる神の啓示の統一、不斷なることを述へんと欲す、蓋し基督の現出は綿々たる神の不斷の啓示に於ける一紀元にして、救贖せられたる人類が基督の王國に於て、一層高等なる現世生活の地位に陟ぼされ、是によりて綿々として聖靈の感化の下に永續し、以て將來再び地上に於ける人間の肉生は終を告げ、救贖せられたる人類は一層高等なる地上に登はされ、而して基督の王國は永へに天の榮光を以て輝くの時期に至るものなりとす、

基督教證據論に三大部あり、

(一)歴史上の戴籍及び傳說の證據、

(二)聖書の歴史、及び人類の歴史と該歴史との活關係よりする證據、吾人若し聖書を以て人間に對する神の實歴的行爲、即ち罪惡より人を贖ひ、地上に其義の王國を建設するに於て自己を啓示せる、神の啓示の記錄と爲すにあらずんば、到底之に對する滿足の說明を得ること能はず、

(三)哲理的議論、基督教は歴史としても、教理又は生命としても、理性の根本原理及理想と相和合す、該教は理性の根本眞理と理法とに合し、人の理想と福とを現實するに適す、故に理性の需要を滿足す、該教は他の宗教に存する靈的眞理及衝動力を採納し、之をして基督によれる一層高等の啓示と相調和せしむ、隨て一切の人の靈性上の需要を滿足し、以て其絕對、一統の宗教たる資格を表明す、該教は人生の眞趣及其至高の能事を啓示し、人間進步の眞理法及眞目標を啓示し、且つ聖靈の力を以て罪惡より人を贖ひ、義と平和の王國を地上に建設するところの基督によりて現はれたる神の愛を示し、以て其進步を成遂すべき衝動力と感化とを啓示す、故に基督教は人類歴史の眞正なる哲學に對して唯一の基礎なりとす、何となれは該哲學は根本の事實

として、人類の罪を有するの事實、及び人間の發達進歩して其全と福とを成遂せんが爲めに贖罪の必要なることを認めさるを得さればなり、

夫れ神が罪と罰とより人を救ふの贖主として、基督の中に自己を啓示せりとの事は、聖書に記載せる所なるが、是れ實に基督教の特別至要の事實にして、一切の特別なる基督教義の中心なりとす、予は本章に於て救贖によれる神の啓示の何物たるやを考察し、基督教を釋定するに、其至要、特別なる固有質を以てせんとす、

予か所謂救贖とは、神が罪と罰とより人を救ひ、而して之をして信仰と愛の生活によりて自己の本性に復歸せしむるが爲め行ふ一切の事を云ふ故に救贖なる作用の中には、神が基督によりて世界を己に復和せしむる一切の行爲を包括し、又基督の出現に對して人を準備するところの人間歴史に於ける神の作用を包括し、基督の昇天後に於ける聖靈の降臨をも包括し、而して爾後聖靈の感化によりて、現世に於ける人類歴史の終結する迄繼續する基督の王國の發達をも含蓄し、且つ人間の彼岸に達して、天の休福を享有するといふ該王國の大成至遂の境をも包括するものなりとす、

第一、救贖に於ける神の作用は實歴的なり、

蓋し救贖の歴史的なることは、既に救贖といふ觀念の中に含示せられたりと謂ふべし、何となれは救贖とは人に對し且つ人の心裡に於ける神の作用なるが故に、人類歴史の進途に之れ有るべきものなれば、救贖とは神の作用が歴史上の結果として現はれたるものなり、救贖とは人をして罪を去りて神に歸せしめ、其心を革新して新なる靈の生活を爲さしめ、義と愛の國を人間界に建設、永立し、社會を變して神の王國と爲すことを謂ふ、救贖は歴史に於ける其進歩を其結果によりて啓示することを猶ほ暗濁なる谿流が其水色によりて以て其崎嶇羊腸の谿路を馳せたることを示すが如し、

夫れ基督は歴史上の人なり、其生涯、其教訓、事業、其死、其復活は歴史上の事實として基督教徒の承認する所なり、蓋し神は基督によりて世界を自己に復和せしめんと欲せしなり、且つ「ペンテコステ」の日聖靈の降臨せしことの歴史上の事實たること、及び爾來神の靈は人間の上に活動し、又人間歴史の全程中に行動し、地上に基督の王國を建設して、以て人間現生の歴史が其終結大成を告ぐるの時に至るとは、是れ

基督教の思想なりとす、豈に只だ是れのみならんや、救贖に於ける神の行爲は基督の此世界に出現せしときに始まりしにあらざるなり、聖書を按するに、人の初めて罪を犯せしや、毫も自ら歸順するの運動を爲すことなく、又此く爲さんと欲するの情も見へず、其科によりて神と離れ、悠々として却て其離反を樂めるものゝ如し、然れども神は其愛よりして之を己と和かしめんとを欲したりき、人の犯罪せし當日、神は其創造主より遁れ隱るゝ犯罪者を索め、之を己の許に呼ひ、其罪を罰しつゝも、再び崇拜者として之を納れ玉へり、是ぞ即ち救贖の發端なりとす、且つ舊約聖書は歩を進めて述ぶらく、神は絶へず己れに復歸せる一切の人に恩惠を施し、其禮拜を納れ、之に自己の法律を授け、其預言者によりて彼等を教へ、「イスラエル」に對して其契約の神として自己を啓示し、其王國を永設し、人民を教へて「メシヤ」を望ましめたりと、知るべし、舊約に記述せられたる歴史の全躰は基督に向つて奔注せしものなることを、

故に、基督教は其本性上救贖的なるが故に、必ず歴史的たらざるべからず、基督教は舊約聖書の時代には約せられたる基督なり、新約聖書の時代には世に出でて、苦み、死し且つ昇天せし基督なり、又聖靈の時代には世を支配し、生命を與ふる基督なり、此を以て基督教の眞面目は決して教義にあらずして歴史なり、哲學若くは倫理學にあらずして、人を愛するが爲め、罪より人を贖ふ神の歴史的啓示なりとす、基督教は過去に於ては歴史にして、現在に於ては生命を人に與ふる勢力なり、而して未來に對しては約束なり、(The Kingdom of Christ on Earth, by Samuel Harris, p. 66. see Lectures iii, and iv)

第二、救贖に於ける神の作用は奇跡的の作用を含示す｜ロテ曰く、「奇跡及び豫言は之と本來關係を有せざる啓示に、外部より附加せる物に非ずして、啓示其物に欠くべからざる要素なりとす」(Studien und Kritiken, 1858, p. 23) と、

抑も奇跡の可能的なることは救贖と云ふ觀念の中に含示せらるゝものなり、救贖とは奇跡をして可能的に且つ合理的ならしむるが如き宇宙に於ける神の臨在及び作用、人に對する神の近接、神人間の親密なる交通、靈系及び物系の密接なる關係と云ふ意を含むものにして、正當に之を理解するときは、世人が動もすれば奇跡に附する意味に於て奇跡と見做すことを得ず、却て宇宙の本性及び理法と精密に相

符合せるものと見做さゝるを得ざる作用を意味するものなりとす、

吾人は救贖に關する奇跡を別て、固有的及び偶有的の二とすべし、

救贖に於て固有、根本なる行爲は奇跡的の行爲なりとす、基督の性質及び生涯、其復活及び昇天、及び基督によりて世界を己れに復和せしむる神の一切の歷史の如きは即ち是れなり、且つ舊約聖書に記せるが如き準備時代に於ける神の救贖作用も、又奇跡作用を含蓄するものなりとす、舊約時代に於ては每に神と其人民との間に契約ありて、此契約に於て神は、人民にして神を信じ且つ其律法を守りて神に忠順なるときは、其恩惠と祝福とを與ふ可きことを約せるなり、吾人は神がアブラハムと此契約を爲せること、及びイスラエル人の歷史に於て歷代此の契約の再定ありしことを讀む、イスラエル人は又其豫言者の敎育を受け、以て神の命令、警戒及び其約束を悟れり、イスラエル人の他の人民と異なる所は實に神が之と結べる此契約あるによる、此を以て見れば基督の出現に對する此準備の時代を通ずる救贖の歷史の本色は、奇跡及び豫言なりと云はざるを得ず、

故に奇跡作用は救贖の固有的なる者にして、隨て基督敎の要素に屬する者なりとす、彼の奇跡を撤去して基督敎を保持せんとするが如きは、是れ到底徒勞に屬す、斯る撤去を行ふは、基督敎の思想を變化して、基督によれる歷史上の救贖を思辨的の哲學及び倫理學となす者なり、此餘產たる思辨的及び倫理的の敎義は、縱し其にして一個の宗敎系と稱せられ得べしとするも、之を以て基督敎と稱すること能はざる者なり、故に之を抱持ずるの人は、如何に智深く德高しと雖も、少なくとも眞の意味に於て基督敎徒と稱するを得ざる者なりと謂はざる可らず、

救贖に於て元精、固有なる奇跡の外に、偶有なる奇跡あり、即ち疾病を痊す奇跡の如し、

トマス、アクイナスは前種の奇跡を以て吾人の信仰の目的物となし、後種の奇跡を以て吾人の信仰を堅むる爲めの奇跡と爲せり、基督及び其使徒等が行ひし一切の奇跡は救贖の業を實行し、地上に基督の王國を建設、弘布せんが爲めにてありき、

奇跡に三意あり、其第一は固有、元精なる救贖の作用、若くは偶發なる救贖の作用と云ふことなり、第二は表徵若くは證據と云ふことなり、即ち靈性的にして超物的なる者が物性的の中に通徹することと、地上に於ける神の王國の存在及び人間の中

に活動する神國の作用者及び勢力の存在と、仁愛の業によりて建設せられたる王國の富と、彼奇跡を行ひし基督に能力と權威とを賜へる神の救贖的恩惠の存在及び勢力と、且つ基督の榮光及び未來の顯達、及び其王國の普及との表徵なりとす、第三は異象と云ふことにして、人の注意を惹起し、靈性上の感性を醒覺し、良心を振はしめ、教訓を强行し、從て未信者世界に福音を弘布するの助を爲すものなりとす、

第三、　基督を以て中心とせる神の救贖作用は、一個の啓示を組成す、聖書に錄せるが如く、基督に依り且つ基督を中心とする神の救贖の作用によりて、神は人の贖罪者として自己を啓示す、此救贖作用は即ち啓示なり、

蓋し是れ神が自己の行爲によりて自己を表示する啓示にして、教義言文ともにある訓誡の啓示と異なるものとす、

前某章に於て、吾人は人が唯だ自己の主觀的活動によりて何物をも知ること能はざるを論じたり、蓋し物先づ某の方法を以て人に對して活動し、以て自己を啓示せざる可らず、此啓示ありて而る後心意は其物に反應し、之を知覺了解するなり、其の神に於けるも亦斯の如し、人は唯だ主觀的思考によりて神を知ること能はず、必ず

神某の作用を以て其秘密なる實在を表明し、以て自己を啓示するなかる可らず、抑も啓示なる觀念の至性を察するに、啓示なる者は必ず主として神の行爲によりて之を爲さゝる可らざるを見る、此を以て救贖に於ける神の作用は、救贖者として自己の啓示を組成す、蓋し是れ實際罪と罰より人を贖ふて以て自己を表明する神の啓示にして、言語を以て授けられたる眞理の啓示にはあらざるなり、

此を以て吾人は二重の反對の存するあるを見る、即ち啓示せられたる物躰は重に組織せられたる教義若くは眞理若くは訓誨にあらず、且つ宗教にもあらずして、人の救贖主なる神其者なること、及び啓示は主もに言語、文章の媒介によりて與へらるゝことなくして、行爲によりて授けらるゝこと是なり、啓示とは他行の父が其子女に書を送り、之に教ゆるに家族の性質及び孝道の基礎を以てし、己れが其子女に願ふ所を報知するが如き者に非ずして、却て其子女と共に生活し、其子女に對し及び子女と共に爲す一切の行爲によりて自己を啓示する所の父の如き者なりとす、其れ神が救贖によりて自己を啓示するは、猶ほ太陽が自から其光を見其熱を感ずる一切の物に自己を啓示するが如し、若し太陽にして暗黑裡に生活する人に使を

遣し、言語によりて光の學說を之に敎ゆるとせば、其啓示の晦澁なる果して如何ぞや、

此を以て神が賴て以て其最も充分なる啓示を授る所の語は、基督にありて肉となれる活ける語なり、即ち基督にありて神は世界を己れに復和せしむ、未だ神を見しし者あらず唯だ父のむねにある獨生子これをあらはせり、豫言者馬拉基「メシヤ」に關する啓示を以て日の昇ることとなせり、曰く、「我名をおそるゝ汝等には義の日いでゝ昇らんその翼には醫す能をそなへ」と、且つ希伯來書中にも「メシヤ」を同じく太陽に比し、之を以て神の榮の光輝及び神の質の眞像となせり、されど神が基督によりて自己を啓示するは、其語によるよりも寧ろ其性質及び其行爲によるものなりとす、此を以て希伯來書の記者は簡首に於て、神が其子によりて自己を啓示することを說き、而して徹頭徹尾其啓示の何者たるを說明するを以て眼目となせりと雖も、簡首より簡尾に至る迄一條たりとも基督の訓言を引用することなくして、其性質及び行爲の中に存在する啓示の意義を說明せり、新約全書中の其他の書簡に至ても皆基督を以て充滿し、耶蘇、基督及び十字架に釘せられたる彼の外何をも知るまじと宣言す、然るに其中殆ど基督の語を引用せる者とてはなし、且つ基督の地上にありしや、彼は自己を以て其敎訓の主要なる目的物となせり、彼は自己が豫言せられたる「メシヤ」なることを宣言し、又其王國及び之に入る可き人の眞資格を言明したり、然るに其死に就ては之を說くこと稍寡かりき、是果して何の故ぞや蓋し彼の死其物は自から一個の啓示にして、又代贖の犧牲たればなり、故に彼は勢ひ其事實をして其意義を啓示せしめざるを得ず、彼は救贖を宣傳せんが爲に世に來らず救贖せんが爲に世に來れり、彼は福音を宣傳せんが爲に世に來らず、吾人に宣傳すべき一個の福音を與へんが爲め、罪人に對する神の恩惠を啓示する救贖の大事業を行はんが爲に世に來れり、蓋し此救贖の嘉信即ち福音たるなり、知る可し、神の啓示の新面目は彼の唯理論者が動もすれば論ずる如く、「主の語」にあらずして其性質及び行爲「インマヌエル」即ち我等と共にありと云ふことにあるを、

基督を以て中心となし、而して罪惡より人を贖ふ神の作用は、其啓示せらるゝ所の者を以てするも、又啓示の方法を以てするも、共に一種特別にして、一切の他の啓示と分別せられ、且つ一切の他の啓示に超越す、

彼の自然宗教と啓示宗教とを區別し、又自然神學と啓示神學とを區別する舊來の說は、今や全く其勢力を失へる者なりとす、何んとなれば一切の宗教、及び神に關する一切の知識は、神が人間に對して自己を啓示する某の作用あることを含示する者なればなり、神が萬人に自己を啓示すると謂ふは實に此意に外ならず、是れポーロが羅馬書第一章及び第二章に述る所にして、又亞典及びルステラに於て爲せし演舌中に發表せし所なり、吾人は既に此普般の啓示に付て論明する所ありたり、即ち神は一切の學術上の知識の根本となり、且つ學術上の知識を成立せしむる所の思想の必然原理及び理法の中に、絶對者として自己を啓示し、宇宙に於ては其第一原因、及び宇宙を維持し且つ宇宙の中に活動する勢力として自己を啓示し、萬有の本性及び進路と、人間の本性及び歷史とに於ては、有心的の神たる絶對理性として自己を啓示し、而して人の合理的及び道義的本性と自由とに於ては、公義なる道義上の立法者及び審判者として自己を啓示し、人をして當に合理的なる自由の行動者たるを悟らしむるのみならず、神の公義なる理法を犯して神に對する罪人たることを認めしむる者なりとす、故に基督教は啓示を有するの故を以て所謂自然宗教及び神學と區別せらるゝ者に非ずして、其一種特別なる餘分の啓示を有するが爲に、之と區別せらるゝ者なりとす、

先づ基督教は神が人間の贖罪者として自己を啓示する所の一種特別なる歷史上の作用、即ち基督によりて神が世界を自己に復和せしむることによりて區別せらるゝものなり、案ずるに大初の歷史には神が罪人に對して仁愛の情を有する者として自己を啓示するの作用あるを認む、此作用や幾世綿々として以て基督に向ひて馳せ、而して基督に至て其頂點に達せり、此に於て聖靈は基督に於る神よりして注がれ、罪によりて暗める人の心意を照し、之れをして救贖者として基督に顯れたる神を知らしめ、全世界を通して神の救贖的恩惠の感化及び勢力を齎らし、人間現生の歷史を通じて之を永持し、以て世々代々世界の中より救贖を受たる人間の一社會即ち基督の王國、聖靈によれる義と和と喜の王國を構成す、蓋し此王國は神の恩惠の勢力よりて罪を離れ、新なる靈の生活を爲して神を信じ、又神に事へんと欲する一切の人を包有する者なりとす、

次に基督に於る神の自己に關する啓示は一種特別なる啓示の材料によりて區別

せらるゝ者なり、神は人の贖罪者として自己を啓示す、夫れ人罪によりて子の親に對する信頼及び奉事の本分を忘れ、以て神と自己とを相聯結する所の紐を切斷せるや、隨て其心中に疑問を發せざるを得ず、曰く我れ再び神の恩惠を受け、神と相連れる其正則の狀態に恢復せらるゝことを得べきや、曰く若し神我を容れ能ふとするも、罪人は自己の自由の意思によりて神に歸順するに至るを得べきやと、然るに萬有の本性及び進路に於る神の啓示を見るも、若くは人の本性に於る啓示を見るも、將た基督に於ける救贖の歷史外の人間歷史中に發表せる啓示を察するも毫も以上の疑問を答解す可きものあらず、啻に之を答解せざるのみならず、果して此等の源泉よりして多少の答辯にても得べきものとせば、吾人に示すに罪とは人が其心を頑固にして神と自己との正則なる連合を破り、傲然自負の念を抱きて、受造者たる自己の境遇を棄却し、普般理性に逆ひ、宇宙の根本なる本性に反するものにして、永く人間をして神と自己との正則の連合を恢復すること能はざらしめ、隨て其眞正の全と福とを實現するを得ざらしむとの理を以てするが如し、蓋し神にして先づ某の方法によれる自己の行爲によりて、自ら仁愛の情を抱くことを啓示し、而して罪人すら之に接通し得べきことを現すに非んば、斯る答辯を得ること能はざるも亦明けし、然り而して神が斯る啓示を爲すは唯だ基督によれり、神は基督によりて、罪に對する贖をなし、而して歸順を欲する所の一切の罪人をして自由に復歸せしむ可き道を開きたり、神は基督によりて自己の罪人を憐み、其己れに歸順するときは直に喜びて之に惠を與ふ可きことを啓示するなり、然り而して是れ即ち基督の福音、萬人に對する大なる喜の嘉信なりとす、且つ其啓示たる獨り此に止らざる者あり、神は單に罪人が自己に歸順するとき之に恩惠を施さんとして空しく之を待つことを爲さず、却て積極的に人心を感化して、自から歸順せんとするの情を有せざる罪人を鼓舞指導し、以て之を自己の許に引く者なり、滔々たる人心罪惡によりて暗黑の境と化し、隨て永遠の智惠及び愛の光茲に隱蔽せられたるの時に當り、彼の萬人の眞光たる永遠理性、即ち基督に於る神は暗澹たる黑霧を披ひて其光を傾注し、其精神を照して耶蘇基督の面に於る神の榮光の知識を之に與ふ、且つ人頑然として神を拒み、自力を頼み、自意に隨ひ、己れの榮利を求めて尙ほ罪人たるの時、其願望も情好も顚倒し、其靈性上の感性は萎靡し、其肉情は靈性を壓するの時に當

り、基督に於る神は聖靈により、天の感化と勢力とを以て其許に來り、之を鼓舞して靈の生活を爲さしめ、自ら望んで神に信頼奉事するの生活に復歸し、以て神の子たるの特權と休福とを恢復せんと欲する一切の人に對し、其必要の時之を助く可き天の指導と恩惠とを供給せり、是れ實に亦た基督の福音にして萬人に對する嘉信なりとす、

罪惡より世界を救贖する基督に於ける神の歴史的作用たる右の如し、此作用こそ實に基督教の固有特別なる神の啓示にして、其啓示する材料も、其啓示の方法も共に一種の特色を有す、故に又其優等なる完全、具備により、人間の靈性上の需要に適應することにより、及び其靈性上の更新力によりて他の一切の啓示と區別せらるゝなり、蓋し是れ神の啓示の至上、至完なるものにして、夫のドーナーが「神の自啓の完成は神の肉躰と爲ることに外ならず」と謂ひしは眞に知言と謂ふべし、(System of Christian Doctrine, vol. iii. p. 141, Trans.)是れ即ち肉性の舊範圍を衝破し、吾人をして靈によりて新生し、以て基督に於ける新生類と爲り、又神の子と爲るを得せしむる新啓示なりとす、果して然りとせんか、罪と罰より人を贖ひ、且つ義と恩惠の神國を建設せんが爲め基督によりて神の人間に現はれしことは、是れ人類歴史の中心、根本の事實にして、他の凡の啓示及宗教は之に附屬し、凡て眞正の神學は之に滙集し、而して他の凡の歴史の眞趣と哲學とは皆之に依頼して立つべき者なりと謂はざるべからず、

第四、基督教啓示は歴史的即ち公共的啓示、及び預言的即ち私人的啓示の二種を含有す、蓋し此二種共に事實なり、故に廣濶なる意味を以てせば共に之を歴史的と稱し得ざるにあらず、然れども此區別を細切に示すべき文字なきを以て、予は且らく以上二種の語を以て之を表示することゝ爲すべし、さて歴史的即ち公共的啓示とは一般人間の均しく皆觀察するを得べき救贖作用にして、基督の生涯、事業、死、復活の如き、及び舊約聖書に於ては埃及よりの救濟、及びイスラエル人の歴史に於ける他の神の救贖作用の如きは是れなり、又預言的即ち私人的啓示とは一個人の意識に神を啓示する神の感化にして、之によりて其人は實驗上より神を知り、隨て其神に關して知れるところを他人に説明し得るとを謂ふ、是れ即ち凡の預言の要質なりとす、此の意味を以てせば、一切の基督教徒は聖靈の證を受け、隨て自ら神に對

する證者として、之を預言者と稱し得べきものなり、夫の聖書の預言者等は皆特別なる神の感化を受け、其精神之が爲めに聳動せられて、以て神が自己に啓示せんことを證言せるものたらずんばあらず、故にエドワードは曰へり、「吾人熟々預言者の精神を察するに、彼の天下人類の心裡に潜在し而して特に獨りイスラエル人の歴史に於て强大、眞正、永遠に啓示せられたる至高絶倫の一大器能を具ふるを見る」、「凡ての眞正なる預言者の靈は先つ其心に神の光明を視、而る後神の心意の中に吸取せらる」と、

抑も預言とは單に未來事件の知識と宣言との謂にあらずして、輙ち一個人の意識中に自己を啓示する神の知識と宣言との謂ひなり、イスラエルに於ては預言者は單に未來事件を預言せしのみならず、神の眞理、品性及意志を啓示し、又其義を宣傳するものたりしなり、彼等は「神と人との調停を爲せり」、彼等は萬罪に反對して神を奉じ、神の律法及契約を擁護し人民を警めて其罪に對する審判の將に至らんとするを知らしめ、神の約束を宣言し、而して之をして其神と結びし契約を守らしめんと務めたりき、

預言は救贖に對して至要の關係を有するものなりとす、預言的啓示は救贖作用の固有的なると偶有的なるとを問はず、共に之が一部を組成するものなり、今夫れ人を罪より贖ひ、之を回復して神と正則の連合交通を保たしめ、以て其中に神の充足せる德を充たしめんと欲せば、必ず聖靈の勢力を以て之をして罪を覺らしめ、其心を新にし、其精神を照明、聖化し、神の平安を與へ、勇氣と希望とを其靈魂に鼓吹し、神力を以て一切の善業義行を勵まさしめざるべからず、救贖せられたるものゝ一個人たると社會たるを論せず、共に之に祝福を與ふべき約束あるは、救贖に於ける神の恩惠の啓示と相離るべからざるの關係を有す、抑も基督教徒は神と共に働き、神と交通するによりて自ら其靈魂を教育、發達し、以て耶蘇基督の像に肖るに至るものなり、而して救贖とは此かる基督教徒の作用によりて人類に普及すべきものなるが故に、福音の宣傳と、心裡に基督を有する人々の證言とは、實に救贖なる思想の中に至要にして欠くべからざるものなりと謂はざるを得ず、此意義に於て、預言は基督の王國中に永存するものと謂ふべし、

且つ特別なる神の感化を受けたる人が未見の事を預言するは、救贖を天下に弘布

するに欠くべからざるものなりとす、夫の舊約を遍貫せる「メシヤ」の預言の如きは即ち是れなり、蓋し此預言たる神の感化を受けたるの人が、救贖の中心觀念及ひ中心事實に關し、各種の部分、各種の方法に於て神より受けたる啓示を宣言せるものなりとす、若し夫れ他の特別なる事件の預言に至ては、縱し其救贖作用の全躰に附屬するものにもせよ、決して之が固有の要素にあらずして、唯偶發的のものに過きず、是を以て見れば、神の救贖作用に於ける啓示は歷史的たると同時に預言的にして、乙は常に甲に附屬せるものなりと、謂ふべし、譬へば一軍の主帥は自己の戰畧を實行して以て之を啓示し、且つ之によりて自己の大戰畧家たることを啓示すれとも、其戰畧を實行するに方りては、部下の將校を信任し、其計畫の大意を之に示し、機に臨み、變に應して、種々の部分、種々の方法に於て其詳細の謀畧を之に授けさるを得ず、而して此等委細の啓示は其戰爭に對する固有作用若くは偶有作用なるか如し

且つ夫れ預告の成遂も亦一個の證據たる價値を有す、夫の「メシヤ」に關する預言が基督によりて成遂せられたるは、神が基督によりて世界を救贖するの證據なりと謂はさるべからず、其歷史の發達を察するに、實に能く該預言の計畫と相符合するものあり、舊約の新約を包蓋するは、猶ほ蕾の花を含有するか如く、基督によりて預言の蕾は嫣然たる歷史の花と咲き亂れたり、救贖の傾向を見るに、常に約束といふ空氣の中を進行し、而して將來に於ける一層偉大の事物に關する預言は、唯だ其活呼吸を言姿語狀にて吐露せしに過きず、約束の精神及預言がユダヤ敎を貫徹し、基督敎に至りて成遂し、而して爾後一層雄大なる約束として發達せし事實は是れ即ち該宗敎が神より出てたる宗敎たるの證據なりと謂はさるを得ず、試に見よ、埃及、印度、波斯及支那の宗敎には一も預言なく、約束なきにあらずや、自敎を以て完全無欠のものと思惟し、其の一己の範圍內に限局せらるゝは、是れ凡の個國的宗敎の特質にして將來何の日か其の棺を破り、新生命を受けて復活し、以て其現有の生命に超越せんとの希望を發することあらやん、且つ毫も社會を更新し、過去に優れる未來に進步せしむる樣、之を鼓舞、指導するの命運を有し、活力を具ふることを自ら意識することなし、蓋し此かる發達及進步は其性質上此等宗敎の許さゞるところなり、夫の凡神敎の如きは神を以て森羅萬象と爲すに方り、之を以て皆無と爲すに至

り、唯た永へに轉化して宇宙と爲り、又輪轉して無限の中に沒する無覺の無定的なるものを認むるのみ、其運動や進行的ならずして、永久に環行し、意識なるものなく、睿智なるものなく、自由も存せざれば、愛も智惠も在ることなし、人世は唯此無覺なる無定者が轉化せしまでの者にして、何れの時代も皆同一なる水平に位し、進行せずして反て一樣に均列滯宿し、神は宿命に繫かれ、人は品屬に制せらる其系統たる實に此の如し、何の救主的希望か其中に蓄を含み、花を開かんや、何ぞ芥種の如く成長する神國の希望及預言の其中に存するを得んや、然るに希伯來教の天才とも稱すべきは、其未來に屬望するとに在り、其生命とも謂ふべきは、自己に超越せる某の物に發達し到らんとの期望に在り、該教は一刻たりとも、「汝の裔によりて萬の國民福を受くべし」との大約束を忘れたることなし、而して夫の預言者等は世々代々愈々熱心、充分に此約束を發達し、終に其成遂の期望は人民の生活に普及し、而して夫の「ユダヤ人の蓬萊」と稱するものと爲るに至れり、然るに此救主に關する期望は果して基督によりて成遂せられ、彼によりて約束及ひ希望と、熱心なる博愛と、及ひ愈々廣濶深遠を致す進歩との宗教世に行はるゝに至りたり、然り而して此進歩たる、

此宗教の本精と相符合するものなりとす、何となれは該教には意識と自由とを具へて動作するの神あれはなり、何となれは神は永遠理性なればなり、神は理性と永遠相和合して自由に行動する全能力たればなり、智慧と愛とは其中に存し、罪人と雖も歸順するときは之に恩惠を加ふるの神、人と俱に在り、罪より人を贖ふの神も亦茲に在ます、舊を以て新を計るべからずとの觀念は茲に發し、自由意志の奇跡世界に發現して、人は神の像に肖、之を知り、之に信賴し、又之に奉事するを得、此に於て乎、神の王國、義と平和の統治は地上に現はれ、舊王國は一層善美にして一層活潑なる新王國と代謝し、筌蹄的なりし舊制度は辭し去り、而して基督を信するの徒は、一切の障碍、猶豫あるにも係らず、夫の「水の海を覆ふが如く世は盡く神を知るに至るべし」との上古の預言の必ず成遂せらるべきことを確信するものなり、

加之預告は人に教訓、動機を與へ、勇氣と熱心とを注入し、且つ其動作を指導する者として、救贖に關係を有するものなりとす、基督教徒が基督の王國を擴張して人の福祉を增殖せんと務むるは、其將來必す勝利を得るの時あるを期望すれはなり、彼は此王國の「搖かすべからざる國」たることを知れはなり、

第五、右の如く論し來れは、神が自己を啓示するは人間の媒介によるものなりと謂はさるべからず、

吾人が神の自己に關する啓示を收接するには、靈魂の感性及能力を媒介として之を行はさるべからず、神の啓示として吾人は啻に智力を以て之を認知するのみならす、信頼の情を以て之を收接せざるべからず、啓示を收接するには必す人間の媒介を要す、而して其媒介は必ず智力的たり實行的たらざるべからず、彼の啓示を以て機械的に人に注入せらるゝ者と爲し、之を以て人の有心性及自由の意志を使用し其睿智、信實なる受啓者として之を收接するものと爲さゞるが如きは、啓示の啓示たる本來の意義を破壞し了するものと謂はさるを得ず、縱ひ其啓示にして夫の「アラビアン、ナイト」の啓示の方法の如く、魔鏡の中に未來、遼遠、及ひ未見の者を現はし來るとするも、其觀察者は必す自ら其啓示せられたる者の如何なる者たるやを認知し、其自己に示し及び從來知り得たる人間と利害とに對して如何なる實際上の關係を有するやを解釋せざるべからず、然り而して此理たる如何なる啓示を論せず、皆通用すべき者なりとす、蓋し其啓示にして歴史的及公然啓示たらんか、之が

觀察者は其心能力を以て其出來事を認知、解釋せさるべからず、是れ猶ほ天文學者が天體及び其運行を觀察し、而して其心意の智能によりて之が學術的意義を發見するがごときのみ、若し又其啓示にして一個人の意識に於ける預言的啓示なりとするも、彼は同しく之を認知し、其意義を解釋せさるべからず、然り而して人は其先有の知識に照らし、又現在の狀態及事情と其啓示との關係を考察し、絶へず聖靈の感化の下に在るも、然かも又自己の器能を使用して、以て其啓示を認知、解釋せざるを得ず、さて神の啓示は人の道義性及靈性に關するものなるが故に、其收接及解釋は人の道義上及靈性上の狀態如何によりて異らざるを得ず、是れ基督が其敎を種子に譬へ、其種子の落つる地の肥瘠によりて成長を異にすと謂ひし所以なり、啓示は必ず自ら人の心裡に固著し、且つ其根を下すべき其の土壤を發見せざるべからず、不らずんば其啓示たる不完全なるものなりとす、基督敎と他敎と異なるところ茲に在り、他敎に在りて所謂啓示なるものを觀るに、毫も人の智性、道義性及ひ有心性を通じて授けらるゝものにあらず、彼のピシアの如きは神其の心裡に憑在し、精神狂旺して我れ我にあらざるに至らずんば、決して其神託を宣告せしことなし、基

督教の若きは則ち然らず、其教ふるところを聞くに、曰く「預言者の靈は預言者に制せらる」と、

且つ啓示を人に傳達せんと欲せば、又人間を媒して之を爲さゞるを得ず、預言を人に傳達するは、先づ之を接應せる預言者之を爲す、而して歴史的の啓示も預言的の啓示も、共に之を接應したる人々によりて萬人に傳達せらるゝなり、神の靈により て照明、燃化せられたる人心にあらずんば、決して神が基督によりて萬民に自己を啓示せる啓示を傳達すること能はず、故に基督は「汝等行きて云々」と命じ玉へり

神の救贖作用、及び此作用によりて授けられたる、救贖者としての自己に關する啓示は、勢ひ進歩的ならざるを得ず、蓋し是れ神に於て不完全なる點あるが故にあらずして、此啓示を受け、此啓示を傳達、永持する人間の有限にして不完全なるに因る者なりとす、是れ聖書の大部分が人間普通なる行爲の歴史にして、又人事に於ける神の普通の摂理の歴史たる所以なり、蓋し啓示は天の寶玉なり、人間歴史は其の必要の附屬品なり、故に主要なる救贖作用には必す常に之に伴ふて人間と其の作用とありて以て其の作用を人類に結合す、此を以て啓示は到る處として其時代の歴史上の出來事と相關係し、其授けられたる時代及邦國の臭味を帶ひ、且つ之を收接せる各個の預言者若くは使徒の特質を混ず、夫のパウロの書簡の如きは之を贈りし教會の現狀に應して錄せられたるものにして、聖書は各種の文學を包有し、傳紀あり、歴史あり、教理あり、訓言あり、詩歌あり、書簡あり箴言あり、又譬喩を有す、是を以て啓示は必ず進歩的ならざるを得ず、試に思へ、近世の文明に於て尤も尋常普通なる事實及觀念は、決して上古の言語を以て人に傳達するを得ざるにあらずや、試に預言者ありてイスラエルの王ダビデの宮廷に立ち、紀元千八百八十五年四月四日埃及に於て大砲小銃を以ての戰爭ありしが、同日午後二時英軍爆裂彈を發して敵軍を敗りたり、然るに此事件は電報によりて亞米利加國の紐育に報知せられしが、其報告の達せしは同日同市に於て時計未だ二時を報ぜざる時にてありき、此くて同日午後新聞紙は之を印刷に附し、而して其一は滊車にて紐育より七十哩を隔てたる一市に送致せられ、同夜七時其市の人は之れを讀みたりと云ふことを預言するとせば如何、誰か之れを了解するものあらんや、是を以て之を觀れは神の啓示は必す進歩的ならさるへからず神は自己か其作用を及ぼし、又賴て以て自己を啓示

すべき人間の知識、狀態接應力に應せる丈けより早く自己を啓示すること能はず、是を以て基督の出現する前には準備的啓示なかるべからず、人類は此一層廣大なる啓示を收接するを得るよう敎育せられざるべからざりしなり、救贖作用は人間の現在の能力及狀態に調和せしめさるべからず、久しく暗黑の中に在りて衰弱せる眼目には、徐々に光に接せしめざるべからず、俄に赫々の光を之に觸れしむるときは、唯た之を眩暈、盲殺するに過ぎさるべし、大監督ウエートレー此啓示の必ず進歩的ならさるべからさることを譬へて、小兒の幼少の時より壯年に至る迄常に之に書狀を贈る父の如しと謂へり、然れども若し之を以て其子と俱に生活し、其行爲及其訓誡、敎育により、父として自己を啓示するの父に譬へ、且つ其子は幼時より壯年に至るまで常に其の折々に收接、了解せし父の行爲、訓誡及敎育の日記若くは記錄を備ふることに喩へなば、更に一層適切なりしなるべし、此の如く記錄せられたる父の子に對する啓示は必ず進歩的ならさるべからず、父は其行爲、訓誡、敎育を漸次發達する子の能力に適應せしむべく子は其折々に有せし丈けの認知、表告の能力を以て之を記錄し、之を其當時の事件、事情に適用して記述すべし、左れど此運用

によりて父は進歩的に子を敎育して、益々廣大、高尙なる敎育を受け得べき能力を具へしめ又其子を敎育する所以の意と、其父親たる品性及び愛とを愈々充分、完全に理會するを得せしむるものなりとす、

何れの宗敎も皆其啓示に基けることを主張せさるものなし、然れども此等宗敎の所謂啓示なるものを見るに、其啓示にして神の作用の傳說たる限りは、一として其神が靈性上人の品性を更新し、且つ神人の間を調停せんとの統一せる計畫を有し、又仁愛の行爲を施して千古渝らさるものあるを見ず、之に反して基督敎の啓示は世界に神聖なる生命を現發し、人類歷史に神力の加はりて、以て進歩的に神が人の贖罪者たることを實現し、基督の現出に於て果を結び、之によりて神は世界を自己に復和し、以て聖靈によれる義と和と喜の王國を安然に建設し、而して漸次之を地上に擴張する神の顯現なりとす、

抑も啓示其物は目的にあらず、神は罪惡より人を贖ふ其仁愛の作用によりて啓示をなす者なり、故に啓示其物は目的にあらずして、罪より人を贖ひ、且つ漸次に進歩して人類の爲に一切の福を實現する所の神の王國を擴張することに附屬せる者

なりとす、蓋し啓示せらるゝ者は神其者なり、神は其性質を啓示することを得るの前既に其性質の如き者にてあらざる可らず、而して救贖に於ける神の作用とは神が其性質を人に啓示するとに外ならず、さて神の永遠なる德性は義と恩惠とを包括せる愛にして、救贖とは罪人の心裡及び罪人の上に其永遠の德性を自然に自由に發動するとなるが故に、神は罪より人を贖ふことを得るなり、此救贖作用に於て神は永遠の愛として自己を啓示す、故に啓示は其救贖作用に對する偶有的作用なり、何となれば若し神にして果して人間に對して作用を爲すとせば、必ず其永遠の德性を發動せしめざるを得ざる可く、而して之を發動せしむるときは自ら、永遠の愛として自己を啓示す可ければなり、且つ啓示は救贖の意匠に附屬する者たらざるを得ず、何となれば其愛の啓示は人をして其罪と厄とを離れ、以て神と相和合せしめんが爲め其救贖作用を行ふに當りて授けらるゝ者なればなり、

第六、聖書は罪より人を贖ひ、聖靈によれる義と和と喜の神國を建設せんが爲め、基督を中心とせる神の作用の記錄なり、聖書は其物自身に啓示にあらずして、神の感化を受けたる人が啓示を記錄し、其啓示の事實を保存せるものなりとす、

聖書は啓示の保存に對して必要欠くべからざるものなり、是れロセの確言せる所の如し、曰く、「啓示は夫の暫く輝く彗星の如くなるべからずして、大陽の如く蒼穹に定坐し、以て全地球上殘る隈なく赫々の明光を注射せざるべからず、故に啓示は人類の存在及生活の中に自己を組織し、歷史上の一勢力となり、以て世界歷史の發達に於ける一要素と爲らざるべからず、然り而して其目的を達せんが爲めには、之を記錄せざるべからざるなり」(Zur Dogmatik, pp. 121, 122) と、神國の成長するに隨ひて、之を建設することに於ける神の過去の作用、殊に神が基督に於て現はれたりとの知識は、必ず永く保存せられ廣く弘布せられざるべからず、是れ即ち基督敎聖書の錄せられたる所以なり、聖書は其物自身啓示にあらずして、啓示の記錄なり、其保存に對して至要なるものなり、「ウエストミンスター」會議の書記の一人なるジョン、ウオリスは曰へり、「聖書は其物自身には光たるよりも寧ろ提燈たり」(Sermons, London, 1791, p. 127) と、眞に然り、然れども人若し其の一層明かに輝かんを欲して其の提燈を破壞するか如きことあらば、反て之が爲めに其の光を吹き消さるゝに至るべきのみ、